

151)。遺構内は、段を成してすり鉢状に窪む楕円形の落込があり、さらにその底面に深さ約20cmを測るピット状の凹みを2箇所に検出した。

埋土は下段の落込み部分に炭化物を多く含み、上段の下半に焼土ブロックが顕著にみられた(図151、図版58)。中央の落込みに集中するように、焼土ブロックを含む層から大量の土器が出土した(図151下、図版58-3)。甕はほとんどが第V様式形であり、低脚気味の碗形高杯や古手の有稜高杯・手焙形土器等から、05007土坑よりわずかに古い様相が看取される(図152、図版321~324)。

本土坑では、遺物内に完形品の混じる割合が高く、特異な遺構形状や埋土内に見る焼土ブロックの多さから、土器焼成等に関連する遺構であった可能性が高いと考える。

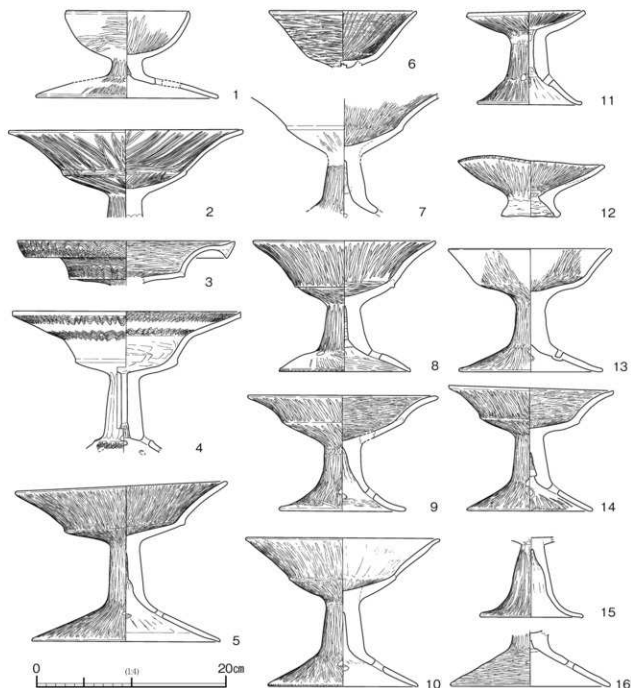


図141 05006 流路・落込 出土遺物(5)

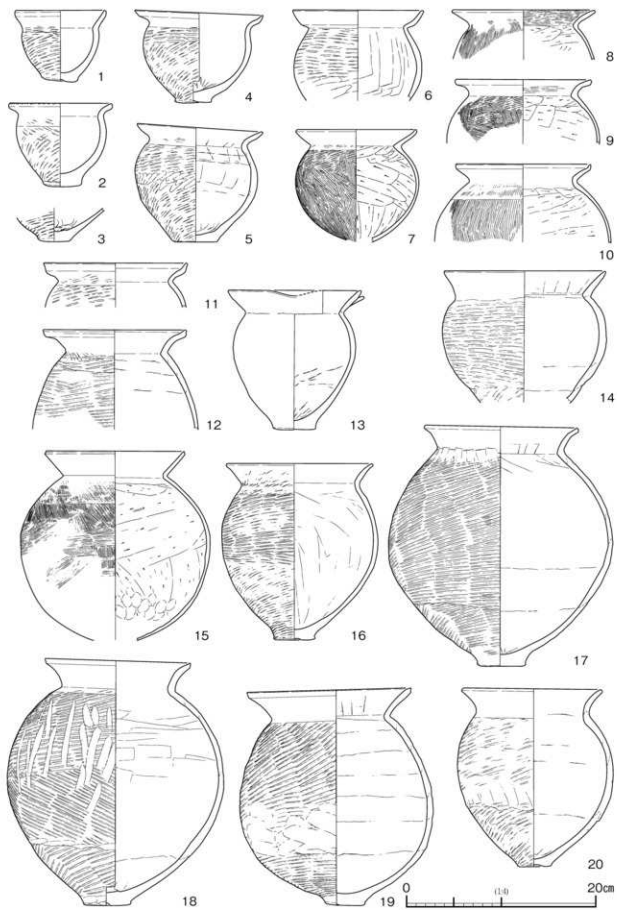


图 142 05006 流路·落込 出土遺物 (6)

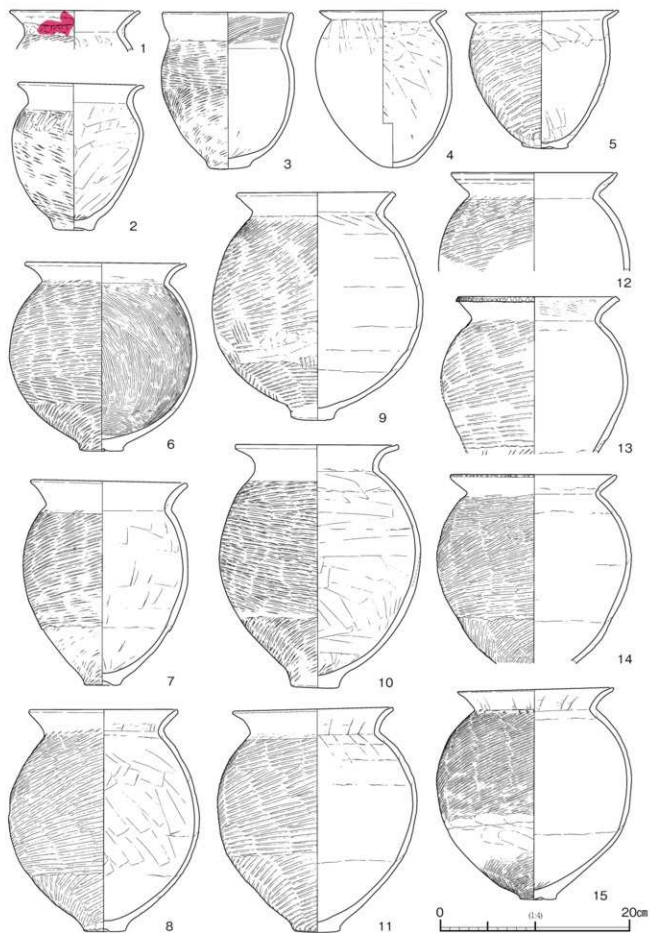


图 143 05006 流路·落达 出土遗物 (7)

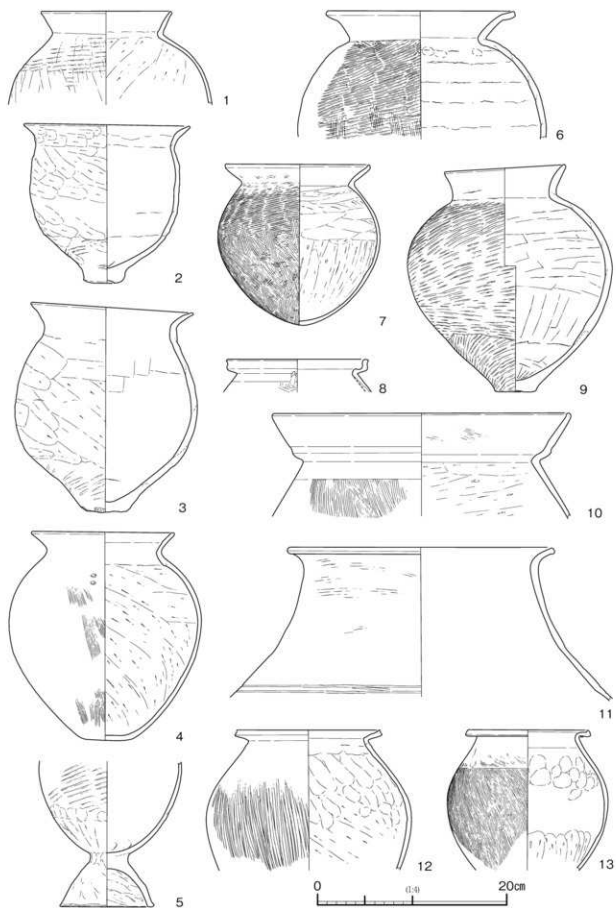


图144 05006 流路·落达 出土遗物(8)

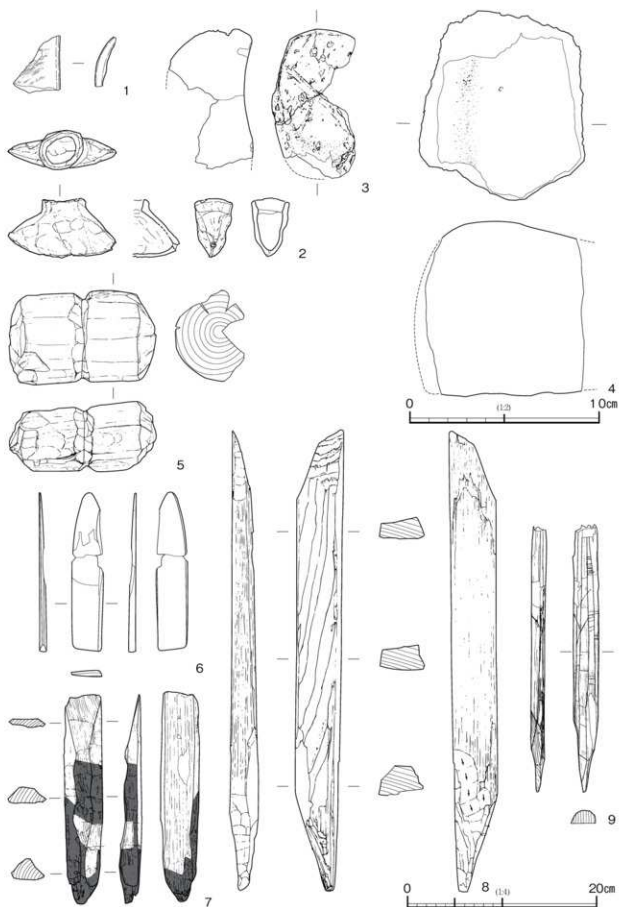


图 145 05006 流路·落达 出土遗物 (9)

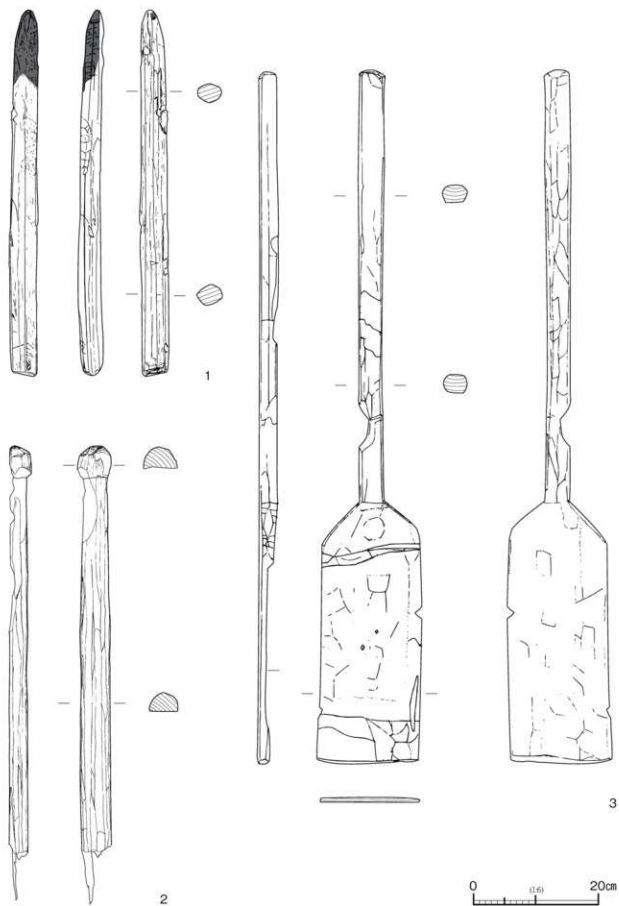


图 146 05006 波路·落达 出土遗物 (10)

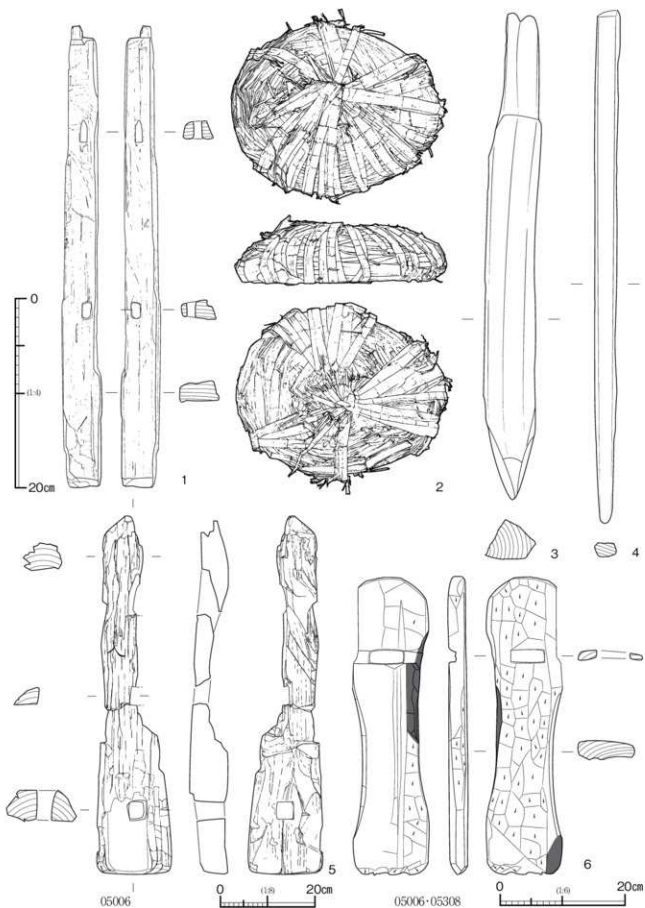


图 147 05006流路·落込 出土遺物 (11)、05308溝 出土遺物

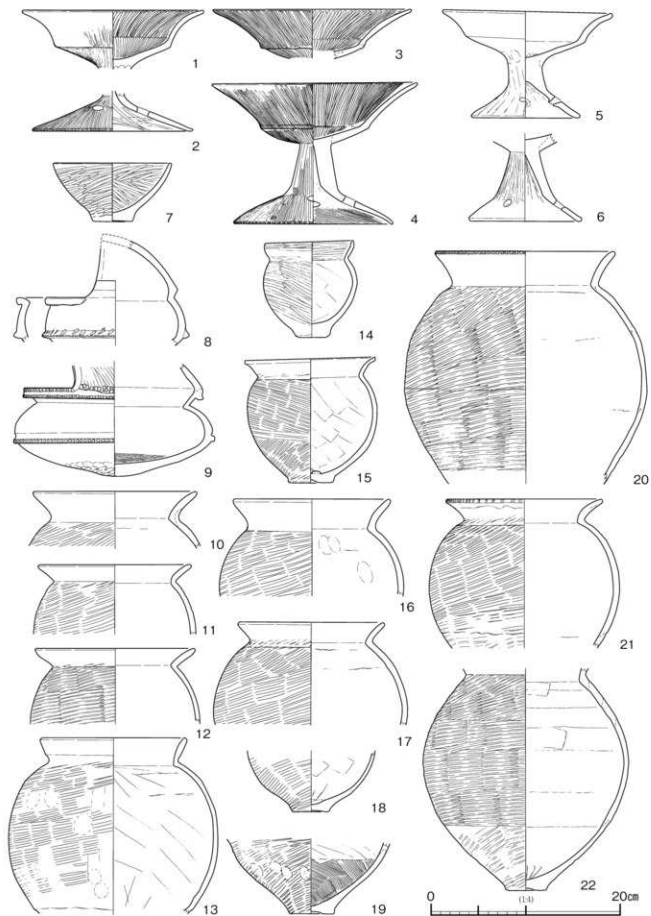


图 148 05007 土坑 出土遗物



05009井戸は、05043他の竪穴建物群より南へ約5m離れた地点に位置する（図150）。南側を攪乱されるものの、深さ約1.3m、上端が隅丸方形、内部が直径約1.9mの円形を呈する井戸であることがわかった（図153、図版59）。埋土の下半は水成堆積が認められ、遺物がまともに出土した。第V様式甕がほとんどであるが、有稜高杯や加飾の複合口縁壺から庄内式期古段階に比定できる（図154）。すべてが個体に復元ができない点において、05007土坑に類似する。なお、破片ではあるが、7のよう



図 149 05007土坑 平・断面

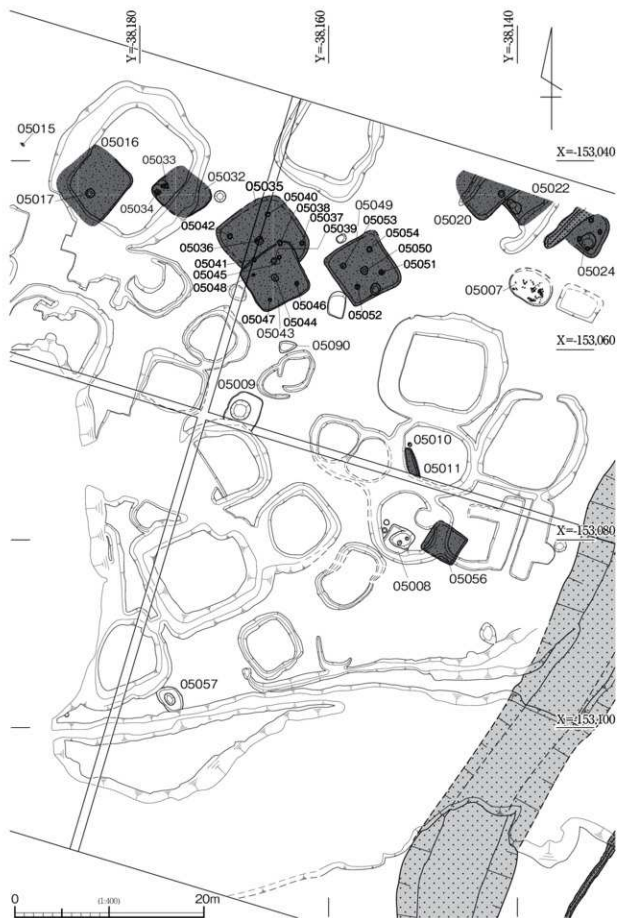


图 150 調査区中央 竪穴建物群 周辺遺構平面

にS字状口縁甕の底部が出土している。外底部に胎土と異なる粗い砂混じり粘土を貼付することから、東海地方からの搬入品であることはほぼ確実であるとの教示を得ている。

**05010**ピットは、05008土坑の北側に位置する（図150）。直径約40cm、深さ約14cmの円形を呈する（図155）。すぐ南側には直線的にのびる落込の肩を約3.2mにわたって検出した（図150）。この落込は、西・南側とも後世に墳墓の周溝掘削に伴う攪乱を受けており、竪穴建物の痕跡である可能性は高いものの、全貌が明らかではないため、**05011**土坑としておく。

これらのピット・土坑からは遺物が出土した（図156、図版326）。1は**05010**ピット、2は**05011**土坑からの出土遺物である。2は他と大差ない第V様式系甕である。1は他の遺物に比較すると明らかに新しい土器であり、上層からの掘り残しであったと思われる。

**05015**暗渠は、竪穴建物群の西側に位置する（図150）。1個体の甕を縦に半載し、一方の底部と片方の口縁部を接続したまま、うつ伏せた状態で出土した（図157、図版59-3）。接続した土器の両端の長さは約47cmを測る。本遺構面では平面・断面ともに掘形は確認できず、土器の下面にわずかな窪みが認められるのみである。

検出した段階では、完形品2点を上下に並べたものと考えたため、土器棺ではないと判断した。甕は丁寧に半載されていることから、これに機能を持たせたことに間違いはないと考えるものの、用途等は不明である。適当な名称が思い当たらないため、覆い隠すものとして暗渠と仮称したものであり、本例の用途とは無関係である。被覆するという観点からは、遺骸等の上部に被せていたものが、内容の腐朽によって内側に落ち込み、現状では接続したもののようみえたとの推測が可能である。掘形も上面からであったとすれば、見落とした可能性もありうる。甕の下部からの出土遺物は確認できなかった。本例のような埋葬方法を管見では知らないため、可能性の一つとして提示するのみとする。

使用された甕は細かいハケ目の残る異形甕であり、本来の用途に使用した後、打ち欠きによって丁寧に半載される。復元した結果、甕に欠如はほとんどみられなかった（図158、図版327）。

**05017**土器集積は、上記暗渠の南西に位置する（図150）。15号墳の下層、第5-2層の除去中に、数個体分の土器がまとまって出土した（図版59-4）。土器集積の東側において直角に曲がる落込の一部を検出し、**05016**竪穴建物とした。しかし、落込の7割以上が失われており、それ以外の遺構もまったく残存しないことから、推測の域は脱し得ない。出土した土器には鉢・高杯・甕・手焙形土器などがみられる（図159、図版327）。このうち、4の手焙形土器は刺突文や飾描文により加飾されており、特異な雰囲気を持つ遺物である。後述する竪穴建物では遺構内部から遺物の出土する例が極めて少なく、もし本遺構が竪穴建物に伴出する遺物となれば希少な例であり、前述までの土坑や井戸との時期差がないことを推量する根拠となりうる。

**05020・05022・05024**の竪穴建物は、北東側の建物群の中で最も北東に位置する（図149、図版59-5）。各遺構とも大部分が攪乱や調査区外のため全体的な形状は不明であるものの、いくつかの要素において建物としての特徴を認められたことから竪穴建物群であると判断した。

**05020**竪穴建物は最も西側に検出した1棟であり、全体の南側半分のみが残存する（図160）。残念ながら建物の一隅を確認しただけであり、建物全体の規模等は不明である。遺構底面は検出面から深さ約20cmを測り、埋土最下層が均質なシルト層で、平坦な同層の上面から大量の炭化材が出土した（図版59-6）。材が炭化した原因はいずれも炎熱によるものであり、本来の形状は推定できないものの、検出状態では幅10cm前後、厚さ5-10cm、1.5m以上の板材を呈する。これらの炭化材の出土状態は放射

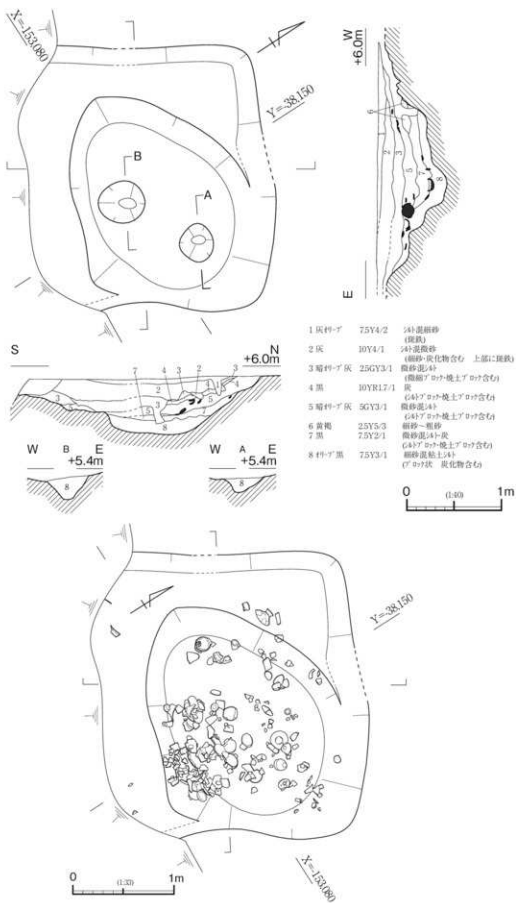


図151 05008土坑 平・断面、遺物出土状況

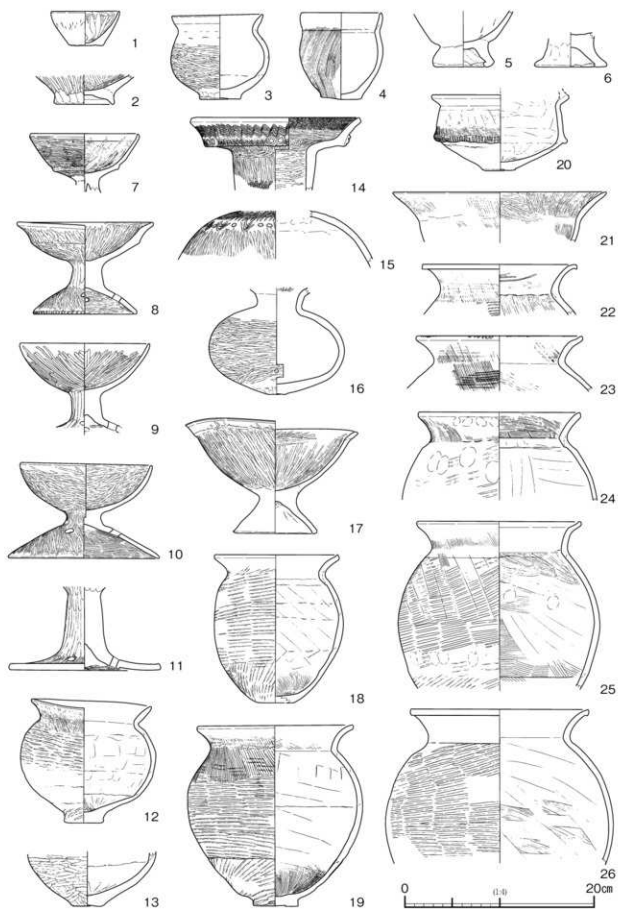


图 152 05008 土坑 出土遗物

状に広がる様子が取られ、その中心位置を推測することが可能であった。これを建物の中心とした場合、算出できる落込み部分の規模は縦5.2 m、横7.0 mである。また、建物の中央付近からは、炭化材に混じて焼土塊がまぎって出土した。床面より上部に散乱する状況から、床面が被熱を受けて変質したものとは考えにくいことから、建物の構造材を補強・固定するために使用された粘土ではないかと推測する。おそらく本建物が延焼した際、構造材とともに屋内に崩落したものであろう。これらの残滓を除去すると、床面において極小穴やピットを検出したが、残りが悪いので詳細は不明である。直径10 cmに満たないようなものは建物構造に関連する遺構とは考えにくく、住居内での何らかの作業に伴って

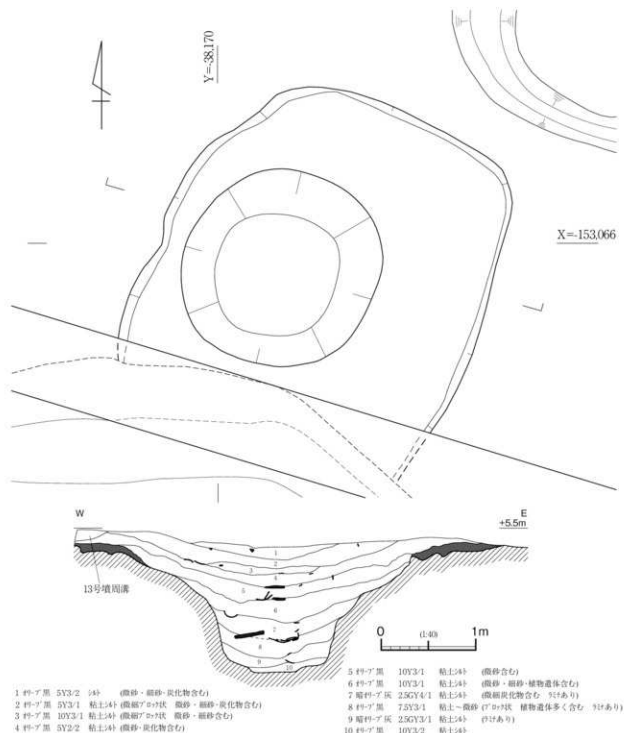


図 153 05009 井戸 平・断面

掘られたものと推測する。

05022竪穴建物は、05020竪穴建物の東側において検出した、長さ約2.5 mを測る直線的な北東方向の落込みである（図150）。西側を05020竪穴建物、東側を上面の溝によって攪乱されているため、詳細は不明であるものの、検出した落込みが05020・05024竪穴建物の一辺に平行すること、遺構埋土に炭化物が多く含まれることから、05020竪穴建物に先行する建物であると判断した。落込みのすぐ内側において土坑を検出したものの、遺物等の出土はみられなかった。

05024竪穴建物は、上記2棟の東側に位置する（図150）。北西側を後世の溝により攪乱されているために全体的な形状は不明であるが、検出した部分では、直線的な南西側の落込に対し、東側が全体的に円弧状を成すという歪な形状を呈する（図161）。ただし、これは検出時の形状の捉え方によって微

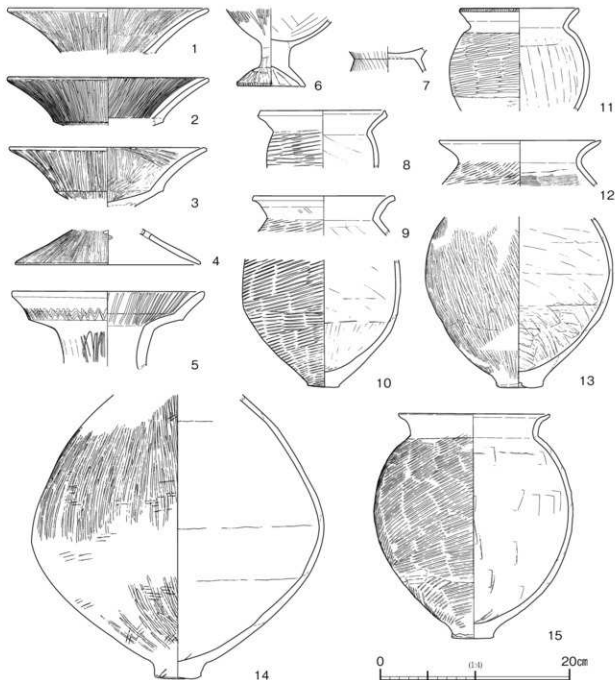


図154 05009井戸 出土遺物

妙に変化した可能性があり、作図時期の違いによっては隅丸方形にも記録されている。特に南側には土坑が掘削される等、後に形状を変化した可能性もあり、一概に決定することもできないのが実状である。南西側の直線的な落込を基準とした場合の規模は、残存状態では北西南東に約3.1 m、北東南西に約3.9 mを測る。平面測量図に基づいた場合には、略測ながら、一辺約4.5 mの方形に復元することができる。落込部分の埋土は炭を多く含む黒色土であり、検出面以下では床面に相当する層界は認められなかった。あるいは、同埋土上面において多数の土器片が出土したことから、検出面が床面そのものであった可能性も考えられる。

落込の南側隅において、不定形な土坑を検出した（図161、図版60）。同遺構は先述の埋土上面から

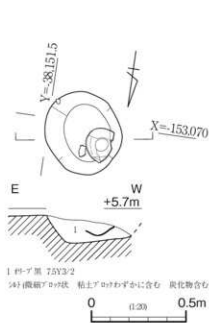


図 155 05010 ピット 平・断面

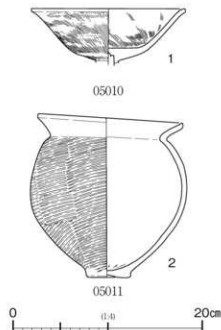


図 156 05010ピット、05011土坑 出土遺物

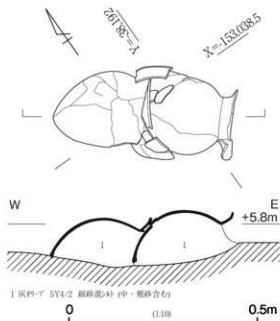


図 157 05015 暗渠 平・断面

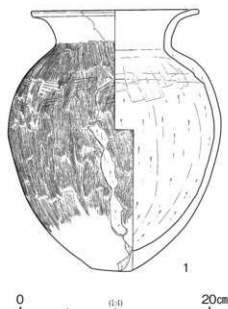


図 158 05015暗渠 出土遺物



掘り込まれており、なおかつ遺構底部に同じ土壌が流れ込むことから、黒色土が形成された後に掘削され、しばらくは凹んだままの状態であったと考えられる。したがって、黒色土を床土とし、炭を含む本土坑を05025炉と判断する。ただし、黒色土上面が床面となるかは不明であり、単に視覚的な判別が不可能な場合もあるため、ここでは言及を避ける。05025炉は東西南北とも約1.5 mを測る不定な方形を呈し、断面形は深さ約35cmの楕円状である。炉内の複数の埋土には、いずれも炭や土器が含まれており、特に最下層では顕著にみられた。壁面等に被熱の痕跡はほとんど認められなかった。

床土および炉内埋土を除去した最終掘削面において、ピット4基を検出した(図161)。05025炉の南西に2基、やや離れた北東側の底面に2基、いずれも南西側の落込方向に平行するように配されている。ピットの直径は25cm前後を測り、深度はなく、ほとんど痕跡程度にしか確認できなかったことから、掘り込み面は上部であったか、据えただけのものであったと考えられる。あるいは、全体平面上では端に偏った位置にあることから、建物構造に直接関連するものではなく、補助的な柱やそれ以外の目的のものであった可能性もある。

建物全体の形状は不明であるが、少なくとも05025炉は壁面に接した建物の隅に配置されている。本調査区において堅穴建物の全形が明らかになる例は少ないものの、炉を建物の端に寄せる型式としては他に05032堅穴建物が挙げられる。

遺物には高杯・鉢・壺・甕等がみられる(図162、図版328・329)。1～8は堅穴建物の検出面、

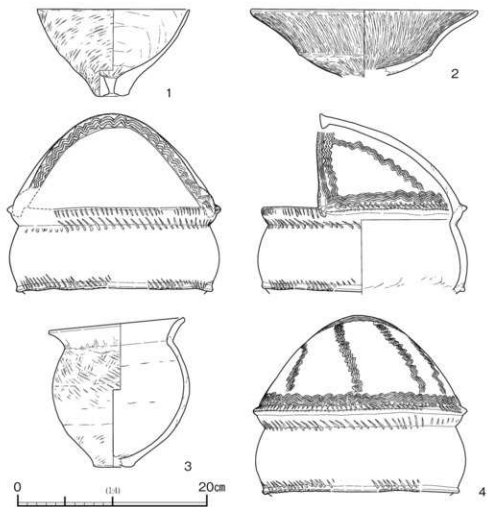


図159 05017土器集積 出土遺物

9～13は炉内から出土したものである。1～3の高杯・碗形高杯から、庄内式期最古段階に比定できる。8の細頸壺は、破片毎や破断面に煤が付着しており、破碎した後から被熱を受けたことは明らかである。4は下層からの混入品として考えられるもの、出土層位が床面であれば、故意に持ち込まれた可能性もある。11は頸部から肩部にかけて直線的に長くのびる壺であり、胎土が特徴的なことから、四国地方からの搬入品と考えられる。12・13の甕には煤が付着しておらず、煮炊に使用されたものではないようである。特に13の体部下半には焼成後に施された穿孔が認められる。

05032竪穴建物は調査区中央の建物群の西寄り、05016竪穴建物の東側に位置する(図149)。建物のほぼ中央が後世に15号墳の周溝による攪乱を受けており、また、北側4分の1は調査に際して検出されなかった(図163、図版60)。建物掘削の上部も第5～2層の耕作による攪拌のために著しく削平されており、わずかな凹みを確認するに止まった。検出状況によると、建物の平面は隅丸方形を呈したようである。部分的ではあるものの、竪穴部分の四方の法面を確認することができたため、掘形の規模は長辺が4.6～5.4m、短辺が約4.4mであることがわかった。竪穴部分に残存する土層は、炭化物を含

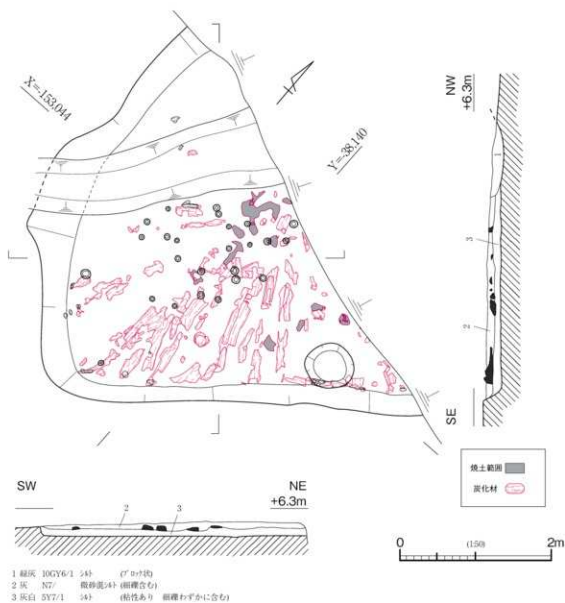


図160 05020竪穴建物 炭化材(検出)出土状況・断面

む厚さ約10cmの砂土の1層だけであり、同層が床面の基盤であったかどうかは不明である。ただし、後述する炉や土坑を同層の上面において検出したことから、いわゆる埋土ではないことは明らかである。

05033炉および05034土坑は、いずれも竪穴建物の東隅に検出した(図163)。

05033炉は、壁面より1mほど内側の地点を中心に、横約80cm、縦約50cmの範囲に堆積する炭を検出したものである。炭層の深さは約10cmを測るが、炭化物の混入は地下約22cmまで認められる。上部が削平され、また壁面との間には上面からの耕作痕が攪乱するため、詳細は不明であるが、周辺に被熱による焦土等がみられないことや建物の端に片寄って配置されることから、作り付けの竈に伴う炭溜りではないかと推測する。

05034土坑は、竪穴建物西隅の壁面に接する状態で検出された。上述の05033炉からは、南西に約1m離れた位置にある。長径約70cm、短径約55cmの楕円形を呈し、深さ約23cmを測る。埋土は建物上部を覆う耕作土と同一であることから、建物存続中は開口していたものと推測する。土坑壁面等に被熱の痕跡は認められない。遺構内部からは礫石とほぼ完形の小型甕が出土した。遺物は土坑底面に接しておら

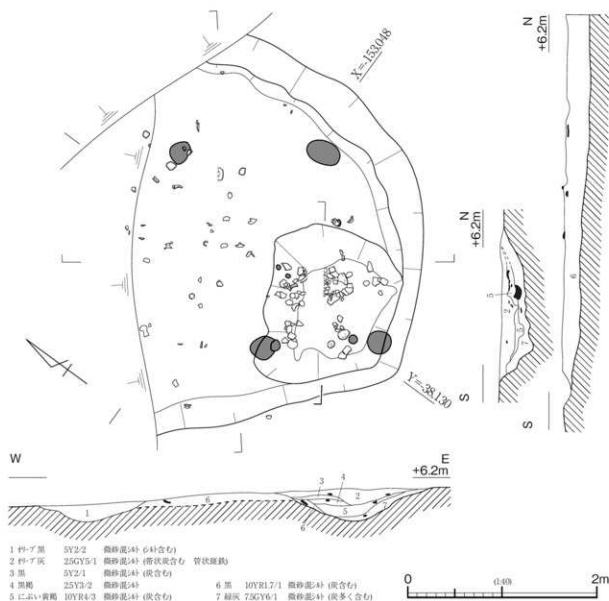


図161 05024竪穴建物 05025炉 平・断面

ず、埋土中位に検出されたことから、元々その場に存在したのではなく、建物の整地作業等に伴って偶然混入したものと思われる。

遺物としては、前述の05034土坑から出土したもの以外に、堅穴建物の埋土からわずかな遺物がみつかったのみである（図164、図版329・330）。1は堅穴建物から出土した生胸西麓産の加飾壺片である。肩部の張り具合から、かなり大型の壺であったことが想像される。2・3は05034土坑から出土した遺物である。2は小型の第V様式形甕である。3は砂岩製の自然礫である。半裁した割れ口は平坦を呈し、対する自然面は、頂部を中心に赤変した多数の剝離を確認した。煤の付着はみられないことから、おそらく直接火にあたる架台として使用されたものと考えられる。

05035堅穴建物は、05032堅穴建物の東側に位置する（図149）。調査区中央の建物群のほぼ中央に位置し、05043堅穴建物により先行することが明らかである。建物隅は2箇所しか確認できなかったものの、平面形は長辺約7.7m、短辺約7.2mの隅丸方形に復元が可能である（図165、図版61）。

平面図としては堅穴部分の上下端を記すが、これは踏込みと思われる斑状の土砂を除いた形状であり、断ち割り断面を確認した結果、図化し得る土層は検出できなかった。段掘りした建物底面において、炉とピットを検出した。

なお、いずれの遺構からも図化に値する遺物は出土しなかった。

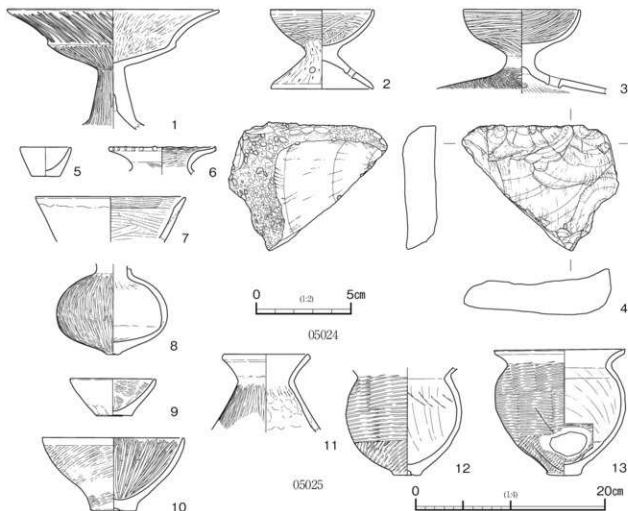
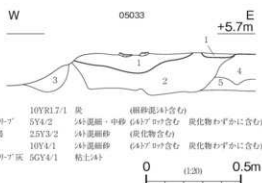
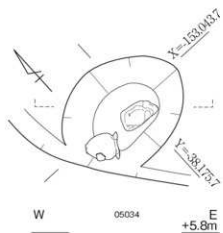
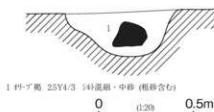


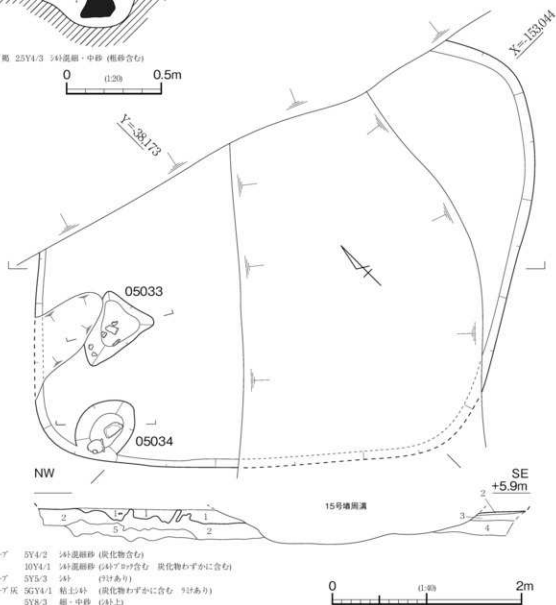
図162 05024堅穴建物 05025炉 出土遺物



- |        |           |           |                    |
|--------|-----------|-----------|--------------------|
| 1 黒    | 10YR1.2/1 | 炭         | (細砂混(4)含む)         |
| 2 灰砂子  | 5Y4/2     | 4(4)混細・中砂 | (4)フコク含む 炭化物わずかに含む |
| 3 黒褐色  | 2.5Y3-2   | 4(4)混細砂   | (炭化物含む)            |
| 4 灰    | 10Y4-1    | 4(4)混細砂   | (4)フコク含む 炭化物わずかに含む |
| 5 暗砂子灰 | 5GY4/1    | 粘土(4)     |                    |



1 砂子灰 2.5Y4/3 4(4)混細・中砂 (粗砂含む)



- |        |        |         |                    |
|--------|--------|---------|--------------------|
| 1 灰砂子  | 5Y4/2  | 4(4)混細砂 | (炭化物含む)            |
| 2 灰    | 10Y4/1 | 4(4)混細砂 | (4)フコク含む 炭化物わずかに含む |
| 3 灰砂子  | 5Y5/3  | 4(4)    | (砂けあり)             |
| 4 暗砂子灰 | 5GY4/1 | 粘土(4)   | (炭化物わずかに含む 砂けあり)   |
| 5 成黄   | 5Y8/3  | 細・中砂    | (4)土)              |

図 163 05032竪穴建物 05033炉・05034土坑 平・断面

05036炉は建物のほぼ中央に位置する。長径約90cm、短径約80cm、深さ約15cmを測り、やや角張った円形を呈する。北西側がシルトブロックにより段状を呈するものの、人為的なものかどうかは不明である。炭のみで構成される埋土2を除去すると、遺構底面に同層を埋土とする小穴を複数検出した。刺突を行った際に混入したものと推測する。

ピットは計6基を検出したが、建物の主柱と考えられるものは05038・05040・05041ピットである。

05039ピットは深さが50cm以上あり、貯蔵穴等、他の目的で掘られたものかも知れない。

05043竪穴建物は、05035竪穴建物に重複する遺構である(図150)。平面は長辺約5.9m、短辺約5.6mの隅丸方形を呈する(図166、図版61)。竪穴部分に埋土を検出し、掘形の残存は良好と思われたが、下層における床面の確認はできなかった。掘形内に堆積する埋土を除去すると、遺構底面において炉とピットを検出した。

05044炉は建物の中央に位置し、長径約85cm、短径約60cmの楕円形である。深さは10cm前後であるが、中心部のみ40cm地下に達する。前例から推測すると、深掘り部分は地面からの防湿用に余掘りされたものと思われる。本炉の南東側からは焼土塊が出土しており、上部構造等が存在した可能性を窺わせる。

05045～05048ピットは竪穴の四隅から約1.2m内側に位置し、柱間約3.3mの方形に配置される。検出面におけるピットの規模は直径30～45cm、深さ約27cmを測り、いずれの底面標高もT.P.+5.35mと

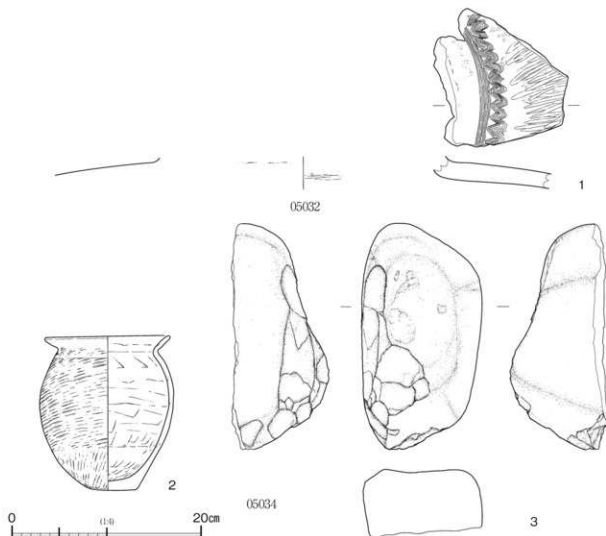


図164 05032竪穴建物 05034土坑 出土遺物

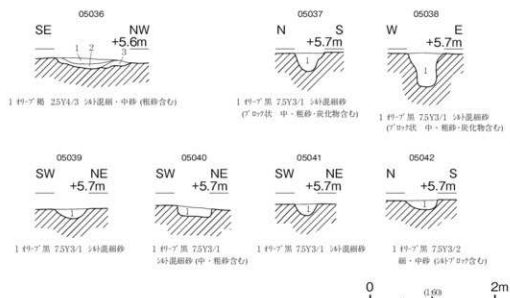
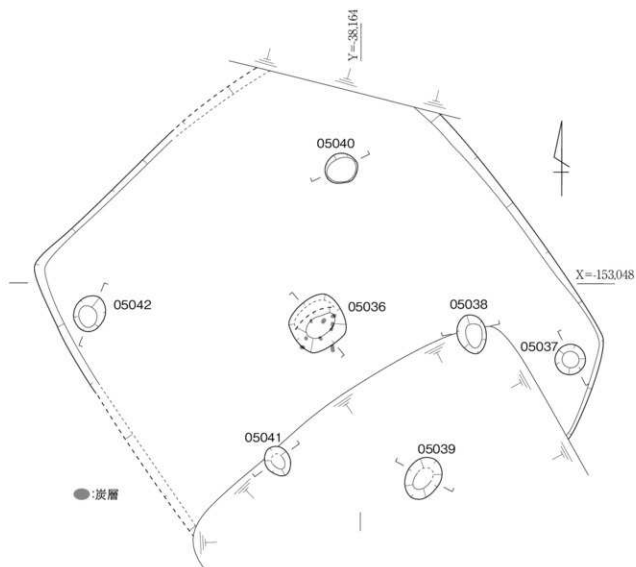


図165 05035竪穴建物 05036炉、05037~05042ピット 平・断面

一様である。

遺物としては、建物東側の05047ピット付近から出土した安山岩の礫石がある（図166、図版330）。  
欠けた部分はみられるものの、明瞭な使用痕は認められない。しかし、自然では当地に存在する礫では

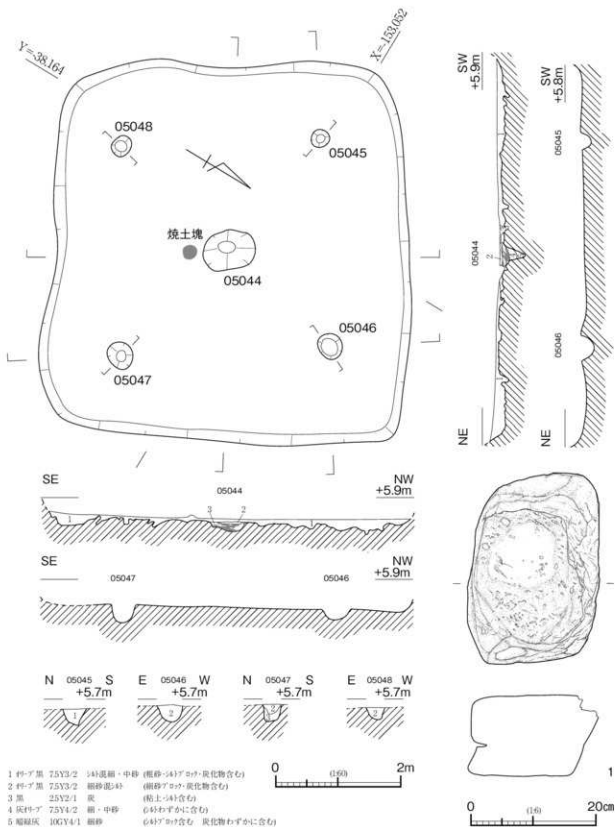
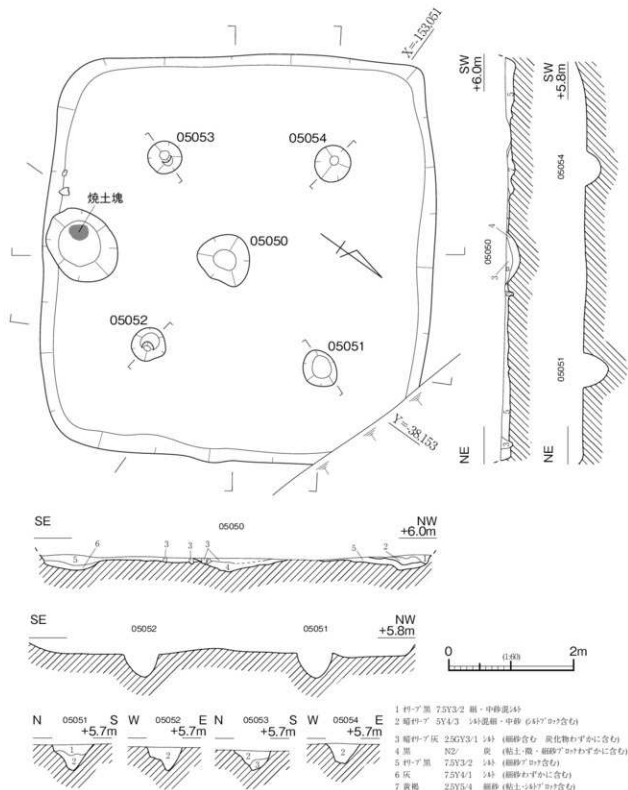


図166 05043竪穴建物 05044炉・05045~05048ピット 平・断面、05043竪穴建物 出土遺物



ないことから、人為によって運ばれてきたものと解釈する。

05049竪穴建物は、05035・05043竪穴建物の東側に位置する（図149）。中央の建物群の中では東端にあり、他と同様に上部を削平されるものの、ほぼ全形を確認することができた（図167、図版62）。平面は隅丸方形を呈し、長辺約6.5m、短辺約6.2mを測る。残存する竪穴の掘形は深さ5cmに満たな



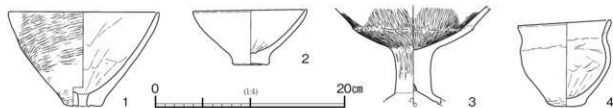


図 168 05049竪穴建物 出土遺物

い場所があり、炉を埋土上面に検出したことから、建物の床面はすでに消失したものと考えられる。極僅かではあるが、掘形の底面が建物の中央から周縁に向かって下降しており、排水等を意図したものか、本来は壁溝が存在した可能性も考えられる。建物の内部からは炉とピットを検出した。

05050炉は、建物の中央に位置し、直径約80cmの不定な円形を呈する。埋土は2層に分かれ、最下が炭層である。壁面に被熱を受けた痕跡は認められない。図化は行っていないが、炉の周辺に直径5～8cmの小穴が集中しており、竈等の構造物に伴うものとも考えられる。なお、炉の南東、建物の壁面に接

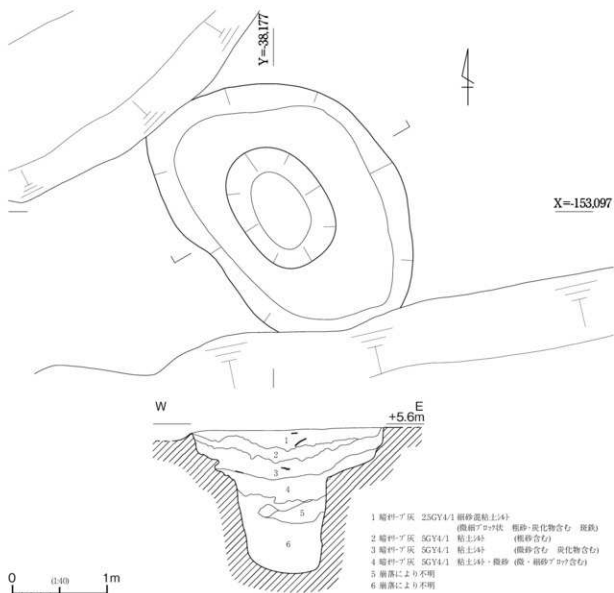


図 167 05057井戸 平・断面

- 1 腐叶・ブ灰 2SGY4/1 細砂混粘土(4) (腐葉のかげ状 粗砂・炭化物含む 炭灰)
- 2 腐叶・ブ灰 5GY4/1 粘土(4) (粗砂含む)
- 3 腐叶・ブ灰 5GY4/1 粘土(4) (粗砂含む 炭化物含む)
- 4 腐叶・ブ灰 5GY4/1 粘土(4)・微砂 (炭・粗砂のかげ含む)
- 5 断面により不明
- 6 断面により不明

する直径約1.3 mの凹みを検出した。上面から焼土塊が出土したため、竈等の存在を考慮したが、炭化物や灰は検出されず、凹み自体が掘形底面のものであることから、遺構としては認識しないことにした。

05051～05054ピットは、建物の四隅から約1.9 m内側に位置し、柱間2.8～3.1 mの方形に配される。ピットの直径は50～65 cm、05054が10 cmほど高いものの、他は底面の標高がT.P.+5.2 mと一様である。南側にある段状のピットから、使用された柱材の直径は10～15 cmと推測される。遺物は建物の内部から出土したものであり、小形鉢・有稜高杯・小形甕等がみられる(図168、図版330)。弥生時代後期末から庄内式期最古段階に比定できよう。

これらの堅穴建物群から南東へ約40 mの地点に、05056堅穴建物を検出した(図149、図版63)。遺構の大半が後世の墳墓の周溝掘削によって失われており、堅穴の掘形を部分的に検出したのみである。炬や柱穴も未確認であるが、遺構平面が整った隅丸方形を呈し、底面が平坦であったことから、堅穴建物と判断した。検出した規模は長辺約4.0 m、短辺約3.8 mであり、遺構内部から土器が出土した(図170-1～5、図版331)。2・4の小形鉢・甕のように、他の堅穴建物と共通する器種を含む点は興味深い。庄内式期最古段階に比定する。

調査区中央の南側、前述の堅穴建物群より南へ約50 mの地点に、05047井戸を検出した(図149)。平面は長径約2.9 m、短径約2.1 mのやや歪な楕円形を呈し、途中に小段をもって直径80～95 cmの円柱状に約1.5 m掘削する(図169、図版63)。調査の時点でも遺構底面から湧水が激しく、下半が崩落したほどである。

埋土から遺物がまとめて出土したものの破片が多く、底部付近からみつかったほぼ完形の細頸直口壺を図示する(図170-6、図版331)。前述の建物群と同一時期と考える。

前述までと異なる堅穴建物群は調査区の南西に位置するが、調査区中央の建物群との間に、南東から北西へとのびる05058・05059溝を検出した(図171)。幅約90 cm、深さ約20 cmを測り、特に05059溝は既往の調査区(竜華地区Ⅵ)から連続する長大な遺構である。埋土に流水の痕跡が認められず、灌溉用水路とは考え難いものの、区画溝として機能するにも十分とはいえない。土地所有の境界や区分を示す等、やや緩やかな区画的なものではなかったかと推測する。

調査区の南西部に検出した堅穴建物群は、可能性のある方形を呈する落込まで含むと、計14棟の建物

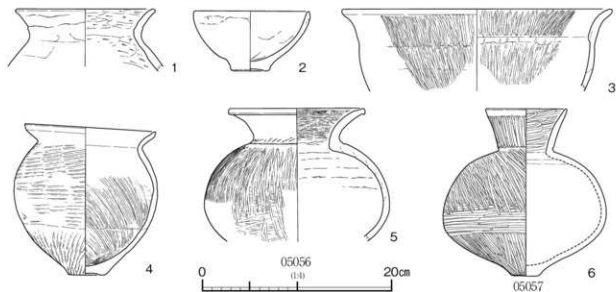


図170 05056堅穴建物、05057井戸 出土遺物

が存在したことになる(図171)。この内の半数を以下に図示しているが、調査区中央の建物群と同様に後世の耕作による削平が著しく、遺構の残存はあまり良好ではない。

05064竪穴建物は、本建物群の中では最も北側に位置する(図171)。建物の南側には一回り小規模な05070竪穴建物が隣接するが、関係は不明である。建物の平面は一辺約2.6 mの隅丸方形を呈し、深さ約10cmを測る(図174)。

埋土は1層を残すのみであり、床面の確認は行えなかったものの、建物中央の南西寄りに炭化物の拡がりを検出した。柱穴や遺物の出土はみられない。

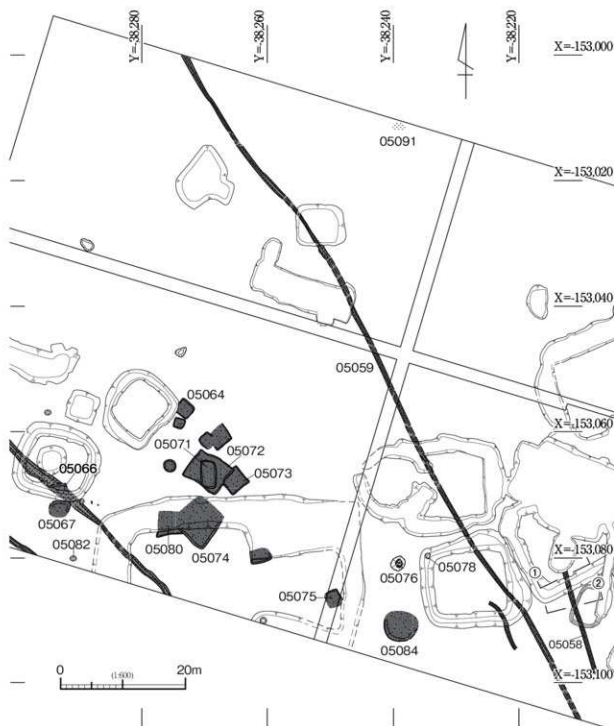
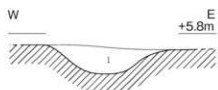


図 171 調査区西 竪穴建物群 周辺遺構平面



1 区 7.5Y4/1 細砂混44 (炭粉含む 炭跡)

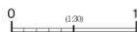
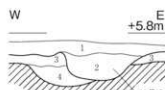


図 172 05058溝 断面



1 区 5Y4/1 微砂混44 (細砂・炭化物含む)  
2 区 7.5Y4/1 微砂混44 (細・中砂・炭化物含む)  
3 区 7.5Y5/1 微砂混44 (炭化物含む)  
4 区 7.5Y4/1 微砂混44 (微細アコケ草)

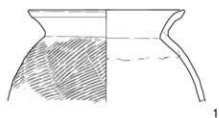
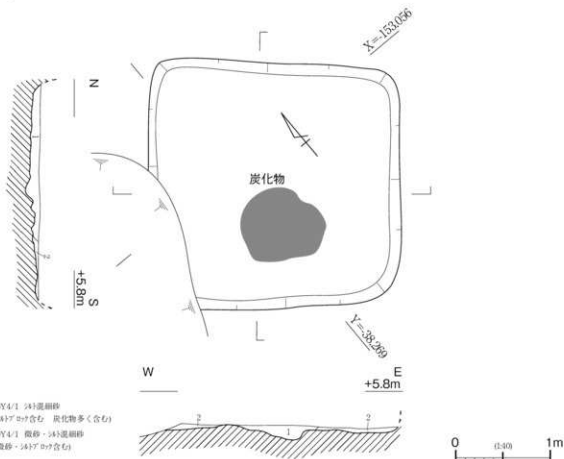


図 173 05061土坑 出土遺物

05066・05067竪穴建物は、建物群の西端に位置する(図171)。いずれも後世の47号墳や溝の攪乱を受け、遺構の大半を失う。あくまでも検出状況からの推測であるが、底面が平坦な方形の竪穴ということから建物跡としている(図175、図版63)。05066は一辺約3.2m、05067は一辺約2.8mに復元できる。いずれも柱穴や炉の確認は行えなかったものの、05067竪穴建物の内部からは遺物が出土した(図176、図版332)。1の高杯、2の甕は庄内式期古段階であり、3は研磨による凹みの認められる角閃石閃緑岩の川原石である。

05071～05073竪穴建物は、本建物群のほぼ中央に位置する(図171)。3基の方形落込が重複して見つかったものであるが、いずれからも、柱穴や炉等の付帯施設は確認できなかった。各落ち込みとも底面が平坦を成し、埋土に炭が多く含まれていることから、これらを建物跡と判断した(図177、図版63・64)。



1 区 10Y4/1 243泥細砂  
(6Aアコケ草含む 炭化物多く含む)  
2 区 10Y4/1 微砂・243泥細砂  
(微砂・6Aアコケ草含む)



図 174 05064竪穴建物 平・断面

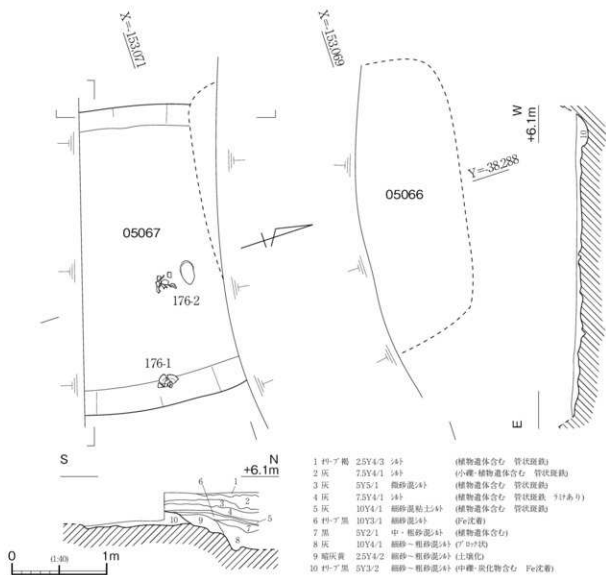


図175 05066・05067竪穴建物 平・断面

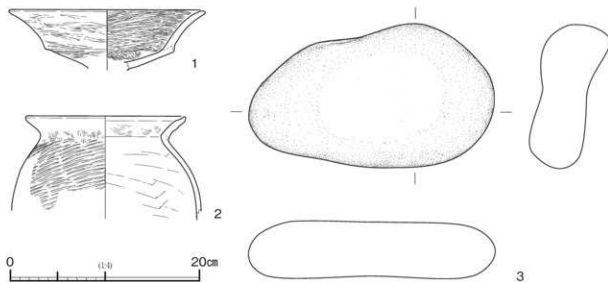


図176 05067竪穴建物 出土遺物

これら3棟の建物は、埋土の切り合い関係から、05071・05073竪穴建物が先行し、05072竪穴建物は後から作られたことがわかった。

05071竪穴建物は、長辺約5.0mと約3.2m、短辺約3.0mを測り、北東隅が突出する。05072竪穴建物は、長辺約5.5m、短辺約5.2mを測る。05073竪穴建物は、長辺約3.7m、短辺約3.5mを測る。いずれの建物も、僅かではあるが、埋土から遺物が出土した(図178、図版332~334)。1~5は

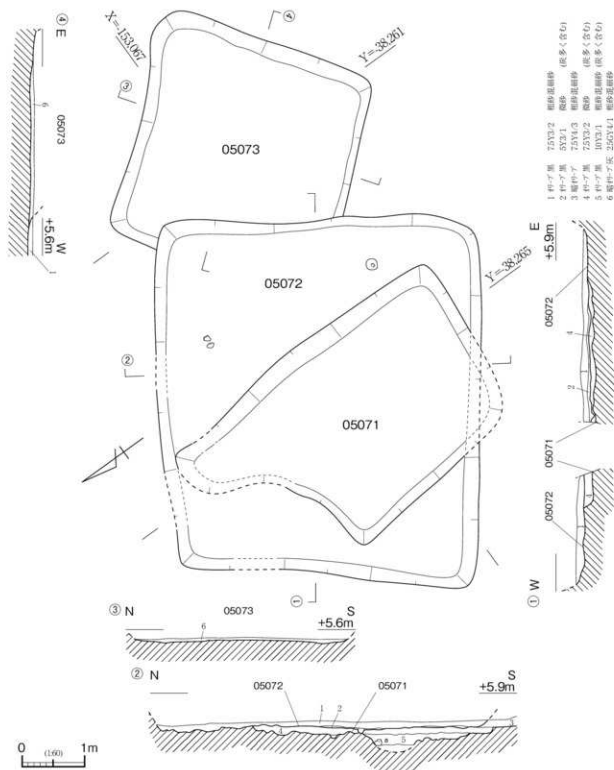


図177 05071~05073竪穴建物 平・断面

05071 竪穴建物、6・7は05072 竪穴建物、8・9は北側に隣接する05068 竪穴建物、10~16は05073 竪穴建物の出土土器である。小形の鉢・甕、椀形高杯等が、前述までの竪穴建物と同様、普遍的にみられる。1は径約6.0cmの体部のみであるが、片方の割れが僅かに外へ開くことから口縁部が付加していたものと考え、土鈴等ではなくミニチュアの壺とした。4は垂下する口縁端部の外面に櫛描波状文を施す広口壺の破片である。7は器台の屈曲部片であり、脚側の外面に櫛描波状文を施す。9は壺の体部であるが、肩部から頭部にかけてやや直線的に立ち上がる様子は、吉備等の瀬戸内地方の影響を受けたものと思われる。10は皿状の杯部をもつ高杯、12は台付鉢か甕の台部片と考える。

遺構の検出状態から、これらの遺物は相互に混入したものの可能性が高く、出土遺物にもその傾向が認められる。壺の一部や椀形高杯にみられるやや古い特徴と、高杯や小形品の増加等といった新しい特徴から、これらの竪穴建物は弥生時代後期末から庄内式期古段階にかけて順次造られたものと推測する。

05074 竪穴建物は、05071~05073 竪穴建物の南側に位置する(図171)。遺構の北半を後世の44号墳の周溝によって失うものの、直角に屈曲し、底面が平坦な落込を検出したため、これを竪穴建物と判断した(図179)。掘形の2辺を確認したのみのため正確な規模は不明であるが、44号墳周溝の北側には竪穴の続きが現れなかったことから、一辺が6m以内であることは明らかである。上部が削平されており、床面の確認や坪・柱穴等は認められず、遺物の出土もなかった。

44号墳の下面からは、上記以外にも複数の方形を呈する落込を検出しており、いずれも深度が浅く、底面が平坦なことから、竪穴建物と認識する(図171)。このうち、05075 建物内の埋土からは、遺物が少量出土した(図180、図版334)。図示したものは広口壺と小型の第V様式形甕のみであるが、他の建物群と時期差はないものと判断する。

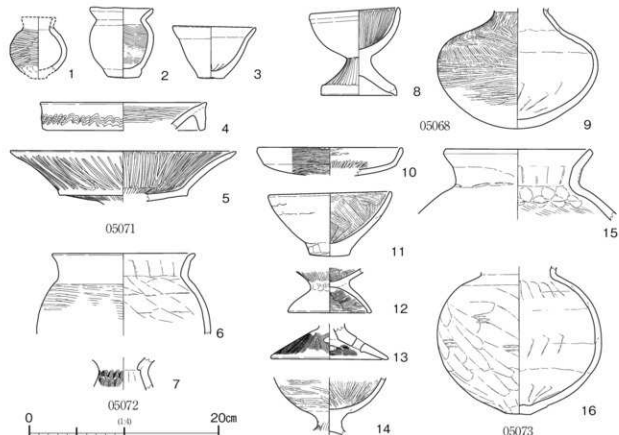


図 178 05068・05071~05073 竪穴建物 出土遺物



調査区の南西に位置する竪穴建物群に共通して言える点として、炉や柱穴等の付帯遺構を確認できないことが挙げられる。遺構検出の方法に問題が存在する可能性もあるものの、調査区中央の建物群に対し、上部を覆う第5-2層が相対的に厚いことが要因といえる。単純に層厚の違いもあるが、耕作土としての攪拌度合いの違いを示唆しており、土地利用の変化した時期が微妙に異なることを物語っている。

建物を廃絶した後は一様に耕地化されるが、この耕作期間が長くなるほど、下面の遺構を侵食する割合も増加すると考えられる。詳細は後述するが、調査区中央の建物群周辺では古い段階に築造された墳墓が多く、一方の調査区南西側は新しい墳墓が目立つ。おそらく、調査区南西の建物群は、長期間に亘って上部からの攪拌を受けたため、詳細部分の残存状態が悪くなってしまったものと考えられる。第5-2b(1)面における耕作痕の検出数が少ない点も、同様に多数の耕作痕が重複するために区別できなかったものと思われる。

これらの建物群の東側、 $X = -153,082$ 、 $Y = -38,235$ 付近に05076土坑を検出した(図171)。土坑の平面は、長径約2.4m、短径約2.1mのやや歪な円形を呈する(図181、図版65)。断面は途中に段を有する楕鉢状を呈し、深さ約1.3mを測る。埋土の下半は泥層が堆積し、一部に水成堆積によるラミナの生成が認められることから、井戸であった可能性が高いと考える。

遺物は、05076土坑の埋土の中位付近から、まとまって出土した。原形に近い状態で圧砕された土器がみられることから、完形のまま遺構内に投棄された可能性が高いと考える。遺物としては、土器に鉢・高杯・壺・甕等があり、石製品や木質遺物がみられる(図182、図版334~337)。1・2・4は小形鉢であるが、2は口縁端部に刻目を施し、内面全体に赤色顔料の付着がみられる。3は碗形高杯の杯部であり、残存状態は良好ではないが、内面に赤色顔料の付着がみられる。6~13は高杯であり、有段・有稜のものがある。6の有段高杯は、屈曲部がわずかに垂下し、外面に暗文状のミガキと口縁端部

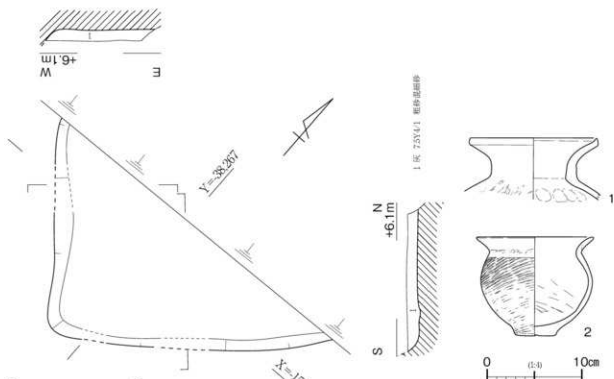


図179 05074竪穴建物 平・断面

図180 05075竪穴建物  
出土遺物

に櫛播波状文を施す。これらの鉢・高杯の合計が出土総個体数の半分を占める点は、他の遺構に比べるとやや特異である。壺は14・15のように広口壺、甕は第V様式形のみであり、17のような台付甕もみられる。底部片のみであるが、尖底化する傾向も一部に認められる。

土器以外に、23の軽石が出土した。使用痕等はみられないが、当地周辺で自然に産出するものではないため、人為的に入れられたものと思われる。なお、木質遺物は自然木であったため、炭化を行っていない。土器の様相から、本土坑は庄内式期の中でも最古段階に位置付けられる。

05078土坑は、05076土坑の東側約5m付近に位置する(図171)。遺構の上部が43号墳の周溝掘削により大きく攪乱される(図183)。検出した土坑の平面は著しく変形しており、本来は直径約90cmの円形であったと推測する。断面は上方がわずかに開くものの、ほぼ円柱状を呈し、下方の直径は約60cmを測る。井戸枠等の構造物は確認できなかった。埋土下半のブロック土から故意に埋め戻された可能性もあるが、上部にラミナが残っており、不完全に開口していたと考えられることから、自然に埋積したものと推測する。

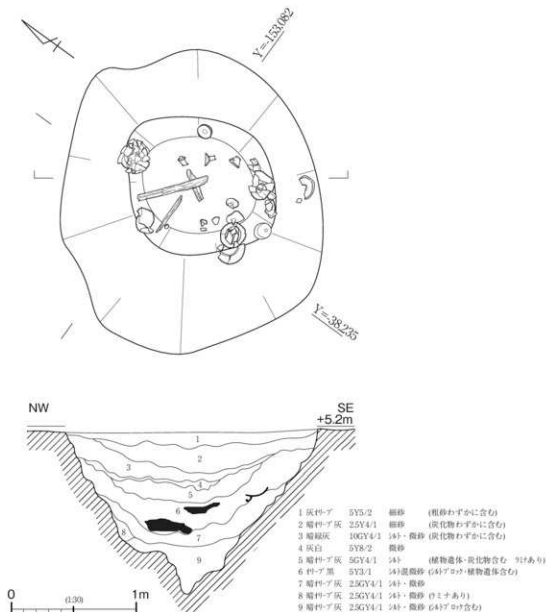


図181 05076土坑 平・断面

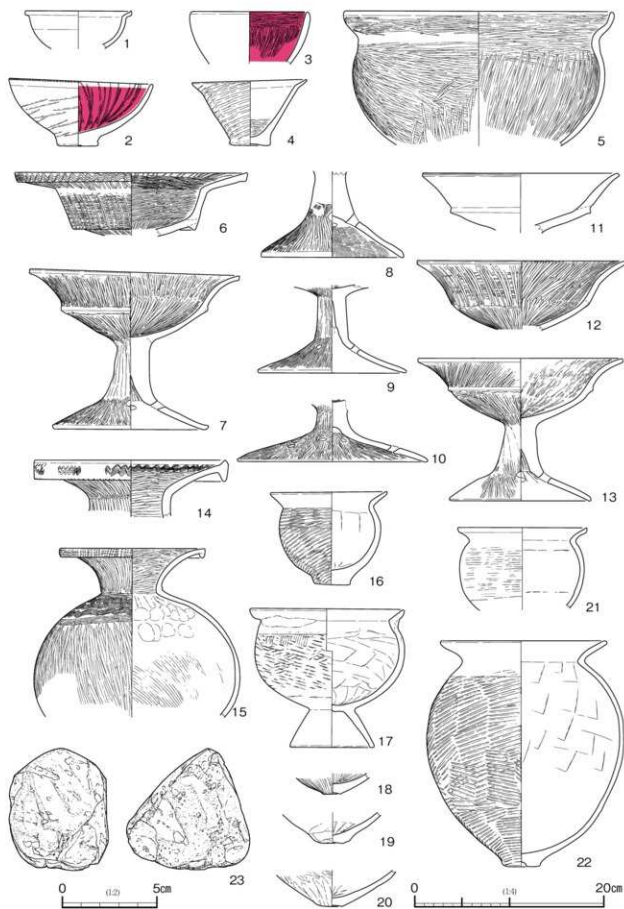


图 182 05076土坑 出土遺物

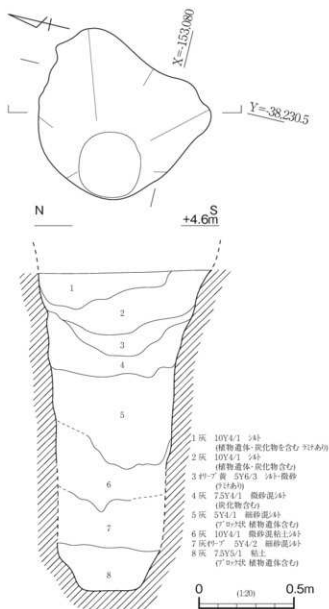


図 183 05078土坑 平・断面

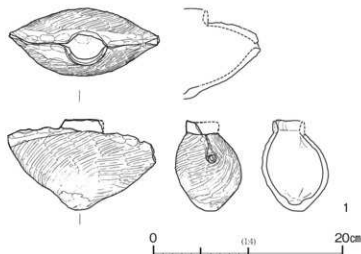


図 184 05078土坑出土遺物

遺物は、土坑の底部付近から出土した(図184、図版337)。1は長さ約16cmの皮袋形土器である。全体は逆三角形を呈し、外面には叩き目、上端に粘土の繋ぎ目が明瞭に残る。上端の中央に円形の口縁部を設け、繋ぎ目の一端に小さな円孔を穿って注ぎ口とする。

第5-2b(2)面では、その他の遺構からも遺物がまとも出土している。遺構の記録がないため、遺物だけを抽出して図化を行った(図185・186、図版337-341)。

図185-1・2は、調査区の南西の05088土坑から出土した細頸直口壺と第V様式形甕である。3はやや時期の下る直口壺であり、05082土坑出土は、おそらく上面の掘り残しと思われる。4は05074堅穴建物の西側に隣接する05080堅穴建物から出土した凝灰岩の礫であり、処々に使用による平滑面が認められる。

5・6は、05076土坑の南に位置する05084堅穴建物から出土した細頸直口壺と庄内形甕である。7は05086土坑から出土した板状木製品である。平面は一辺約55cmの隅丸方形、断面は厚さ約5.0cmの台形を呈し、中央に直径約7cmの円孔を穿つ。樹種はヒノキの板目材を使用する。形状から鼠返しの可能性を考えられるものの、中央の円孔が小さく、棒状木製品等の台座に用いられたものではないかと推測する。

図186-1-15は、調査区の中央の05043堅穴建物の南に位置する05090土坑から出土した土器である。椀形・有稜高杯、第V様式形甕、小形鉢・甕、複合口縁壺が出土した。16・17は、調査区の北西に位置する05091土器集積

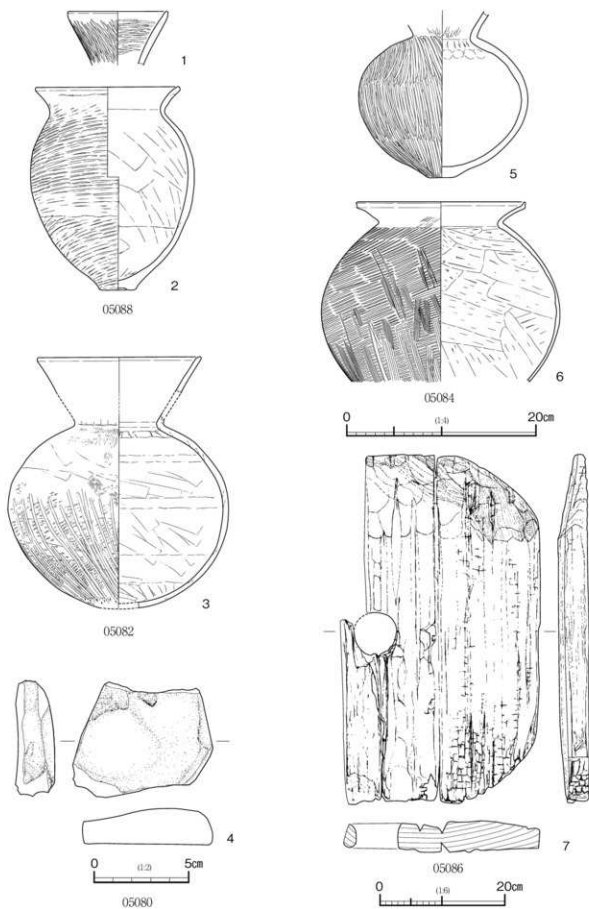


图 185 05082·05086·05088土坑、05080·05084竖穴建物 出土遗物

から出土した広口壺・第V様式形甕である。17の甕の口縁端部には刻み目を施す。

掘り残しを除くと、いずれも庄内式期古段階の範疇とすることが可能であり、弥生時代後期末を含む当該期間の中で遺構が消長したものと考える。

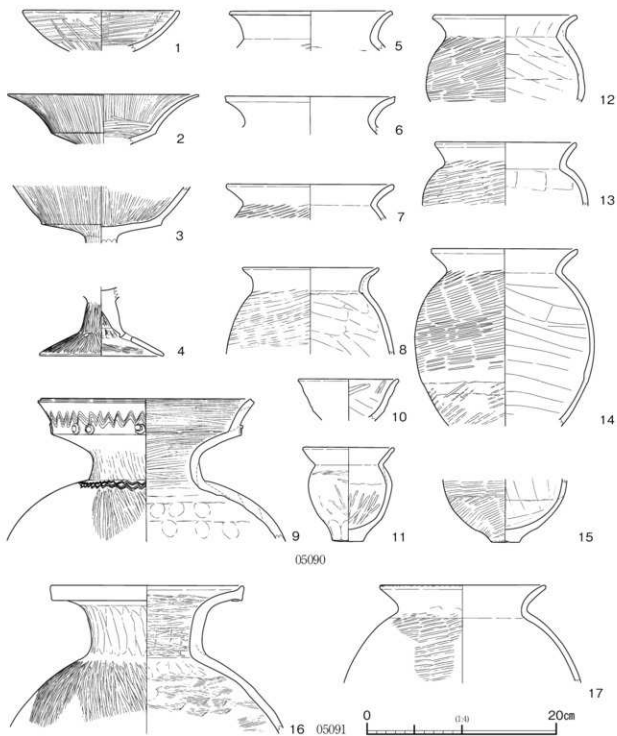


図186 05090土坑、05091土器集積 出土遺物

Y=-38.050

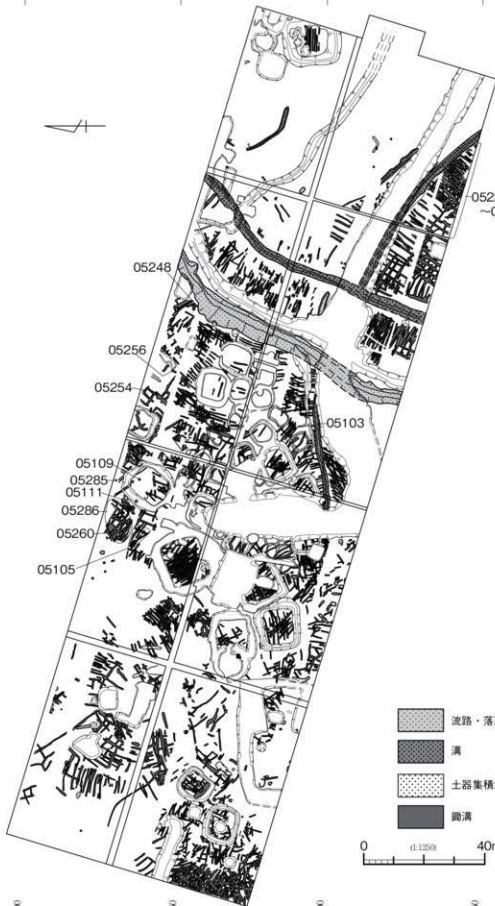
Y=-38.100





Y=-38.150

Y=-38.200

Y=-38.250

Y=-38.300



-  流路・落込
-  溝
-  土器集積地
-  筒溝

0 0.1250 40m

X=153.000

X=153.050

X=153.100

X=153.150

図 187 第 5-2 b(1)面 遺構分布

### 3. 第5-2b(1)面の遺構

土壌化層の第5-2層を除去した第5-2b面において検出した遺構を、切り合い関係の新旧によって2つの遺構面に分割したもののうち、上面を第5-2b(1)面とする。

前項の第5-2b(2)面では、耕作痕の下に隠れていた建物跡や溝等を取り上げたが、本遺構面では前者の耕作痕が主な遺構となる。本調査区周辺の既往の調査においても、第5-2b(1)面に相当する遺構面では同様の耕作痕が多数検出されており、当該期に調査区周辺が耕作地として広く開発されたことは明らかである。

第5-2b面の細分については、前項の冒頭に詳細を記したので、そちらを参照されたい。前項において、本遺構面を特徴付ける耕作痕(畝間溝)が第5-2層の途中に現れることを既述しており、これについての補足説明を行うことにする。後述する第5-2面は墳墓築造面として報告を行うが、これは検出した墳墓がすべて第5-2層上面に築造されているためであり、厳密には第5-2面の最終景観となる。第5-2層中に耕作痕が検出されることから、同層が耕作土であることは明らかであり、耕作土上面の景観としての第5-2面が存在するはずである。これは墳丘盛土をすべて除去した墳墓の下面が相当するものの、いずれの墳墓においても盛土除去面では耕作痕が検出できず、墳墓構築前に整地されたものと推測する。

また、墳丘の下面では各墳墓毎に第5-2層の細分に差があり、その範囲が狭小で限定されたものであることや、墳墓外の細分層との整合が図れないことから、第5-2面の細分は不要であると判断した。これらの耕作痕を最も検知できた面が第5-2層を除去した下面の第5-2b面であり、上層の耕作土に関わる新しい遺構群と、耕地化以前の古い遺構群が混在することになったのである。

第5-2b(1)面の地形に、前項の第5-2b(2)面との差はほとんど認められない。しかし、本遺構面を第5-2層中における耕地化の最古面とする場合、同層上面の第5-2面までに、場所によっては最大3層の耕土層が確認できることから、調査区内部での細かな地形変化は生じたものと推測される。その場合、耕作地の変化は上面の遺構として帰属を分けた墳墓の築造と連動した可能性が高く、第5-2b(1)面から第5-2面にかけて、本調査区内では墳墓と耕作地が並行して存在したと思われる。地形としての大きな差は生じないものの、土地利用の変化に伴って堆積環境も徐々に変化した様子が看取される。

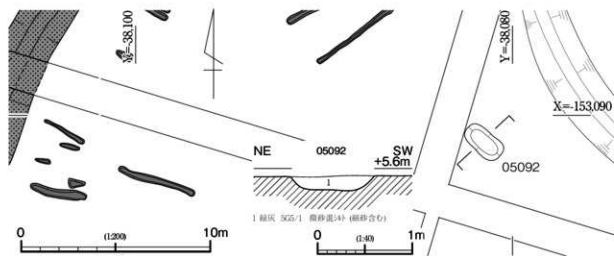


図188 05092土坑 平・断面





图 189 05100 沟 平面

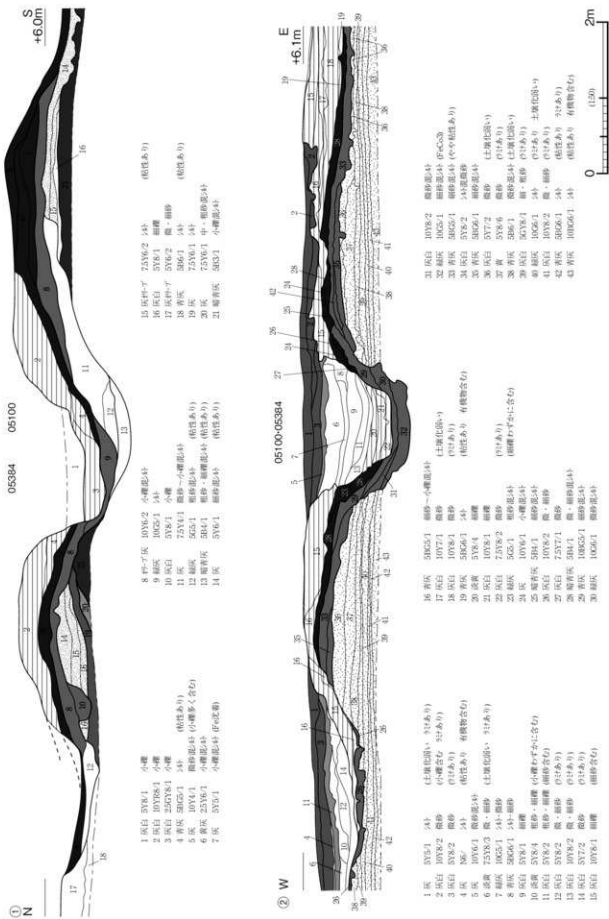


図 190 05100 溝 断面 (1)

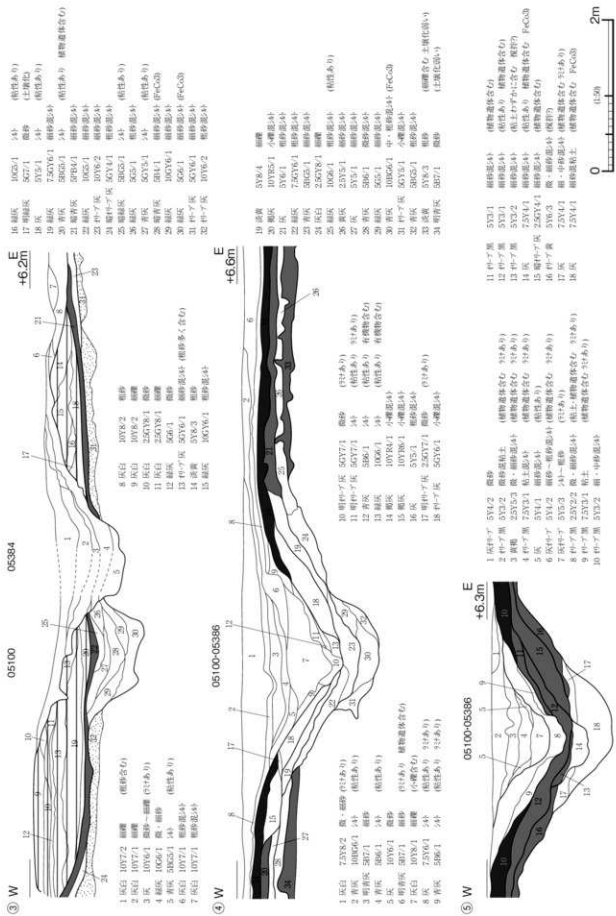


図 191 05100 断面 (2)

第5-2b(1)面において検出した遺構は、落込・溝・土坑・ピット・畝間溝である(図187)。遺構分布図を概観しても、調査区東側に位置する溝以外はほぼ耕作痕(畝間溝)しか認識できない。前述のように、本遺構面は第5-2層の土地利用を表すものであるから、耕作地としてのあり方に問題はない。それ以外に挙げる幾つかの遺構については、耕作痕との上下関係が不明のために振り分けられず、あえて本遺構面に帰属させたものもある。それらの遺構を含め、調査区の地形に沿って以下に説明を行っていく。

調査区中央の東側には、南北方向の溝を2条検出した(図187)。向かって

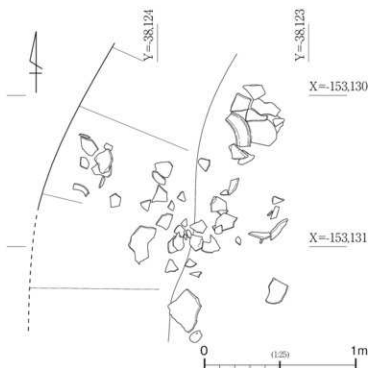


図192 05100溝 遺物出土状況

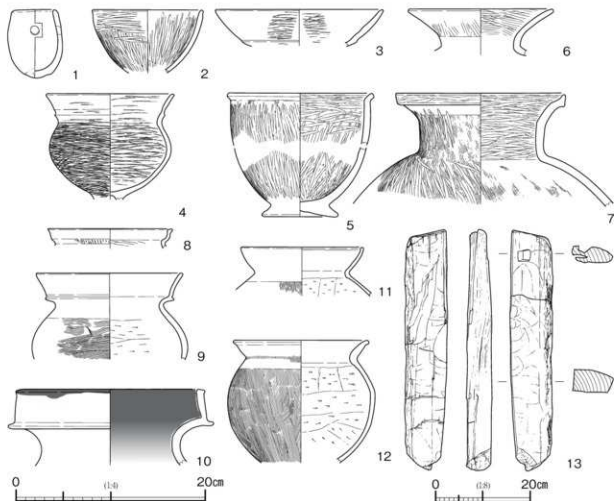


図193 05100溝 出土遺物(1)

て東側が05100溝、西側が05006落込である。05100溝より東側では、中央の低地部以外に北側の微高地上においても畝間溝はほとんど検出されなかった。ただし、緩斜面の裾部に相当する場所や、北東部の墳丘下面では僅かに認められることから、本来は存在した可能性も考えられる。同じ緩斜面の中に、05092土坑を検出した（図188）。幅0.9～1.2 m、長さ約2.3 m、深さ約15cmの隅丸長方形を呈する。形状的には、後出の墓坑に類似するものの、内部から遺物が出土していないため、詳細は不明である。しかし、当地は第5面を通じて耕地以外に利用されることがないため、このような土坑は奇異に感じられる。

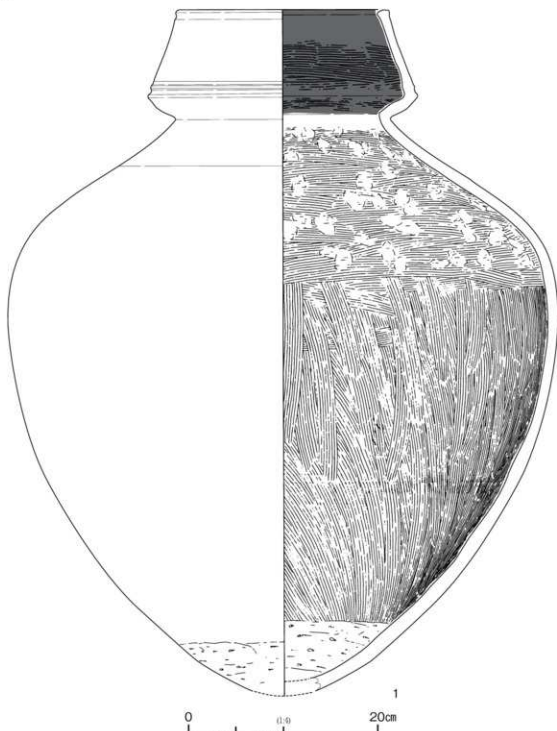


図194 05100溝 出土遺物（2）



图 195 05101 满平·遺物出土状況

第5-2b(2)面において氾濫の排水河川として残った05006流路は、周辺の自然堤防上に集落を復旧して以降、恵みの川に変化したと考えられる。しかし、埋積の進行と水量の減少により、05006流路は次第に落込と化したため、その間に様々な水辺の祭祀が行われたようである(図135~147、図版70)。

第5-2b(1)面では止水化するまでには至らなかったものの、耕地の拡大に合わせ、灌漑水路の増強を目的に開削されたものが、05100溝と考えられる。05100溝と05006落込の間では、多数の畝間溝を検出した(図189)。この地区では第5面を通して継続的に耕地として利用することが明らかであり、当初から耕地化されていた可能性も考えられる。詳細は各遺構面にて後述するが、ほぼ同じ方向

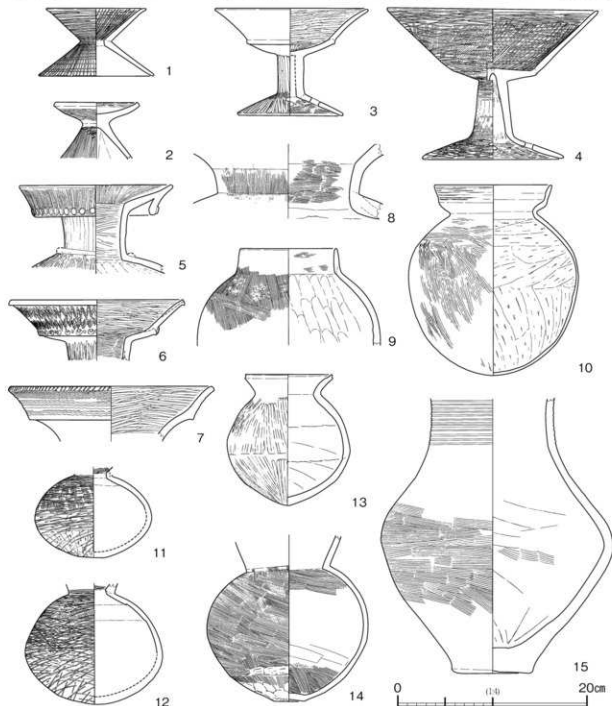


図196 05101溝 出土遺物(1)

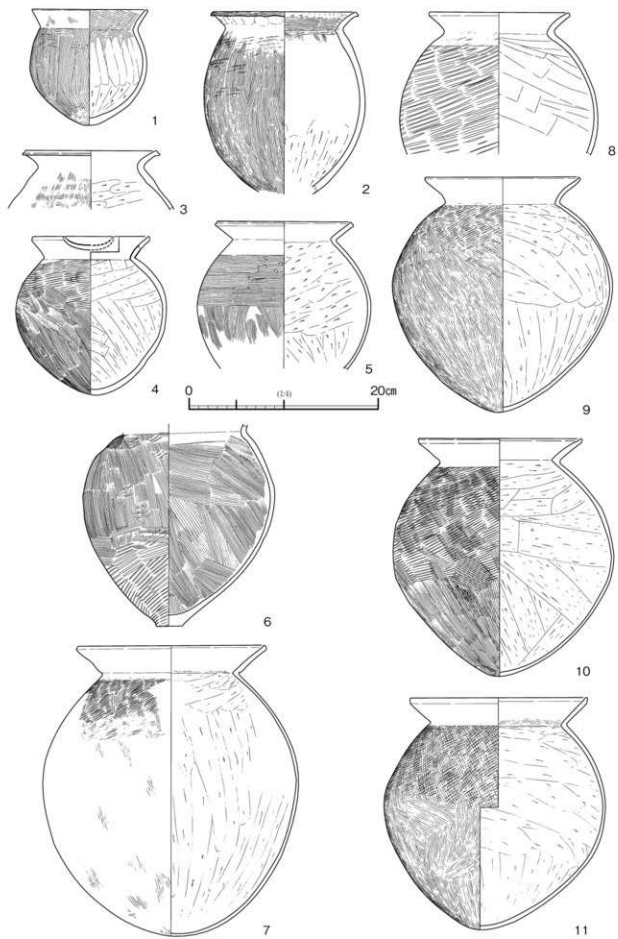


图197 05101沟 出土遗物(2)



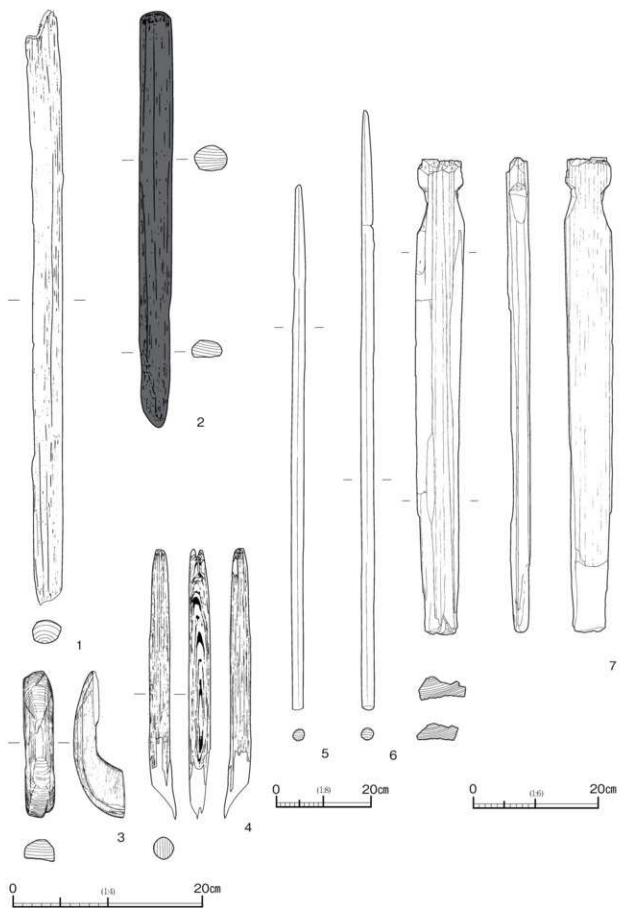


图 198 05101 清 出土遗物 (3)

に畝間溝を設定しており、土地利用の一端がうかがえる。同様に、第5面において土地利用の変化が少ない地区が、調査区南東部である。後述する05101溝より南側では、縦横に交錯する畝間溝群が検出され、盛んに耕作の行われた様子が看取される。

05100溝は、05006落込の東側に並行する自然堤防の東肩口付近に位置する(図189、図版71~72)。溝の平面形は西側の05006落込に並行し、幅2.6~3.8m、深さ0.7~1.2mを測る(図191・192)。

既刊報告書の竜華地区VIによると、本調査区の南側では、05006落込が南西へと屈曲するのに対し、05100溝はそのまま直線的に南南西へと伸びる様子が看取される。このことから、05100溝は05006落込と異なる水源から引水する目的で掘削された水路であると推測できる。また、竜華地区VIも同様に、本溝と周辺で検出した畝間溝群には重複関係がみられないことから、耕地化の初期段階、あるいは第5-2b(2)面のうちに開削された溝と考えられる。詳細は各遺構面において記載するが、本溝が完全に埋没するまでの第5面の間、築堤や再掘削を繰り返しながら、水路を維持し続けた所為が明らかとなっている。05100溝の当地における水利上の重要性を示すものであり、少なくとも第5面においては土地利用の基本的な仕組みに変化がなかったことを想起させる。

遺物については、05100溝からまとまった数の土器片が出土している。しかし、多くが細片であることに加え、

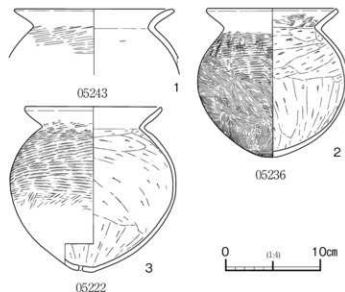


図199 05222・05236・05243畝間溝群 出土遺物

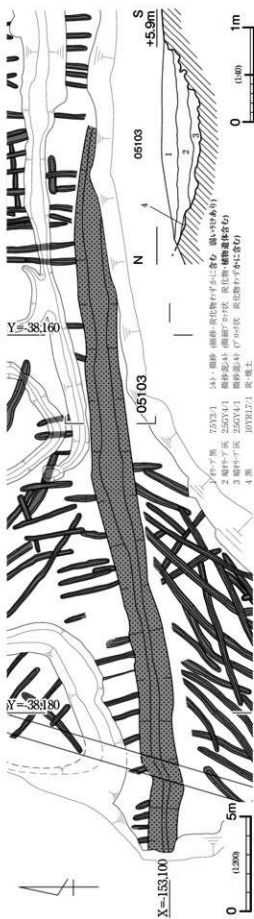


図200 05103溝 平・断面

層序の対応が不明なものも多いため、抽出した図化可能な遺物のうち、明確に遺構面や層を規定していないものについては本遺構面において一括して報告する（図193・194、図版342～345）。したがって、明らかに型式差の異なる遺物を同図に掲載するが、必ずしも層位的な共存関係ではないことを明示しておく。

図193-1は紐孔のある直径約4.3cmの飯蛸壺である。2は生駒西麓産の小形鉢とするが、脚台が接続して台付鉢や碗形高杯となる可能性もある。3はわずかな段がみられる高杯の杯部である。4は口縁部下半に鋭い稜線があり、山陰系の影響による台付の複合口縁壺である。5は胴長の台付鉢である。6・7は壺の口縁部片である。5・6は当地周辺ではあまり通常の形態ではないため、搬入品の可能性が

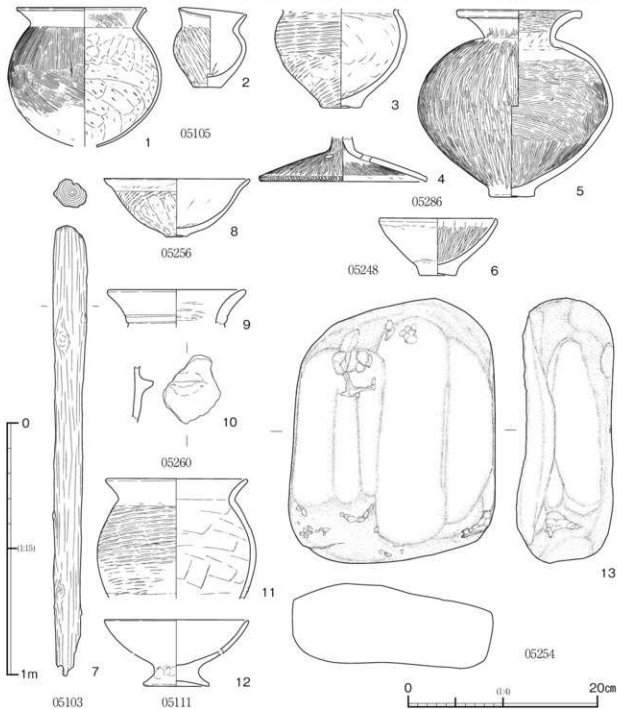


図201 05105・05248・05254・05256・05260・05286鈎間溝群、05103溝、05111土坑 出土遺物

高い。8・9・11・12は甕の口縁部片である。8は東海系のS字状口縁甕であり、廻間I式相当と思われる。西濃に多い胎土とのことから、搬入品と考えられる。9は山陰系の複合口縁をもつ甕である。11は口縁端部が内面にわずかに肥厚し、布留形甕である。12は外面にハケ調整のみの甕である。10は讃岐系の複合口縁甕の口縁部片である。口縁部内面に黒色物質の付着が認められる。13はケヤキの割材を使用した棒状木製品である。両端が欠損するため、全体形は不明である。平滑面には多数の削り痕がみられるものの、側面に樹皮を残す。上端に貫通しないホゾ穴を加工する。

図194-1は、讃岐系の大型複合口縁甕である。05100溝の調査区南端において、西側法面から底面にかけて破砕された状態で出土した（図192、図版72）。

同地点から15m以上南に離れた竜華地区VI地区の304大溝から出土した口縁部片は、今回の土器と同一個体であることが明らかとなった。復元した壺形土器は、口径約22cm、器高約72cm、体部最大径約58cmを測る。胎土に香東川下流域産の特徴が認められるとのことから、搬入品と考えられる。図139-10と同様に、口縁部内面の全体に黒色物質の付着が認められる。出土状況からは、不用になったために廃棄されたものと思われるが、このような大型品でしかも搬入品を安易に廃棄するとは考え難く、一括性も高いことから、祭祀用として使用された後に投棄されたものかもしれない。

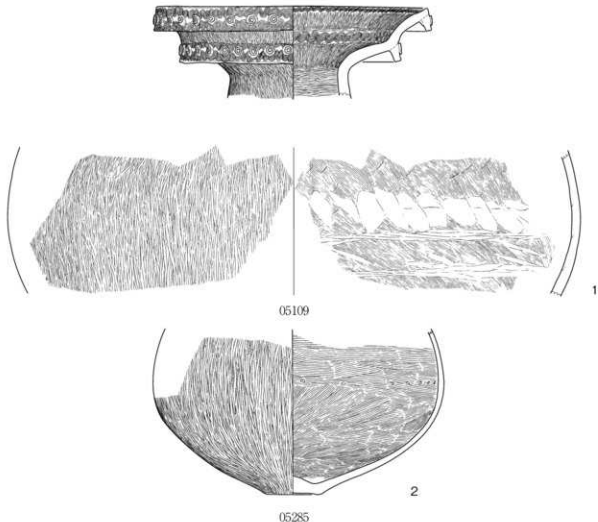


図202 05109・05285土坑 出土遺物

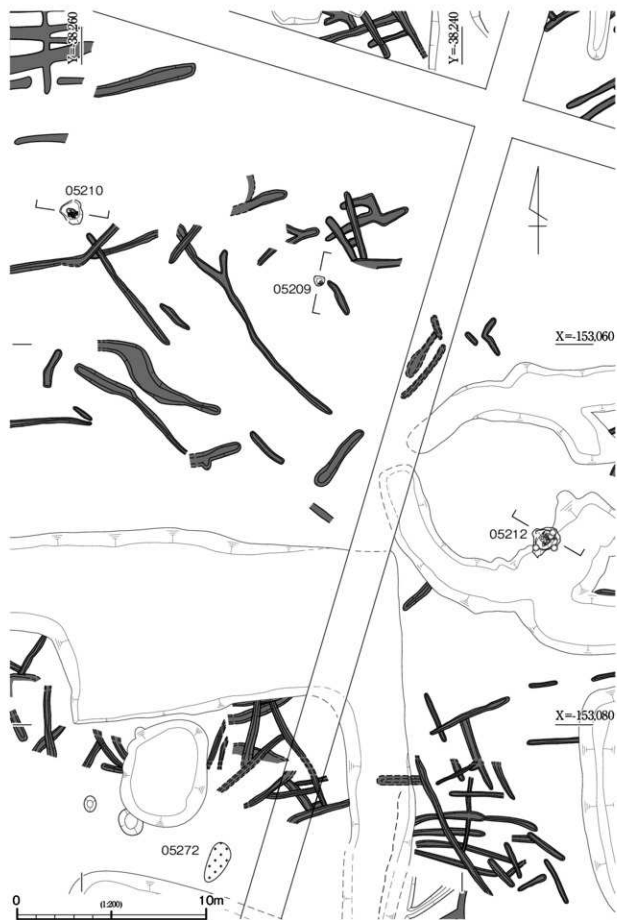


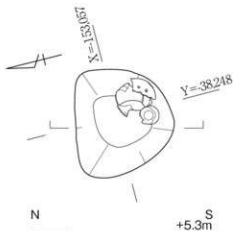
図 203 調査区西 周辺遺構平面

調査区南東において、調査区外から北西にのびる05101溝がある（図195、図版72・73）。本溝は、上面において同位置に05378溝が掘削されるため、全形が不明である。推定で幅2.0～2.6m、深さ約50cmに復元される（図445）。調査区南側の東西にのびる微高地の北肩口に開削し、05100溝に接続する。周辺の畝間溝より上位にあることから、05100溝より後出することが明らかである。同溝の水量が不足した際、補充用に別の水源から導水したものと推測する。本溝のY=-38.081付近、南側法面に大量の土器が集積される状況を検出した。ほぼ原形の状態で出土したことから、斜面上に正置されていたものと思われる。本溝は攪乱が著しく、挿図に埋土の遺物を含むため、複数時期の遺物が混在する。

遺物は、土器に器台・高杯・壺・甕等がみられる他、埋土からは木製品が出土した（図196～198、図版345～349・450・451）。図196-1は小形器台の破片であり、脚部や破断面には煤が付着する。10は山陰系の複合口縁甕であり、口縁部外面に擬凹線を施す。11・12は壺の体部であり、小型の二重口縁壺と推測する。13はミガキ調整の異形壺である。15は弥生時代中期前半の壺であり、摩滅がみられないことから、溝の掘削に伴って下層から巻上げたものと思われる。図197は甕であり、第V様式形・庄内形甕を主とする。2・3はいずれもハケ調整の異形甕である。4の庄内形甕には口縁部に打ち欠きがみられる。5は布留形甕であり、肩部に刺突文を施す。

図198はすべてスギ材による木製品である。1・2は加工痕の残る棒状品であり、2は全体に被熱痕がみられる。3は削り出しによる弧状を成し、槽や扉等の把手が折損したものである。4は先端に約1cmの抉りを施す棒状品であり、全体に被熱の痕跡がみられる。5・6は全長が1m以上の棒状品であり、一方の先端を尖らせる。7は板状の割材を使用し、先端から約5cmの両側面に抉りを施す。機械具の一種と推測する。

図版451-写39は安山岩製の幅約24cmの板石である。剥離以外の加工痕は認められないものの、自然では当地に存在しないため、人為的に運搬されたものと考えられる。



1 19-ア黒 10Y3/1 細砂混粘土(4) (7)ロ状 炭化物・植物遺体含む  
2 堀削-ア灰 25GY4/1 細砂混粘土(4) (植物遺体・炭化物含む)

図204 05209土坑 平・断面

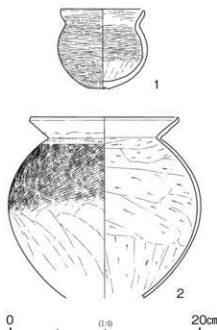


図205 05209土坑 出土遺物

調査区の中央部は、下面では北側に多数の堅穴建物を検出し、氾濫取東後、復旧的に小集落が形成されたものと推測する。上面では最も多くの墳墓が築造される地区であるが、墳丘の下面に残存する旧表土の第5-2層を調査することにより、建物群を含む一帯のすべてが耕地化されていたことが明らかとなった(図187)。墳墓に伴う周溝掘削のため、耕土が寸断されてしまい、連続した対応関係は把握できないものの、最大3層の旧耕土に分層されることがわかった。

また、墳丘下面やその周辺では、耕作痕に切り合い関係が存在することも明らかとなり、建物群の形成から墳墓の築造に至るまでは、多くの段階を経て、様々な土地利用の変化を行いながら進行していっ

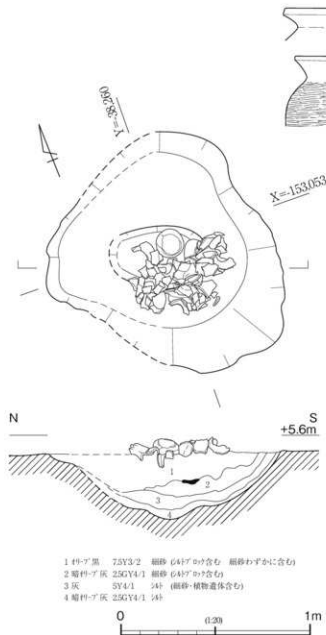


図206 05210土坑 平・断面

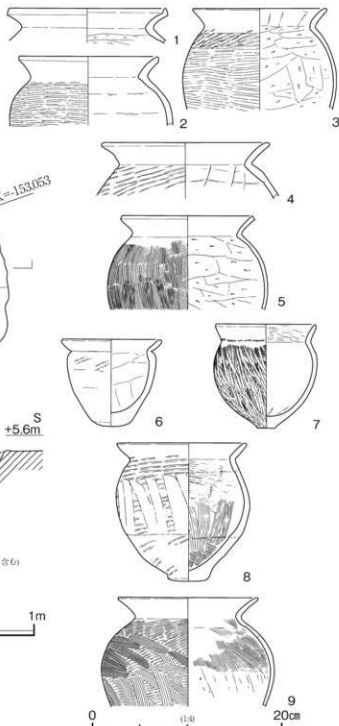
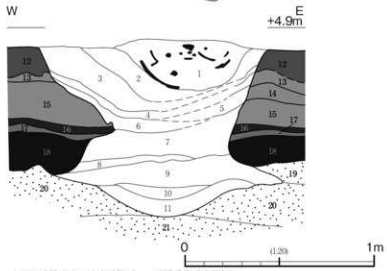
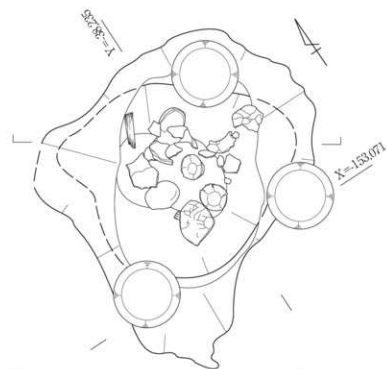


図207 05210土坑 出土遺物



1 堀削-ア灰	25GY4/1	細砂混(4)	(植物遺体・炭化物含む)
2 堀削-ア灰	5GY4/1	微砂混(4)	(70%状 植物遺体・炭化物含む)
3 灰	10Y4/1	(4)	(70%状 植物遺体含む)
4 4F-ア黒	75Y2/2	微砂混粘土(4)	(植物遺体多く含む)
5 灰削-ア	5Y5/2	微砂	(植物遺体含む 3%あり)
6 堀削-ア灰	5GY4/1	粘土(4)	(植物遺体含む 3%あり)
7 灰	10Y5/1	微砂混粘土(4)	
8 黒	75Y2/1	細砂混粘土(4)	(70%状)
9 堀削-ア灰	25GY4/1	(4)	(植物遺体含む)
10 黒	75Y2/1	細砂混粘土(4)	(70%状)
11 灰	10Y5/1	細砂混(4)	(70%状)
12 灰	5Y4/1	(4)	(植物遺体含む)
13 灰	10Y4/1	微砂混(4)	(植物遺体含む)
14 堀削-ア灰	25GY4/1	粘土(4)	(70%状)
15 灰	5Y4/1	粘土(4)	(植物遺体含む)
16 黒	5Y2/1	微砂混粘土(4)	(植物遺体わずかに含む 土壌化)
17 黒	75Y2/1	細砂混粘土(4)	(植物遺体含む)
18 灰	10Y4/1	細・中砂混(4)	(植物遺体含む)
19 堀削-ア灰	25GY4/1	細・中砂	
20 灰削-ア	5Y5/2	細・中砂	
21 灰	10Y4/1	(4)	

図208 05212土坑 平・断面

たと思われる。ただし、それは調査区全域に共通するものではなく、継続的に安定した土地利用の行われた地区も存在したことは前述のとおりである。調査区南部周辺の畝間溝では、第5-2層から庄内式期中段階の第V様式形・庄内形甕が出土している(図199、図版353・355)。当地は、第5-2面以降も耕地として利用され続けるため、単純に新旧の判断はできないものの、墳墓の築造と並行して耕作が行われたことは確かである。

05006落込の西側に、西へとのびる05103溝を検出した(図200、図版73)。幅1.5~2.2m、深さ約40cmを測り、東西端が攪乱のため、溝の延長については不明である。溝肩が畝間溝群を切ることから、本遺構面の中でも後出すると考えられる。

遺物は木製品や土器片が出土した(図201、図版349)。

図201-1・7は05103溝から出土した庄内形甕と、棒状木製品である。木製品はヒノキ製の芯持ち材であるが、両端を欠損し、詳細は不明である。

この他、周辺の畝間溝群や土坑から出土した遺物についても報告する(図201・202、図版349・350・355・356・362)。

遺物には小形品・高杯・甕・壺・鉢の他、石製品もみられる。図201-5・9・10は弥生時代の土器であり、下層を掘削した際に巻上げたものであろう。前期壺・把手・後期壺が含まれる。13は砂岩製の礫である。天面および側面に擦痕による凹面が



形成される。図202は15号墳の墳丘下面からみつかった土坑から出土した。1は複合口縁壺の口縁部と体部である。同一個体と思われる、胴部最大径は約60cmである。口縁部は端部・屈曲部が垂下し、それぞれの内外面に櫛描波状文、外面に竹管円形浮文を施す。2は壺の体部であり、内面に工具痕と見込み付近に赤色顔料の付着が認められた。

調査区西側の中央付近において、複数の土坑を検出した(図203)。この周辺では、耕作痕があまり顕著ではなく、散漫な状況が看取される。ただし、この南西一帯には建物跡が多数検出され、上部に築かれる墳墓は時期の新しいものが多いことから、耕作地としてはない土地利用が行われた可能性も考えられる。検出した土坑も、これに関連する遺構であったとも考えられる。

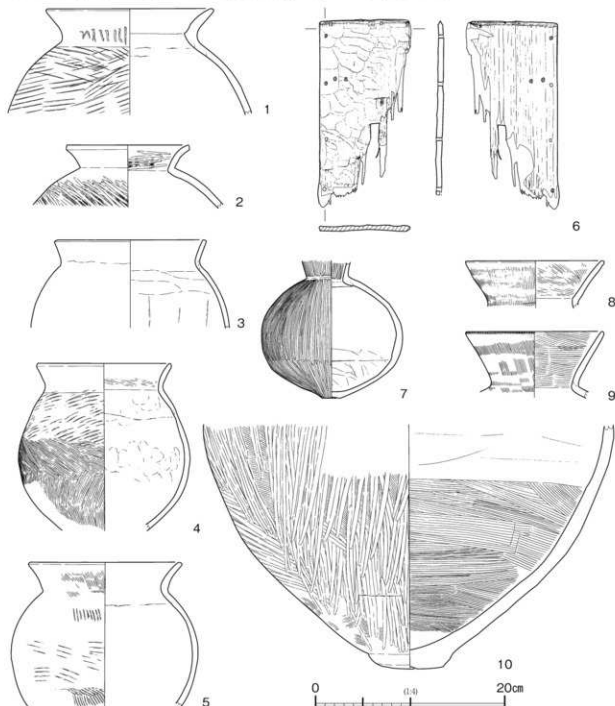


図209 05212土坑 出土遺物

05209土坑は、 $X = -153.057$ 、 $Y = -38.248$ 付近に位置する（図204、図版74）。歪な隅丸方形を呈し、直径52～60cm、深さ約30cmを測る。埋土は一部ブロック状であり、炭化物や植物遺体を含む。埋土の上面付近から、遺物がまとまって出土した。

遺物には小形壺・庄内形甕・高杯脚部があり、このうち、図化に適した壺と甕を図示する（図205、図版352）。1は体部が球形化した小形壺であるが、底部に粘土の削り取りによるわずかな凹部がみられる。図化に至らなかった高杯は、大きく開く低脚の裾部とみられ、おそらく椀形高杯に伴うものと思われる。

05210土坑は、 $X = -153.053$ 、 $Y = -38.260$ 付近に位置する（図206、図版74）。平面は不定形であり、直軸1.3m、短軸1.2mを測る。断面はすり鉢状を呈し、深さ約35cmを測る。遺構底部には、わずかながら段状に掘りくぼめた様子が見受けられる。土坑のほぼ中心の埋土上面において、遺物が集中する状況を検出した。遺物は原形に近い状態のものから碎片まで様々であり、使用不能になった遺物を集積したように見取れる。遺物には小形品・甕・壺・高杯が認められるもの、高杯等は細片のため図化には至らなかった（図207、図版352・353）。1は口縁端部をつまみ上げ、2～4は第V様式形甕の口縁部片である。6は生駒西麓産の胎土による小形の鉢であるが、乳白色に発色する異種の胎土を混入する。7はミガキ調整の小形鉢である。8は第V様式形甕であるが、体部中位にヘラによる叩き目のナデ消しを行う。9は外面全体が赤く発色する庄内形甕である。おそらく二次焼成を受けたものと思われる。

05212土坑は $X = -153.071$ 、 $Y = -38.235$ 付近に位置する（図208、図版75）。操車場に伴う攪乱とコンクリート杭により著しく変形したため、平面・断面ともに元の形状は不明である。検出した状態

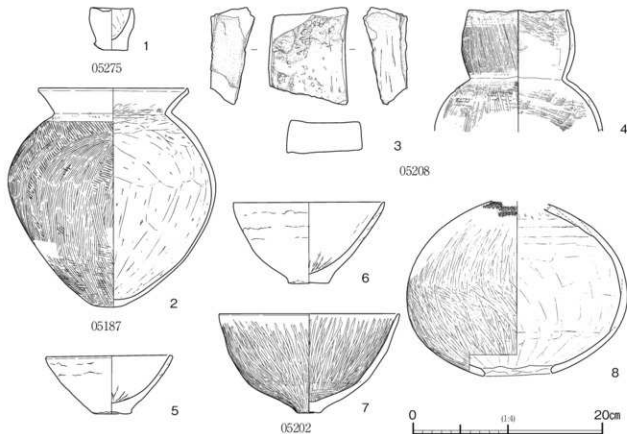


図210 05187・05202・05208・05275土坑 出土遺物

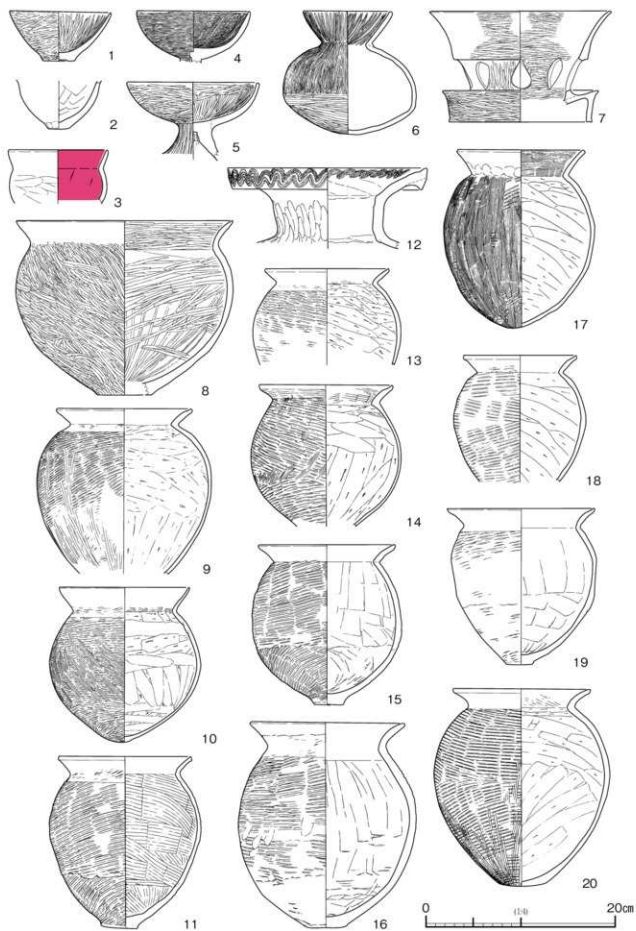


图211 05272土坑 出土遗物(1)

では、平面は長軸1.75m、短軸1.3mの不定形を呈し、断面は深さ約95cmの鼓形を成す。断面の変形については、攪乱以外に、遺構底部が細・中砂層であるため、側壁が抉れたことも原因と考えられる。埋土は砂を含む粘土・シルトを主体とし、植物遺体が多く含まれる。処々にラミナを形成する水成堆積層や、ブロック土が含まれており、水溜りの状態と崩落を繰り返したことが想起される。

遺物は埋土の中位付近と最上層から出土した。特に最上層では、土器の各部位に分かれた程度の大

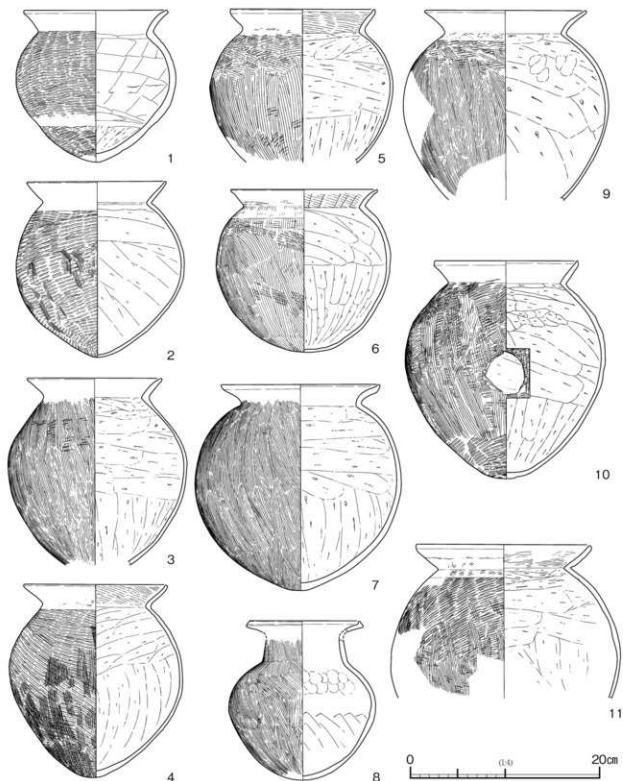


図 212 05272土坑 出土遺物(2)

さの破片でまとまって出土しており、その状態から、土坑の廃棄に伴って最終埋土に土器を埋納した様子が窺われる。現地の調査においても、常に水が湧出する状態であったことから、井戸として利用された可能性が高いと推測するが、攪乱が著しく、変形も顕著なために断定はできない。

出土した遺物は、壺・甕の土器以外に木製品がみられる（図209、図版354・355）。土器については、出土点数に対して、限定的な器種しかみられないことが特徴であり、高杯や鉢・小形品等は一切含

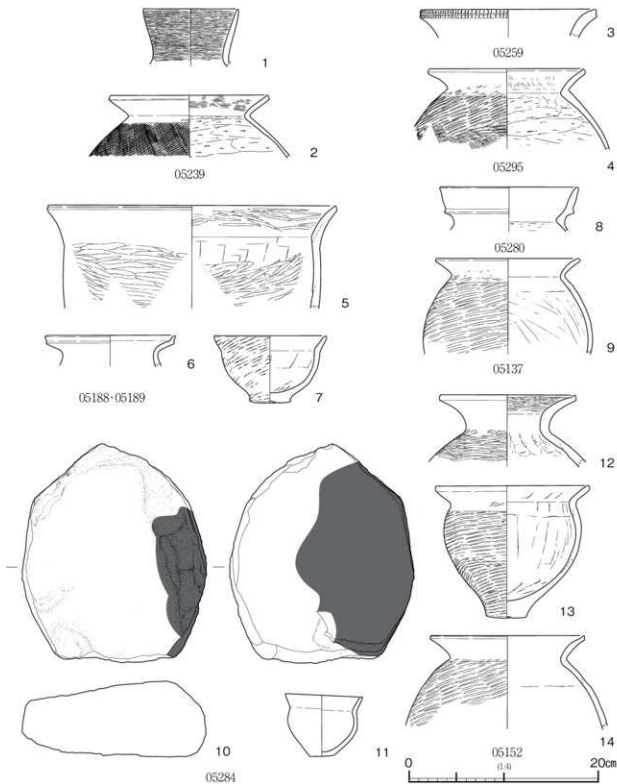


図 213 05239・05259溝、05188・05189・05280・05284畝間溝群、05137・05152畝間溝 出土遺物

まれていなかった。1は第V様式形甕の上半部であり、頸部外面に数条の縦方向ヘラ描きが施されており、ヘラ記号の一種ではないかと推測する。6はスギの柾目材を用いた板状木製品である。下端および右側縁を欠損する。上端は尖るように両側から面取りが行われており、左縁辺に沿って3mm角の方形ホゾ穴を4カ所穿つ。内部には木質が遺存する。それ以外に、上部2段目のホゾ穴の内側に1対の同形のホゾ穴と、中央付近に0.7×1.3mmの方形ホゾ穴を穿孔する。部分的に被熱の痕跡が認められる。指物と推測するが、形状は不明である。

上記以外にも、調査区の西南部付近では遺物の出土する土坑を検出した。05187・05202・05208・05275土坑について、特徴的な遺物を抽出し、図化を行った(図210、図版350～352・356)。1は05275土坑から出土したミニチュア鉢である。2は05187土坑から出土した平底気味の庄内形甕である。3・4は05208土坑から出土した遺物である。3は全長約10cmを測る安山岩製の板状礫片であり、表面が平滑化していることから、石皿等に用いられたと推測する。4は東海系の影響による甗形土器である。5～8は05202土坑から出土した土器である。5～7は鉢であり、7は内外面ともミガキ調整による。8は壺の体部であり、頸部付近の外面に櫛描波状文を施す。また、底部には焼成後に施された穿孔がみられる。

調査区の西南部においては、特筆すべき遺構として05272土坑が挙げられる(図203、図版76)。本遺構は、第5-2面の44号墳前方部の下面に位置する。墳丘下面に残存する耕作土の第5-2層から、その基盤層である第5-2b層に向かって掘削を行ったところ、第5-2b層中から大量の土器が出土したものである。遺物は氾濫堆積物の中から検出されたとはいえ、包含層資料として考えることは難しく、その出土状況から、土器を単に集めたものではなく、土坑のような一定の形状の中に入れたものと推測する。しかし、あくまでも遺構としての形状は確認することができなかった。ただし、上記のような観点から、非常に一括性の高い資料であるといえることは間違いない。

調査の所見から、墳丘下面の第5-2層上面では検出されなかったことが明らかであり、同層の除去面である第5-2b(1)面に帰属する遺構と判断した。遺物は、ほぼ原形の状態のものが数点含まれており、破砕していても、一部の欠けや復元によって完形に戻るものが多く見受けられる。中には体部に穿孔を行われた土器もあることから、祭祀関連の遺物であることは間違いないと考える。本遺構の上面には、当地では希少な前方後墳が築かれることから、何らかの関係が存在したと可能性はあるものの、残念ながら検証は困難である。

遺物は、小形品・高杯・壺・甕が出土しており、その中でも圧倒的に甕の割合が高い(図211・212、図版357～361)。1・2は小形の平底鉢である。3は小形丸底壺であり、体部外面に煤が付着し、内面全体と破断面に赤色顔料の付着が認められる(原色図版13)。4・5は椀形高杯の杯部である。6は体部上半の外面と口縁部内外面に、上下に反復するミガキ調整が特徴的な細頸直口壺である。丸底ながらやや扁平な体部下半は、東海系の影響であろうか。7は北陸系の装飾器台の上半部である。形状、胎土から、搬入品と考えられる。8はミガキ調整による大型の鉢である。12は口縁端部を垂下する広口壺である。端部の内外面に櫛描波状文を施す。図212-8は内傾する頸部から外へ開く口縁部を特徴とする阿波系の広口壺である。搬入品である可能性が高い。上記以外はすべて甕であり、第V様式形甕と庄内形甕がみられる。図211-10・13は庄内大和型甕、図211-16は第V様式形甕の搬入品と考えられる。図212-10は体部中位に焼成後の穿孔が認められる。

調査区内の他の遺構からは散発的に遺物が出土する程度であり、ほとんど遺物は含まれない。特に耕

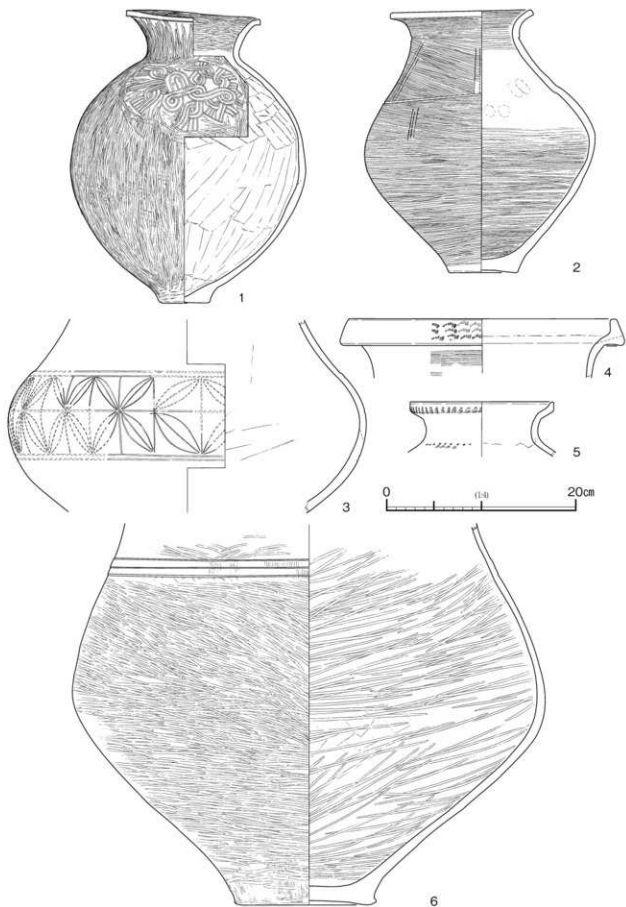


图214 第5-2b层 出土遗物(1)

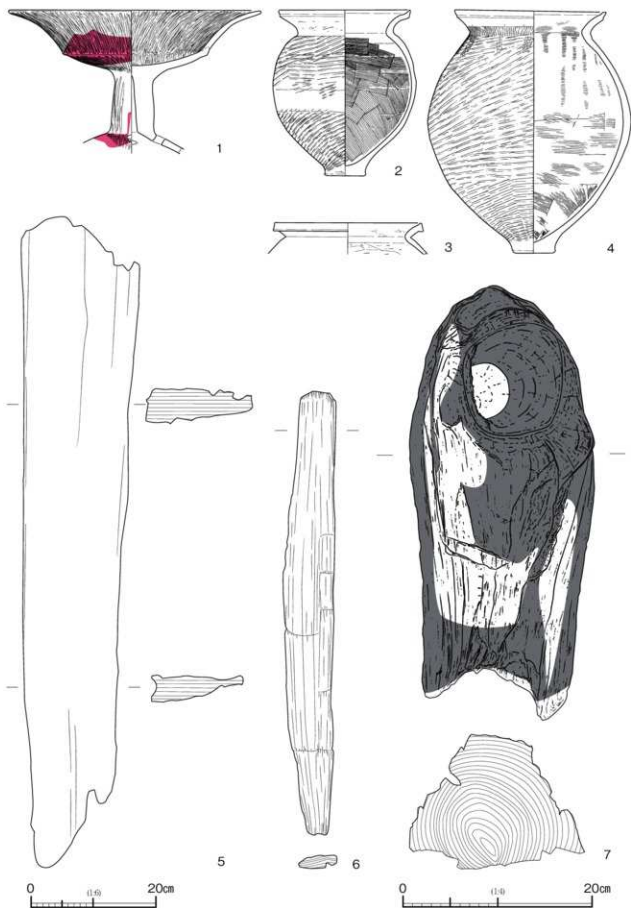


图 215 第 5-2 b 层 出土遗物 (2)



作痕を多く検出した地区では、遺物の出土量が非常に少ない傾向が認められる。本遺構面における耕作の状況を知る一つとして、耕作痕に含まれる遺物の特徴的なものを抽出し、図化を行った（図213、図版350・351・355・356・362）。1・2は調査区北東部に位置する05239溝から出土した遺物であり、細頸直口壺と庄内形甕である。3は調査区中央部の北側に位置する05259溝から出土した弥生時代前期壺の口縁部片である。4は調査区の南西、01-4調査区に位置する05259溝から出土した庄内形甕である。5～7は調査区北西隅部に分布する05188畝間溝群、調査区南西隅部に分布する05189畝間溝群から出土した遺物である。8は調査区中央部の南側に位置する05280畝間溝から出土した山陰系の複合口縁甕であり、搬入品の可能性がある。9は調査区西部の中央付近に位置する05137畝間溝から出土した第V様式形甕である。10・11は調査区中央部の南側に広がる05284畝間溝群から出土した遺物である。10は細粒花崗岩製の礫石であり、部分的に煤が付着することから、竈石等に利用したものと思われる。11はミニチュアの甕である。12～14は調査区西部の南側、前述の05272土坑の北東に隣接する05152畝間溝群から出土した土器である。12は頸部に刺突文を施す広口壺である。13・14は第V様式形甕である。

本遺構面の基盤層である第5-2b層に包含されて出土した遺物のうち、主要なものについて抽出し、図示する（図214・215、図版363～365）。

図214-1は畿内第V様式後半の壺である。第6-1面における06037流路を埋没した第5-2b層の越流堆積物から、ほぼ原形に近い状態で出土した（図版53）。層位的には同層となるため、ここに掲載する。タタキ成形後、外面にハケ調整を行い、ナデ消した？肩部に線刻画を施す。線刻画は3本を1対とする帯状の組み合わせで表現されており、その形状から組帯文や組紐文と呼称する（原色図版9-1）。所々に回ったり、結んだりする表現がみられ、周縁には末端を示すものもある。表現の対象については不明であり、幾何学的な文様として捉えるしかない。2・3は畿内第I様式の壺である。05006流路の周辺に氾濫堆積物から出土した。2は生駒西麓産の胎土であり、口縁部と頸部、頸部と体部の境に明瞭な段をなし、頸部と体部に縦方向の区分線を3条の沈線で表現する。3は体部のみの破片である。体部と頸部の間の段は認められず、体部最大径の位置に沈線で木葉文を施す。4は畿内第III様式の壺口縁部である。調査区北東部、第6面以前に微高地が存在した地区のわずかな第5-2b層から出土した。水平に開く口縁の端部が上方に拡張し、外面に櫛描扇形文を施す。5は弥生時代中期壺の口縁部片である。調査区西部の中央、06037流路の氾濫堆積物から出土した。外反する頸部からやや上方に屈曲する口縁部の外面と、肩部外面に刺突文を施す。6は畿内第I様式中段階以降の壺体部である。05006流路の北東付近の氾濫堆積物から出土した。頸部以上を欠損するものの、体部上半に削り出し凸帯と1条の沈線を施す。これらは氾濫堆積物によって運搬されたり、下層から削り出されたりしたものであるが、当地周辺の過去の環境を知る上で貴重な資料といえる。

図215-1は庄内式期古段階の高杯である。杯部外面と脚部に赤色顔料が付着し、杯部内面に煤が付着する。2～4は甕である。2・4は第V様式形であるが、3は口縁端部がわずかに上下に肥厚し、ナデにより整形する。

これらの土器以外には木製品が出土する。図215-5は厚さ約6cmを測るスキの板材である。上下両端および右側面の腐食が著しく、木目が流失したものと推測する。6はコナラ亜属の板状木製品である。板目に加工するものの両端が欠損し、用途は不明である。7はスキの芯持ち材である。上端に大きな節穴があり、自然木と考えられたが、表面の大部分が被熱により炭化する。未製品、もしくは部材として使用したものと思われる。

Y=-38,050

Y=-38,100

Y=-38,150

Y=-38,200

Y=-38,250

Y=-38,300

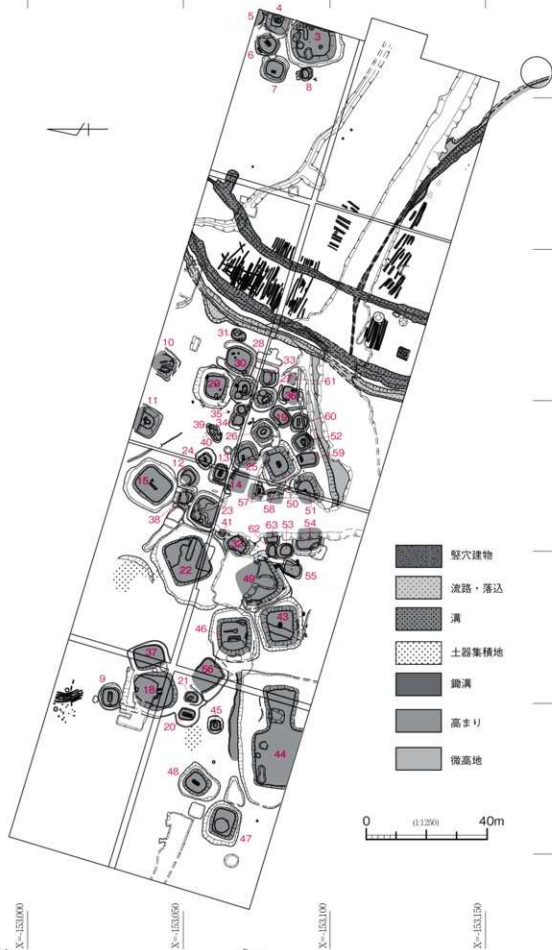


図 216 第 5-2 面 遺構分布

#### 4. 第5-2面の遺構

土壌化層である第5層のうち、層界は不明瞭ではあるが、土壌化の非常に顕著な第5-1層を除去した面を第5-2面とする。本遺構面を特徴付ける遺構は墳墓であり、その多くは上層の第5-1面において検出が可能であるものの、いずれの周溝内にも第5-1層が堆積し、築造当初の景観を表すためには同層の除去が必要であった。また、第5-1層を除くと、新たな墳墓が多数検出されることから、第5層の土壌化層の途中で別の旧地表面を設定する点については、十分に妥当であると判断された。調査区の大部分で第5-2面の設定が任意ではあるものの、墳墓のみられない調査区東側の低地部分における複数の土壌化（耕作土）層に対応する可能性が高いこともわかった。第5-2層の土壌化が行われている間、墳墓は築造され続けており、その最初から最後までを1つの遺構面で表現することに若干の無理が存在することは明らかである。実際に、墳墓の詳細な観察において、それぞれが異なる築造や埋没の過程を辿ることは把握できたものの、立地条件や周辺環境等の様々な要件に因るため、遺構面を念頭として単純に分類することは不可能である。したがって本遺構面では、第5-1層除去による第5-1面の下面遺構と、第5-2層中に形成された墳墓を中心とする遺構の最終景観の両者を表現する。

第5-2b面以降、地形的な変化が起こらなかったことは明らかであり、土地利用のみが劇的に変化

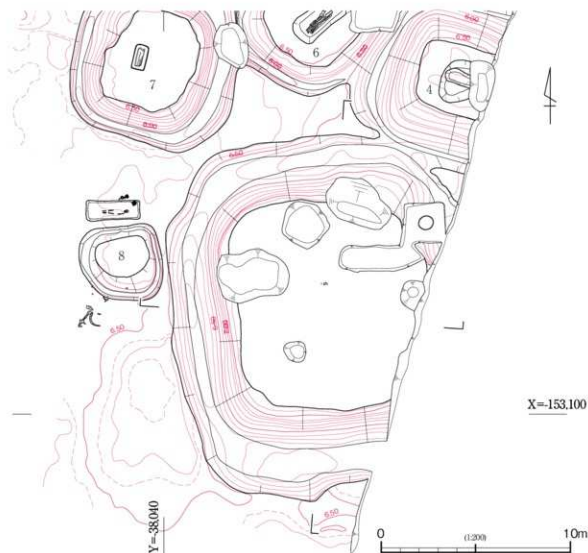
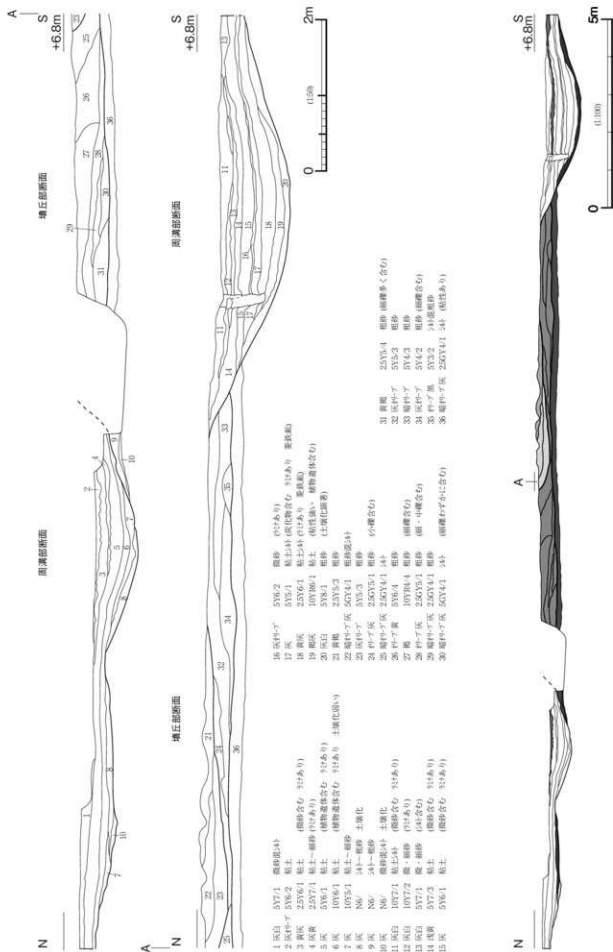


図 217 3号墳 平面



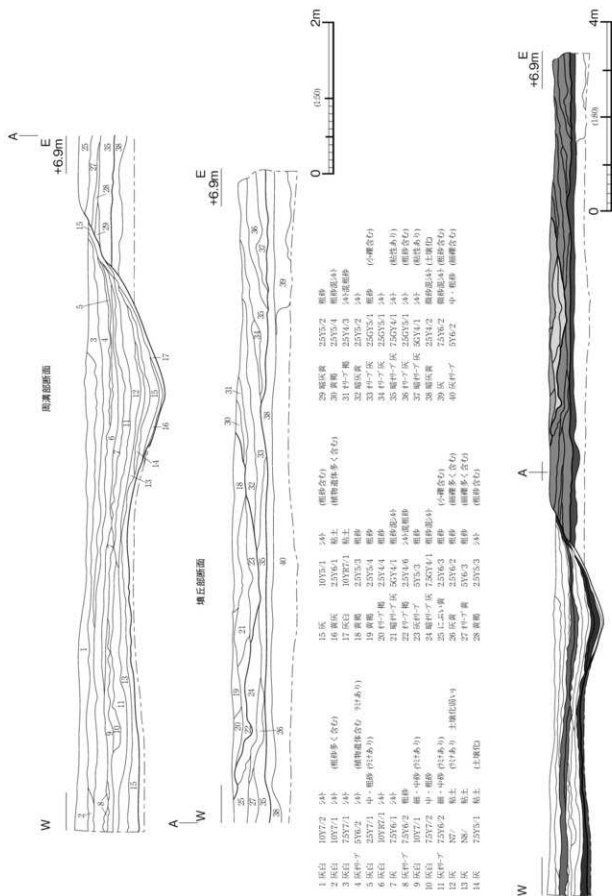


図 219 3号墳 南北断面

したと考える。しかし、第5-2面における変化は、本調査区の中でも高所である自然堤防上のみみられるものであり、低地部やその周辺の微高地では引き続き耕作が行われている。本調査区の第5-2面を特徴付ける墳墓は、群を成して墓域を形成することから、生活空間全体を示す場合の遺跡のすべてが墓域に変化することはないはずである。したがって、久宝寺遺跡といった広い範囲で変遷を捉えた場合には、当地に限定した土地利用の変化、つまり墓域の形成であった可能性も考えられる。本調査区では弥生時代の墓域を確認していないことから、領域の移動という観点からすれば、周辺の調査や隣接する加美遺跡の周溝墓の存在を考慮しなければならないであろう。

第5-2面とする遺構は、墳墓以外に落込・溝・堅穴建物・土坑・ピット・耕作痕・土器集積が挙げられる(図216)。下面の第5-2b面ではほぼ全面的に耕地化されていたものが、第5-2面では土地利用の変化により明確な領域に分かれるように見える。特に、調査区中央よりやや東側に位置する南

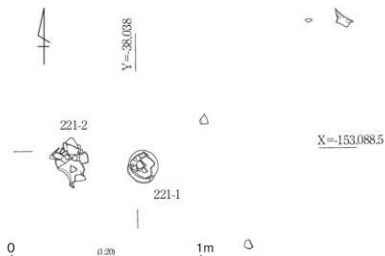


図220 3号墳北側 遺物出土状況

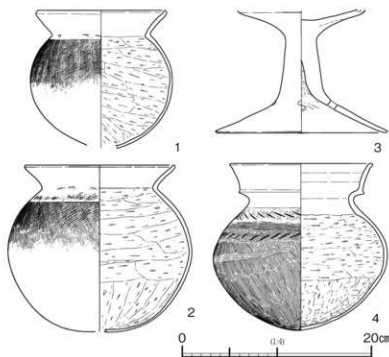


図221 3号墳 出土遺物

北方向の溝・落込を境として、東西では遺構の分布に大きな違いが認められる。溝より東側では、中央の低地部分を中心に耕作地としての利用は下面と変わらない。しかし、調査区の北東隅に複数の墳墓が集中して築かれており、これらは既刊の久宝寺1号墳(竜華地区V)に繋がって1つの墳墓群を形成したと考えられる。この墳墓群と、その南側に広がる耕作地を区分するような遺構等は認められず、唯一地形の変化のみが両者を区別する。一方、溝より西側では、本調査区内に限ってはほぼ墳墓のみが築かれており、墓域として利用されたようである。ただし、緩やかに下降して地形的に低所となる調査区の北西部分では墳墓が築造されず、他の遺構も確認できない空白地となっている。また、本調査区の南側は既刊の「竜華地区VI」となるが、当該遺構面では墳墓の築造が認められず、主に耕作地として利用されている。このように、墳墓群を形成する場所は、久宝寺遺跡の中でも限定的あるいは局所的なものであった可能性が高いと考えられる。本調査区に限れば、墳墓が地形の高所を

中心に築造されたことは明らかであり、地形が墓域形成の要因の一つであったことは間違いない。

以下に、まず各墳墓の調査成果について一通り報告し、同遺構面のその他の遺構を後述する。

本書に記載する墳墓群は、既刊の久宝寺1号墳（竜華地区V）や2号墳（同VI）と調査区が隣接し、また、同一の報告書群の中で墳墓番号が重複しないよう考慮し、既往の番号からの通し番号とした。一覧表編の表63を参考に、調査区の北東から南西の墳墓までを順に記載する（図216）。

**3号墳** 調査区の北東、 $X = -153.095$ 、 $Y = -38.032$ 付近に位置する（図217・図版80）。墳墓の南東部が調査区外に広がり、墳丘の北半が部分的に攪乱を受けるものの、全体的な形状は良好に遺存する。墳丘の平面は隅丸方形を呈し、基底面における規模は南北約13mを測り、東西約12mに復元できる。今回確認した調査区北東部の墳墓群の中では最大規模であり、1号墳を含むと、それに次ぐ墳墓となる。墳丘構築時の旧地表面を基底面と称するが、この基盤となった層が第5～2層であり、本墳墓の下面では1層分を検出した（図218・219）。同層を基準とする墳丘高は30～45cmとなる。

墳丘の盛土は非常に細かく分層が可能であり、現地では計18層を確認した。東西、南北のいずれの断面も、墳丘肩口から中央に向かって小単位の盛土層が積み重なる様子が看取される。また、図化は行わなかったが、墳丘の掘削途中にみられた平面略測図によると、外縁から中央に向かって広がる盛土の単



図222 4号墳・5号墳 平面

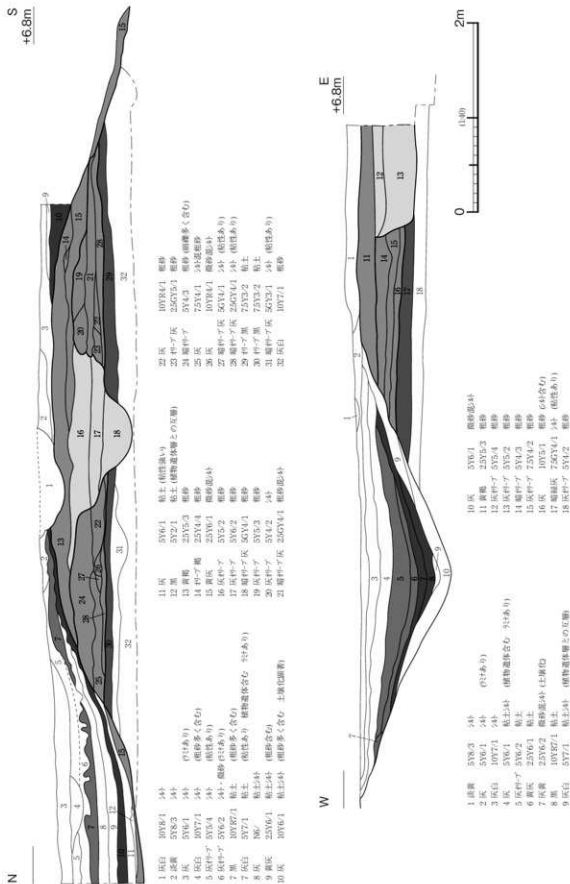


図 223 4号墳 平・断面、出土遺物



位が確認された。さらに、墳丘盛土の土質にみる砂粒の大きさは、下層に比べて上層が粗くなることが明らかである。これらのことを総合すると、周溝の掘削に伴って排出する第5-2b層を、内側に集積することによって次第に墳丘を形成したと考えられる。このような墳丘の構築方法は極めて一般的なものであるが、本調査区の墳墓においては周溝の掘削や墳丘の盛土等に微妙な違いのみられることがわかっており、詳細は個別に記載する。

3号墳の周溝は断面形が鉢状を呈し、幅2.5~3.5m、深さ約50cmの規模で墳丘の四周を巡る。周溝の底面が、基盤層である第5-2層より下層の第5-2b層を著しく掘削する点は、調査区西側の墳墓群にはあまりみられない特徴である。周溝埋土の最下層には第5-1層が形成されており、大半は第4層の氾濫堆積物が占める。後述にみるような墳丘からの崩落土はほとんど確認されなかった。

埋葬施設は、墳丘の内外を含め、これといった明確なものは認識されなかった。墳丘の上部が後世の耕作により削平されることから、その際に主体部を消失したものと推測する。しかし、墳丘断面を検討すると、墳丘中央部付近に幅約2.7m、長さ約3.6mを測る凹みの存在することがわかり、主体部の掘形であった可能性も考えられる(図218・219)。あくまでも断面からの推測であり、盛土の過程で自

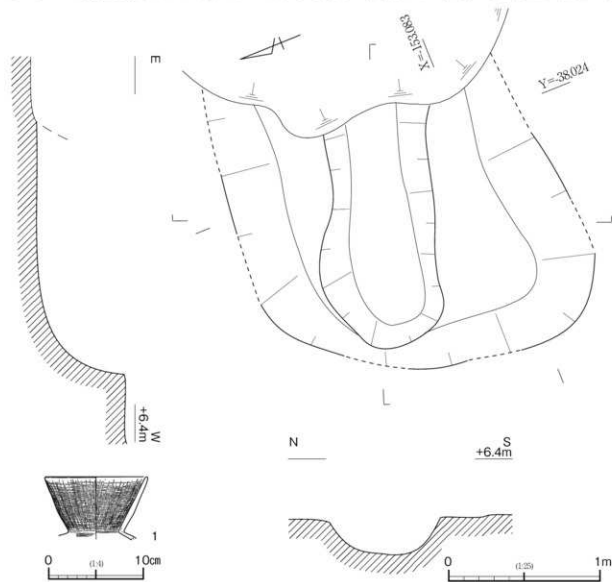


図224 4号墳主体部① 平・断面、出土遺物

然にできた形状の可能性もあり、参考程度に止めておく。

遺物は、墳墓の北側を中心に出土した。墳丘肩部から周溝にかけて、ほぼ原形に近い状態の土器が数点あり、おそらく墳丘から転落したものがそのまま氾濫堆積物の中に埋没し、圧砕されたものと考えられる(図220)。その他は、第V様式形甕から瓦器碗の破片といった複数時期の混入細片が埋土や盛土内から出土するのみである。3号墳に伴う遺物としては、庄内形甕・高杯・山陰系甕が挙げられる(図221、図版365)。1・2は庄内形甕であるが、叩き目後にハケ調整が明瞭に残る。頭部下にハケ調整のナデ消しが認められる等、布留形甕の祖形といえるものである。いずれも胎土は生駒西麓産である。4は外反する複合口縁をもつ山陰系甕である。肩部外面に上下2段で綾杉状に斜線文を施す。胎土が在地のものではないことから、山陰地方から搬入されたものと推測する。これらの土器から、3号墳が築造されたのは布留式期最古段階と考えられる。

**4号墳** 調査区の北東部隅、 $X = -153.082.5$ 、 $Y = -38.025$ 付近に位置する(図222、図版81)。墳墓の東半が調査区外にあるために全体形は把握できないものの、現状から推測される墳墓の平面は、一辺約5.9mの隅丸方形である。墳丘断面では下面に基盤層である第5-2層が確認され、その上部の盛



図225 6号墳 平面

土は16層に細分が可能である(図223)。

盛土は埋葬施設の構築面を境に上下に分けられ、土質にはあまり差はないものの、下半は盛土の単位が小さいのに対し、上半では墳丘全体に平均して行っており、土砂の構築方法に変化が認められる。隣接する墳墓との境界が不明瞭ではあるものの、周溝は幅1.2~2.0m、深さ45~60cmを測り、断面形がすり鉢状を呈する。

西側の周溝は隣接する6号墳との共有溝のようにみえるが、周溝底や断面によると、6号墳には関係なく、4号墳の形状に合わせて掘削されたことが明らかとなった。埋土の最下層には、墳丘からの崩落土と思われる薄い土壌が認められる。この崩落土によって周溝が埋没することではなく、第4層の耕地化まで形状は遺存していたと思われる。

なお、周溝内埋土の第5-1層は墳丘頂部に連続して確認され、この形状が第5-1面において一様に土壌化したことを示すものであり、4号墳の墳丘はほぼ当時の状態のまま残っていたことが明らかとなった。

埋葬施設としては、墳丘上の盛土を約20cm除去した面で、墳丘のほぼ中央部に1基の主体部を検出した(図224)。

主体部①の掘形は、幅2.0~2.2m、深さ約55cmのやや歪な隅丸方形を呈し、長さ約1.8mを確認した。掘形の底面においては、さらに1段下がる溝状の落込みを検出した。溝状凹みの規模は、幅65~75cm、深さ約25cmを測る。

同様の形状をもつ埋葬施設が、隣接する6号墳にみつかっており、これから木棺設置用の棺床であったと推測される。全体の形状が未確認であるため、周辺の埋葬施設を参考にすると、頭位は東側に

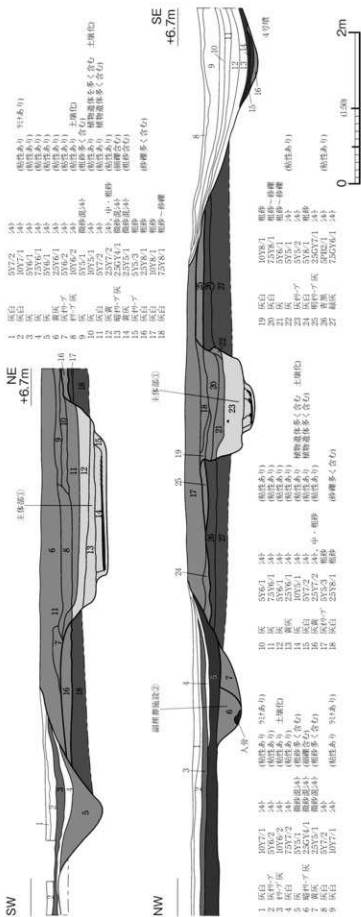


図226 6号墳 断面 6号墳主体部①・副埋葬施設② 断面

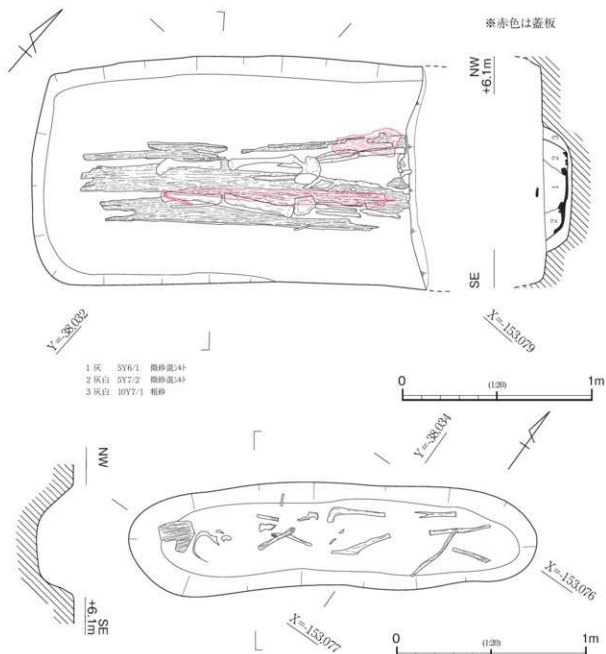


図227 6号墳主体部①、副埋葬施設② 平・断面

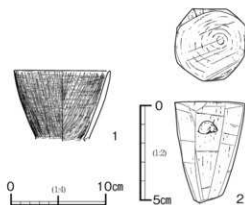


図228 6号墳 出土遺物

あった可能性が高く、真北から約103°東に振った位置と推測される。なお、墓坑・棺床とも、内部から木棺や遺骸、遺物の出土は認められなかった。

遺物は西側から北側の周溝を中心に出土するものの、ほとんどが細片であり、周溝の掘削時に混入した土器の可能性が高い。図示した遺物は、墳丘の北側から出土したものである(図224、図版336)。1は小型の直口壺口縁部片であり、内外面とも、横方向の細かいミガキ調整の後、縦方向の暗文を施す。資料が少ないため推測の域を出ないが、4号墳の築造は庄内式期新段階と考えられる。

**5号墳** 調査区の北東隅に位置し、4号墳の北側に隣接する(図222)。墳丘のほとんどが調査区外にあり、わずかな墳丘斜面の立ち上がりと、これを囲む周溝の一部を検出した。墳丘の形状・規模とも不明であるが、周溝は幅50cm程度と思われる。埋葬施設はみつかっておらず、遺物は細片のみであった。

**6号墳** 調査区の北東、 $X = -153.079$ 、 $Y = -38.032$ 付近に位置する(図225、図版82)。南東に4号墳、南西に7号墳が隣接する。墳墓の北東部を擾乱によって失うものの、残存状況は概ね良好である。墳丘の平面は、長軸約6.4m、短軸5.9mの円形に近い隅丸方形を呈する。墳丘の下面では基盤層である第5-2層を2層確認し、その上部に複数の盛土を検出した(図226)。

盛土は墓坑の構築面を境に上下に分けることが可能であり、残存する墳丘高は20~35cmとなる。

周溝の断面形はすり鉢状を呈し、幅1.0~1.6m、深さ約40cmで墳丘の四周を巡る。平面形は墳丘頂部と異なり、ほぼ円形を呈する。周溝の埋土は土壌化が著しいことから第5-1層相当とするが、他の墳墓の例からすると、墳丘の崩落土が基本と考えられる。おそらく、それらが土壌化したものであり、層界が不鮮明なために一括したのであろう。南東部分の埋土が異なるのは、前述のように4号墳により再掘削されたためであり、崩落土は少なく、構内の土壌化も進行しなかったと考えられる。

埋葬施設は、主体部と木棺墓を各1基検出した(図225)。



図229 7号墳 平面

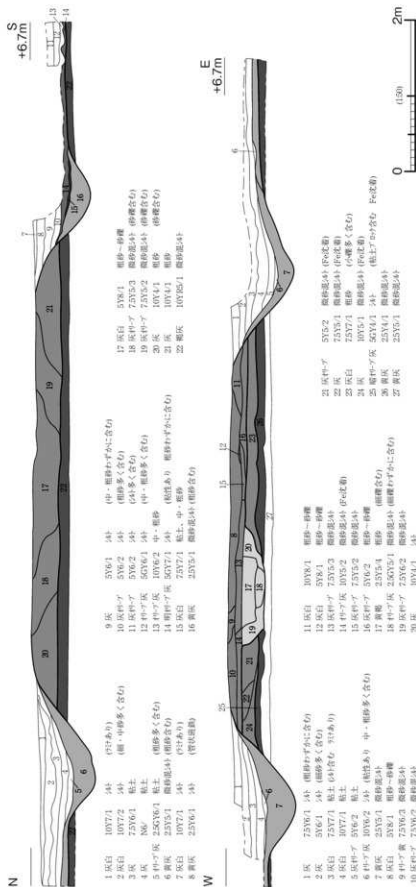


図 230 7号墳 断面

主体部①は墳丘のほぼ中央に位置し、北東側約3分の1が攪乱により消失する(図227)。墓坑の平面は隅丸の長方形であり、残存長約2.0m、幅1.2mを測る。墓坑は基盤層下の第5-2b層に達しており、掘り込みによって構築された。墓坑の底面には一回り小さな落込みが段をもって掘削され、内部から木棺と人骨が出土した。落込みは幅約65cm、深さ約15cmを測り、木棺の外や下に裏込土が残存する。木棺はスギ材を使用し、上下に約15cm離れて検出したことから、組合式箱形木棺と推測する。人骨は底板上面に大腿骨・長骨等を検出したものの、遺存状態はあまり良好ではなく、攪乱によって上半身を失う。頭位は真北から約48°東に振った北東方向である。

副埋葬②は北東周溝内に位置する。墳丘断面によると、墓坑は周溝が埋積した後に掘削され、埋納後に第5-1層の形成したことが明らかである(図226)。

墓坑は長さ約2.3m、幅約55cm、深さ約30cmの長楕円形を呈する。墓坑内に木片が出土しており、木棺葬と考えられるものの、詳細は不明である。また、人骨や歯片も出土したが、遺存状態が良好ではなかったため、鑑定には至らなかった。ただし、人骨の状態から、頭位は主体部と対称の、真北から約125°振った南西方向である。

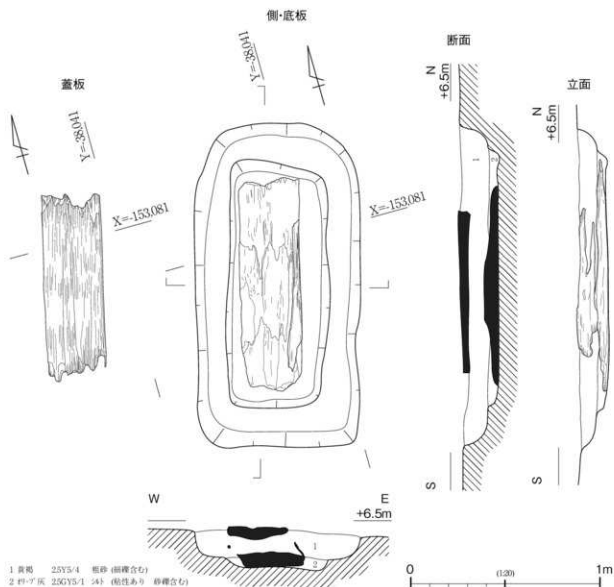


図231 7号墳主体部① 平・立・断面

遺物は、周溝や墳丘盛土等に細片が含まれる程度であり、個体として認識できるようなものはみられない。しかし、破片の中に精製土器が多く含まれる傾向が看取され、その中でも固化する可能な遺物を抽出した(図228、図版366)。1は細頸直口壺の口縁部片である。2はコナラ亜属の芯持ち材を使用する木製品である。断面八角形の円錐状に加工されており、外面全体に成形時の削り痕が明瞭に残存する。これらの遺物から、6号墳の築造時期は庄内式期新段階から布留式期古段階の範疇と考える。

**7号墳** 調査区の北東、X=-153.081、Y=-38.041付近に位置する(図229、図版83・84)。6号墳の西側に隣接し、調査区北東部の墳墓群の中では最も西端の位置にある墳墓である。6号墳との境に攪乱があり、切り合い関係が不明ではあるものの、墳墓の全体としては良好に残存する。墳丘の平面は隅丸方形を呈し、

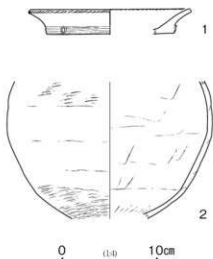


図232 7号墳 出土遺物

基底面における規模は長辺約6.1m、短辺5.5mを測る。墳丘上面は歪な形状を呈するが、これは墳丘盛土が部分的に崩落したための変形であり、本来は墳丘下端と同様の形状だったと推測する。

墳丘の断面では、下面に基盤層である第5-2層が1層残存する状況と、その上部に約35cmの厚さの盛土層が重なる状態を確認した(図230)。墳丘の上部は後世の耕作による攪拌を受けて削平されるものの、東西断面では埋葬施設の覆土を確認することが可能であり、当時の墳丘形状が良好に残存している。墳丘の盛土については、南北断面において、外縁から中心に向かって土砂の盛られた状況を確認することができる。しかし、一方では東西断面に確認できる埋葬施設の構築面が設定できないことや、東西断面では同様の盛土単位を検出できないことから、あらゆる方向から均等に盛土がなされたわけではないと予測される。断面から推測すると、南辺と北辺に堤状の盛土を築き、その間に埋葬施設構築面となる東西方向の平坦面が形成されたと考えられる。ただし、断面図の交点では矛盾も生じているため、断定はできない。周溝は、断面がすり鉢状の幅1.3~2.0m、深さ30~40cmを測り、墳丘の四周を巡る。埋土には自然堆積層がみられず、大半が墳丘からの崩落土と考えられる。東側周溝のように凹みが残る場所もあり、部分的ではあるが、上部に第5-1層の形成が認められる。

埋葬施設は、墳丘上に主体部1基を確認したのみである。主体部①は、墳丘盛土を18cmほど除去した

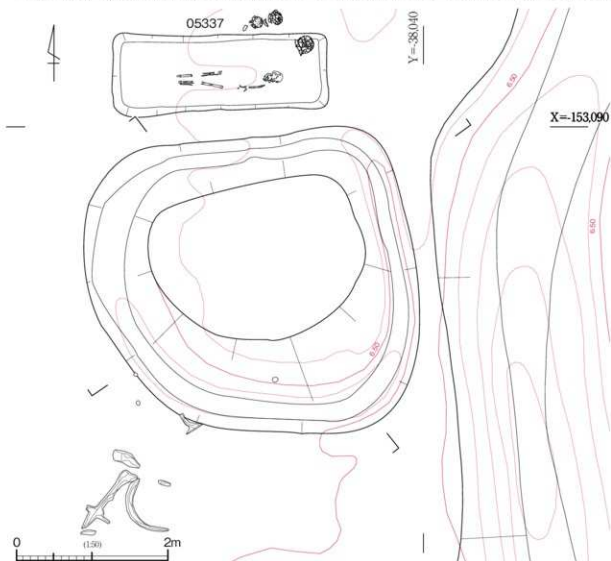


図233 8号墳 平面



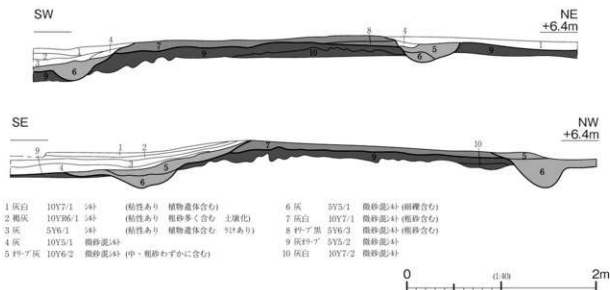


図234 8号墳 断面

面において、墳丘の中央からやや北西にずれた位置に検出した(図231)。掘形の平面は隅丸の長方形を呈し、長さ約1.7m、幅85cm、深さ約15cmを測る。掘形の底面は一回り内側に段をもって掘り下げられており、その中に木棺を設置する。木棺は小口板を除く底板・側板・蓋板を検出しており、幅約33cm、長さ約1.13mの組合式木棺が使用される。底板は掘形の底面に直接設置され、裏込土の状況から、組み合わせながら木棺の周囲を埋め立てたと推測する。なお、主体部①の断面として木棺周囲の形状のみを图示するが、図230の東西断面によると、图示した形状の外側に基盤層を削る掘形を確認し、これが本来の墓坑であった可能性は高いと考える。ただし、外側の掘形に伴う埋土を、前述した木棺掘形が削り込むような状態にもみえることから、墓坑の構築を説明することが非常に困難であり、断定はできない。

遺物は、周溝や盛土から細片が出土する程度であった。残存率は低いものの、西側周溝および墳丘の南西部から出土した土器について図化を行った(図232、図版366)。1は口縁端部に刻み目、屈曲部に凹線と竹管円形浮文を施す複合口縁壺である。2は叩き目をナゲ消した壺の体部片と思われる。資料

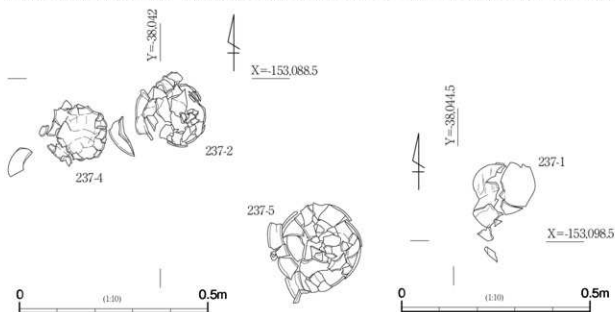


図235 8号墳 遺物出土状況

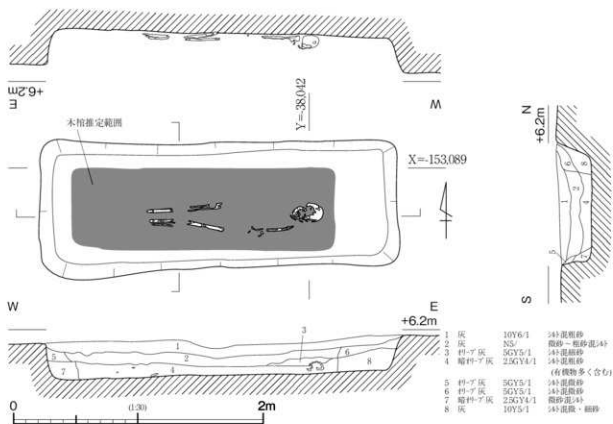


図 236 05337木棺墓 平・断面

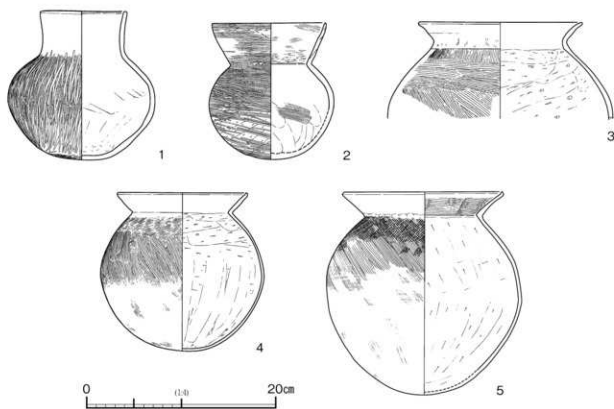


図 237 8号墳 出土遺物

が少ないために推測の域を出ないが、これらの遺物から、7号墳の築造は庄内式期中段階頃と考える。  
**8号墳** 調査区の北東、 $X = -153.093$ 、 $Y = -38.044$ 付近に位置する(図233、図版85)。北東部の墳墓群の中では西端にあり、先述した3号墳が本墳墓の東に隣接する。墳丘上部は削平されるものの、攪乱等が無く、墳墓の全形を検出した。墳丘の平面は歪な隅丸方形を呈し、基底面における規模は一辺約3.0mである。墳丘上面が半円形を呈するが、特に墳丘南側の崩落が著しかったために変形したものと考えられる。墳丘断面では、下面に基盤層である第5-2層を検出し、その上部に盛土層を確認した(図234)。周溝は、幅60~90cm、深さ10~20cmの断面U字状を呈し、墳丘の四周を巡る。埋土には墳丘からの崩落土のみが認められることから、周溝は早い段階に埋没したと思われる。

埋葬施設は墳丘上や周溝内では確認できなかったものの、墳墓の北側に木棺墓を検出した。やや離れた位置にあることから二次的な埋葬施設とは捉えず、単独の遺構として後述する。

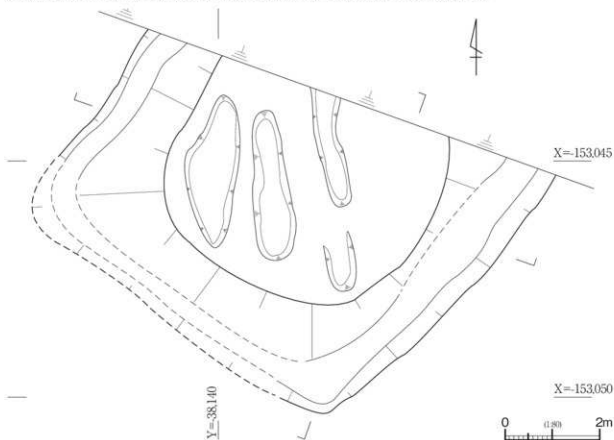


図238 10号墳 平面

遺物は墳丘および周溝から出土した。遺物の大半は細片であり、原形のまま圧砕された状態でみつかったものは、墳墓北側に位置する木棺墓上面等から出土したことがわかった(図233・235)。調査当初は8号墳の輪郭が不鮮明であったため、広範囲の遺物を対象として取り上げたものである。ただし、8号墳の周溝は早い段階に埋没したことが明らかであり、墳丘上の土器が転落した可能性も考えられることから、ここでは調査所見のお

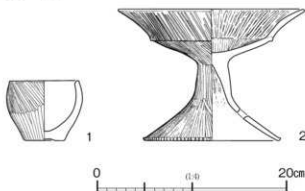


図239 10号墳 出土遺物

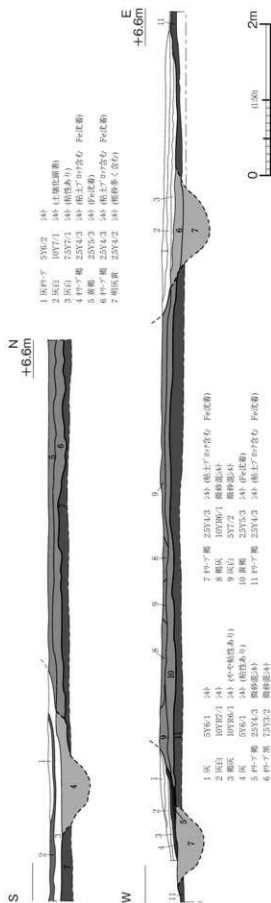


図240 10号墳 断面

り、8号墳の遺物として報告する。遺物には、小形壺・甕がみられる(図237、図版366・367)。1は墳墓の南側から出土した異形丸底壺であり、2・4・5は05337木棺墓の上面から出土した小形の直口壺と庄内形甕、3は墳丘上面から出土した布留形甕である。これらの遺物は布留式期の最古段階に比定できるが、本書に記載する墳墓群の中で、同時期の墳墓の周溝が崩落土によって埋没した例は皆無である。このように堆積状況と出土遺物の時期が整合しないものの、必ずしも木棺墓等の他の遺構に同伴するとは限らないことから、8号墳に伴う可能性の2者を提示するまでに止めておく。

**05337木棺墓** 8号墳の北側、 $X = -153,089.5$ 、 $Y = -38,043$ 付近に位置する(図236、図版85)。第5-2層上面にて検出され、墓坑の平面は幅約1.0m、長さ約2.8mを測る隅丸の長方形を呈する。掘形は鉛直に近い状態に掘削されており、断面が深さ約27cmの逆台形を呈する。埋土の断面によると、東西、南北共に掘形の内側に縁の切れる様子が看取され、さらに内側の埋土には木質片が多く含まれることから、本来は木棺による埋葬の行われた可能性が非常に高いと考えられる。推定する木棺の規模は、幅約65cm、長さ約2.08m、高さ約20cmである。この推定範囲の埋土の最下層から、人骨が出土した。人骨は頭骨・大腿骨・脛骨と歯片を確認し、鑑定の結果、成人を葬ったものであることがわかった。頭位は真北から約90°東に振った真東の方向にある。

**10号墳** 調査区中央の北端、 $X = -153,045$ 、 $Y = -38,138$ 付近に位置する(図238、図版86)。墳墓の北側3分の1が調査区外にあるものの、凡その形状は確認することができた。10号墳は調査区中央一帯に検出した墳墓群の範疇に取まると考えるものの、集中箇所との間に空地が認められることから、後述する11号墳と共に単独で築造されたか、あるいは北側の調査区外に別の墳墓群が存在する可能性も考えられる。現地調査では、周溝の埋土が基盤層である第5-2層と区別し難く、当初は台状墓様の形状とされていた。しかし、墳丘下面の調査を行ったところ、

東西両側の墳丘裾部付近に平行する溝を検出した。東側の溝については、南端が北西に向かって屈曲する様子も確認され、墳丘との平面図合成による検討を行った結果、これらの溝は周溝の掘り残しである可能性が極めて高いことがわかった。墳丘断面図にはこれらの溝の断面を合成しているため、破線で表示する。墳丘の平面は一边約6.7 mの隅丸方形に復元できる。上面の耕作によって墳丘上部は著しく削平され、盛土の底部のみが残っていた。残存する墳丘高は約20cmである。墳丘の断面では、下面に第5-2層と、その上部に2層の盛土層を確認した(図240)。

周溝は幅1.1~1.4 m、深さ約40cmの断面U字状を呈し、墳丘の四周に巡っていたと思われる。埋土はすべて墳丘からの崩落土であり、完全に埋没した後、上面は土壤化によって第5-1層に変化する。

埋葬施設は墳丘の内外に関わらず、まったく検出されなかった。墳丘上面に図示した溝状の遺構は後世の耕作痕であり、おそらく墳丘と同様に削平されたものと考えられる。

遺物は、大半が盛土中にみつかった細片であり、周溝からはほとんど出土しなかった。その中から特徴的な土器についてのみ図化を行った(図239、図版367)。1は盛土内から出土したミニチュアの平底鉢である。2は墳丘下面の調査に際して掘削した土層から出土した有稜高杯である。同じ層内からは多数の土器が出土しており、周溝の埋土をそれと気付かず掘削した可能性も考えられる。高杯は庄内式期古段階に比定され、少なくともこれより以降に10号墳が築造されたことは明らかである。

他の墳墓における周溝の堆積状況を比較検討すると、本墳墓と同様に周溝が崩落土で埋没する墳墓は

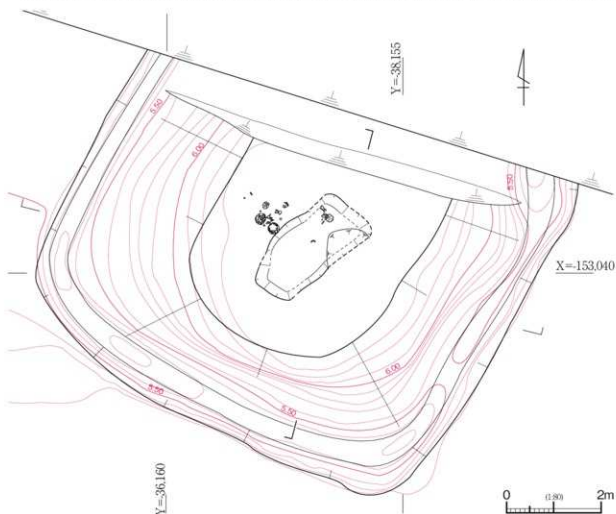


図 241 11号墳 平面

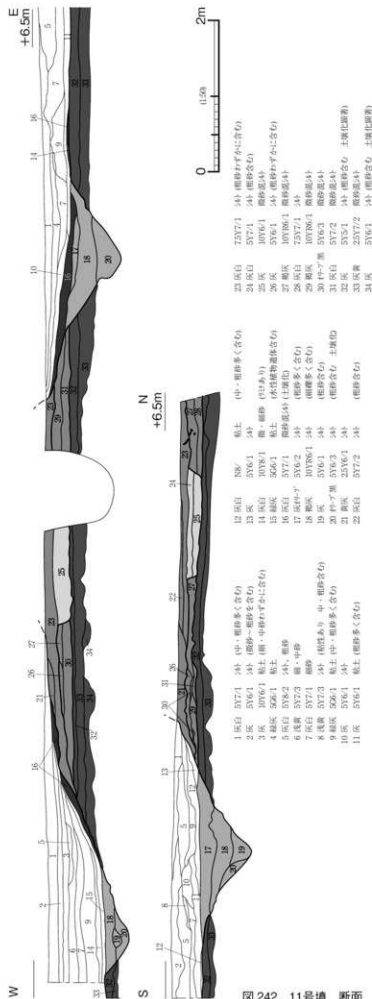


図242 11号墳 断面

古い時期に築造されたものが多く、時期が新しくなるほど周溝内の崩落土が少なくなることから、10号墳は庄内式古段階に築造された可能性が高いと考えられる。

**11号墳** 調査区の中央の北端、 $X = -153.039$ 、 $Y = -38.157$ 付近に位置する(図241、図版86)。東に10号墳、西に15号墳が位置するものの、いずれも10m以上離れており、平面図上では単独で築かれた観が強い。しかし、本調査区より北に約30m離れた道路部分の調査を(財)八尾市文化財調査研究会が行った際に数基の墳墓を確認しており、墳墓群がさらに北側へと広がっていた可能性は高い。全体的にはそれらの墳墓も同じ群の範疇と考えられるが、幾つかの集合が連続して巨大な墳墓群を形成した様子も見受けられることから、今後の調査事例に注目したい。

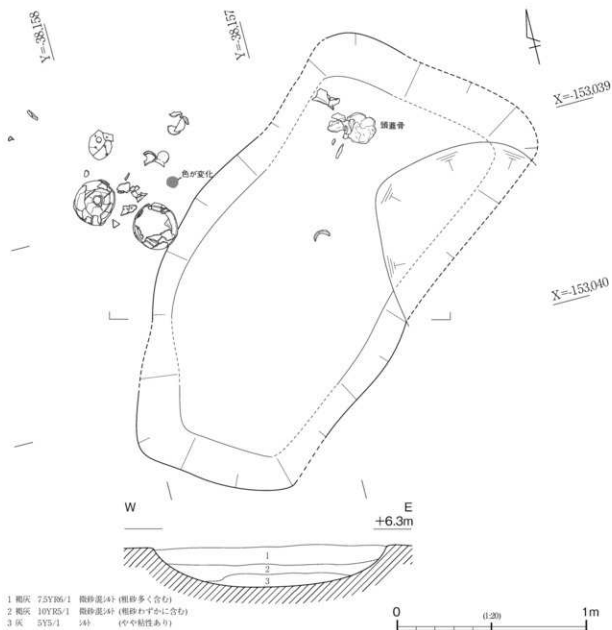
11号墳は、墳墓の北側約4分の1が調査区外にあるため、全体の確認は不可能である。しかし、周溝東側隅の屈曲部付近を認識できたことから、墳墓の全体形を推測することが可能である。墳丘上面は南西北東方向にやや長い隅丸長方形を呈するが、基底面における墳丘の規模は一辺約6.2mと、上記の形状に反してほぼ正方形であったことが明らかである。これは、周溝の幅あるいは墳丘斜面の形状による違いであるが、築造当初から意図されたものかどうかは不明である。

墳丘断面においては、下面に基盤層である第5-2層が2層と、その上部に複数の盛土層が残存する状況を確認した(図242)。盛土は、埋葬施設の構築面に境に上下に分割が可能である

ものの、下部がやや砂質であること以外に、盛土の方法等の違いは認められない。周溝は断面形がやや緩やかなV字状を呈し、幅1.4～2.1 m、深さ60～80cmを測る。埋土は、いずれにおいても墳丘からの崩落土のみであり、自然堆積物は認められない。周溝埋土の上面および墳丘斜面には、土壌化による第5～1層の形成が認められることから、それまでに周溝が完全に埋没していたことは明らかである。

墳丘断面をみると、東や南周溝に比して、特に西周溝の幅が拡大していることが明らかである。第5～2層の標高が墳丘下面と周溝外で大きく異なり、わずかに数mの違いで比高差は約40cmを測る。これは墳丘の西側斜面付近に地形の変換点が存在することを示しており、言い換えれば、傾斜が大きく変換する自然地形を利用して墳墓が構築されたと考えられる。

西周溝の埋土として残る墳丘崩落土をみると、実際の溝として見做せる部分は幅約1.5 mと、他の周溝とほぼ同様である。その代り、西側墳丘の比高差は他の斜面より40cmほど多くなるため、墳丘を大きく感じるという視覚的な効果が得られる。その効果の対象になったと思われる西側一帯は、調査区外に



- 1 堀坑 73Y186/1 掘削長(4) (掘削多く含む)  
 2 堀坑 10Y185/1 掘削長(4) (掘削わずかに含む)  
 3 坑 5Y3/1 14) (やや粘性あり)

図 243 11号墳主体部① 平・断面

あるために土地利用が不明であり、実際に意図されたものであるかどうかは定かではない。しかし、後述する22号墳や44号墳等についても同様の効果を得ようとした作爲がうかがえる。

埋葬施設としては墳丘のほぼ中央に主体部を1基検出したのみであり、周辺から副次的な埋葬は検出されなかった(図242)。墳丘盛土を上面から少しずつ除去すると、墳丘中央のやや西寄りの地点において、土器がまとまって出土した(図243、図版86-6)。ほぼ原形の状態のまま圧砕されたものと思われ、現地性が極めて高い遺物と考えられる。また、盛土を除去する以前の墳丘上面では、遺物の存在を確認できなかったことから、これらの遺物は墳丘上面に設置されたものではないことが明らかである。

墳丘盛土を10cmほど除去した面において、上記の出土土器は全形が露わとなり、同時に主体部①の掘形を検出した。これらのことから、上記の遺物は、埋葬施設の構築面において墓坑の西肩に正置され、そのまま主体部と共に封土されたものと考ええる。

主体部①は、墓坑の平面がやや歪な隅丸長方形を呈し、検出面の規模は幅0.9~1.3m、長さ約2.5mを測る。墓坑の北東部分が後世の攪乱によって失われるものの、全体的に残存状態は良好である。墓坑の断面は緩やかな弧状を呈し、深さは最大で約31cmを測る。墓坑の埋土は墳丘盛土と同質であり、ほぼ水平に堆積する様子が看取される。埋土から土器の細片が出土するものの、墳丘盛土と同様の第V様式形甕等である。墓坑北側の底面付近からは上顎骨・下顎骨・歯片が出土し、鑑定の結果、被葬者は35歳以上の成人であることが分かった。また、人骨の出土位置から頭位は北東方向であり、墓坑の主軸は

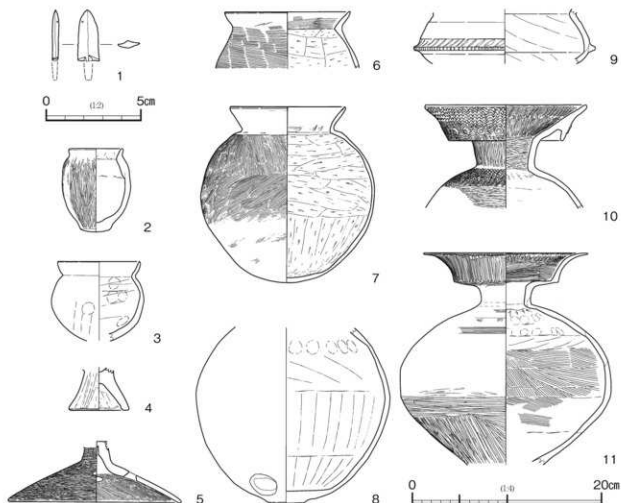


図244 11号墳 出土遺物



真北から約45° 東に振る。なお、埋土には木棺設置に伴う裏込土が確認されないことや、埋土中に木質遺物が遺存しないことから、遺体は墓坑に直葬されたものと推測する。

遺物は周溝や盛土から出土するものの、大半は第V様式形甕や高杯等の碎片であり、下層の遺物が混入したものと推測する。墳墓の周辺からも遺物がまともに出土したため、墳丘上から転落した可能性を考慮して接合の有無を確認したものの、積極的に墳墓の資料と判断できるものはなかった。下面の第5-2b(2)面では、11号墳の南側において多数の堅穴建物を検出しており、むしろ、それらに関連する資料であった可能性が高いと考える。

遺物としては、金属製品に銅鉄、土器に小形品・甕・手培形土器・壺等が挙げられる(図244、図版367~369)。1は墳墓の東側の第5-2層から出土した有茎式銅鉄である。刃部が不整形であり、鉄身の先端付近には銕欠けもみられる。2・4は盛土内から出土したミニチュア甕と脚台である。7は周溝上層の第4層から出土した布留形甕である。9は墳墓の南側の第5-2層から出土した手培形土器である。3・5・6・8・10・11が主体部①の北東部から出土した土器である。3は小形鉢、5はおそらく椀形高杯の低脚部と思われる。6は左上りの叩き目が残る第V様式形甕である。8は壺の



図245 31号墳 平面

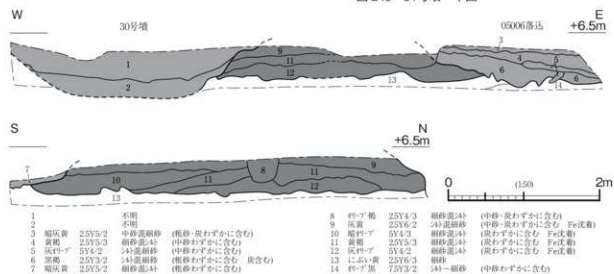


図246 31号墳 断面

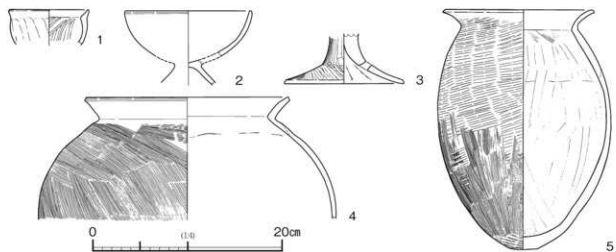


图247 30号坑 平面、出土遗物

体部のみであるが、底面付近に焼成後に施された穿孔が認められる。10・11は口縁部や肩部に櫛描直線文・波状文等を施す加飾壺である。これらの遺物から、11号墳の築造は庄内式期古段階に比定できる。

**31号墳** 調査区中央の墳墓群の中では最も東側にあり、 $X = -153.070$ 、 $Y = -38.128$ 付近に位置する(図245、図版87)。第5-1層の除去中、周囲と異なる土質を検出したものであり、平面は丸味を帯びた隅丸方形を呈する。墳丘の規模は長軸約5.1m、短軸約3.4m、残存高約40cmを測る。

墳丘断面において、墳丘外に連続する基盤層が確認できないことは、他の墳墓と大きく異なる特徴である(図246)。周溝については、南側に溝状の凹みを検出したものの墳丘を巡る様子がないことから、後述する51号墳と同様に墳丘のみであると判断した。埋葬施設は墳丘内外のいずれからも未検出である。ただし、墳丘北東部に後世の掘乱が存在することから、これによって失われた可能性も考えられる。

遺物は墳丘盛土から第V様式形甕や高杯の碎片が出土するものの、図化には至らなかった。これらのことから、31号墳の築造時期は、庄内式期最古段階以降であることは明らかであるが、詳細は不明である。

なお、盛土や周溝において他の墳墓と異なる特徴を持つ本遺構を「墳墓」とする点については、人為的に盛られた高まりが存在することは確かであり、隣接する溝に関連するとは考えにくいことから、周辺遺構の状況と同規模の墳墓の存在を鑑み、31号墳とした。

**30号墳** 調査区中央の東寄り、 $X = -153.070$ 、 $Y = -38.136$ 付近に位置する(図247、図版87)。墳丘上部が削平されるものの、全体的な形状は良好に残存する。墳丘の平面は隅丸方形を呈し、基底面における規模は長辺が約8.0m、短辺が約7.5mを測る。

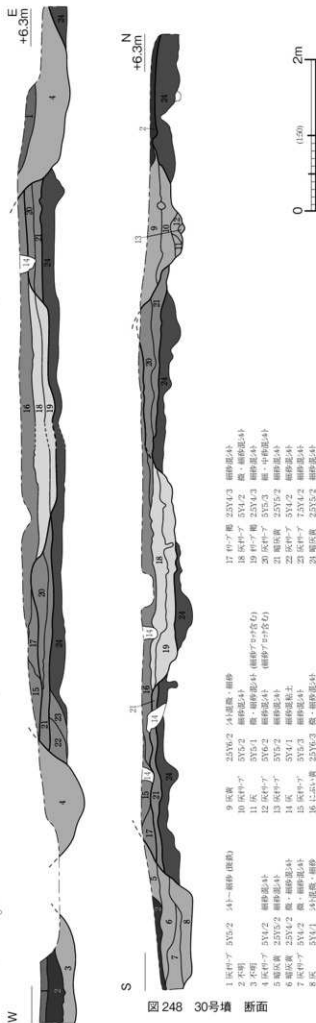


図248 30号墳 断面

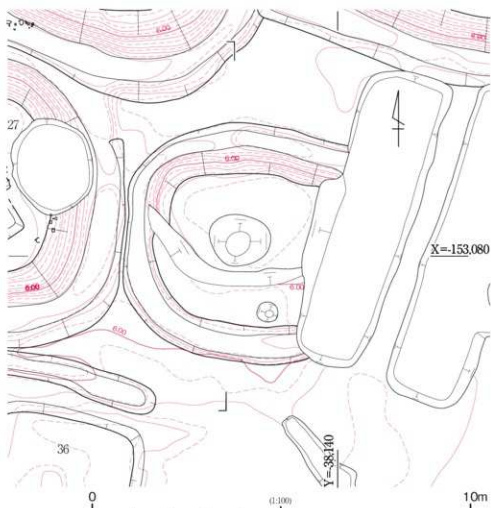


図 249 33号墳 平面



- 1 灰砂・ア 5Y5/2 細砂混粗砂 (灰わずかに含む Fe沈着)
- 2 灰砂・ア 5Y4/2 細砂混(砂) (粘土・(砂)アを含む Fe沈着)
- 3 腐灰黄 25Y4/2 中砂混粗砂 (灰わずかに含む Fe沈着)
- 4 灰砂・ア 5Y5/2 中砂混粗砂 (灰わずかに含む Fe沈着)
- 5 灰砂・ア 5Y4/2 細砂混(砂)
- 6 灰砂・ア 7.5Y5/2 中砂混粗砂

- 7 灰黄 25Y6/2 中砂混粗砂
- 8 ア・ア間 25Y4/3 細砂混(砂) (Fe沈着)
- 9 腐灰黄 25Y4/2 細砂混粗砂 (Fe沈着)
- 10 ア・ア間 25Y4/3 (砂)・粗砂 (Fe沈着)
- 11 ア・ア間 5Y3/2 細・中砂混(砂) (ア・ア)

図 250 33号墳 断面

墳丘断面では、下面に基盤層である第5-2層を1層検出し、その上部に複数の盛土層を確認した(図248)。墳丘盛土は、埋葬施設の構築面を境に上下に分けられるものの、土質や盛土の方法等に違いはみられない。周溝の断面形は皿状あるいはU字状を呈し、幅1.4m~3.0m、深さ約30cmを測る。第5-1層の除去面では墳丘の北側に土質の異なる部分があり、その他の堆積物を取り除くと、図示したように平面が馬蹄形の周溝となった。



図 251 33号墳 出土遺物

墳丘北側の断ち割り調査を行ったところ、下面に周溝の存在することを確認した。埋土の前後が上記の形状を表出したものであり、当初は四周に

溝の巡っていたことが明らかである。しかし、周溝の埋積途中に図のような景観があったことは確かであり、周溝の両端が僅かに広がる点は不自然と考える。人為的に本形状を形成した可能性もあるため、30号墳の平面として表示することにした。ただし、この陸橋状高まりについての用途等は不明である。

埋葬施設については、墳丘上の精査では検出することが不可能であった。墳丘の下面および断面の確認において、墳丘中央付近に方形の凹みを検出した。そこから墳丘断面を再検討した結果、墓坑の存在が明らかとなった（図248）。断面から想定される墓坑の規模は、長さ約3.8m、幅約3.0m、高さ30cmである。内部から遺物や骨片等の出土は無く、埋土の状況から木棺を使用した様子も認められない。出土遺物は少量ではあるが、小形鉢・椀形高杯・高杯・甕等がみられる。（図247、図版369・370）。1・5は南東、2～4は南西の周溝からの出土した土器である。5は周溝底面に原形のまま圧砕された状態の第V様式形甕である。30号墳は庄内式期中段階頃に築造されたものと思われる。

**33号墳** 調査区中央のやや東寄り、 $X = -153.080$ 、 $Y = -38.142$ 付近に位置する（図249）。西側には27・28号墳が隣接する。墳墓の東側や墳丘上が操車場による攪乱を受けるため、あまり残存状態は良好ではない。墳丘は隅丸方形を呈し、南北方向の長さが約4.5mを測る。墳丘の下面には2層に分かれる基盤層の第5～2層があり、その上部に盛土層が残る（図250）。周溝は幅0.65～1.0m、深さ10～20cmの断面が逆台形を呈し、墳丘の四周を巡っていたと推測する。埋土から、周溝は墳丘の崩落土によって埋没した後、最上層が土壌化によって第5～1層と化したことがわかった。埋葬施設は墳丘の内外ともに検出されなかった。

遺物は周溝内からわずかな細片が出土し、図化が可能な遺物を表記する（図251、図版370）。1はやや外反する広口壺の口縁部片である。周溝の埋積状況と合わせると、墳墓群の中では古い段階に築造されたものと思われる。

**61号墳** 33号墳の南側、 $X = -153.088$ 、 $Y = -38.142$ 付近に存在したと思われるものの、墳丘および周溝の明確な形状を認識するには至らなかった。現地調査では、東西約4.7m、南北約1.7mの範囲にわずかな高まりを検出したものの、周囲の断ち割り調査を行った結果、周溝等が検出されなかったために次点扱いとした。しかし、その後の調査と整理作業において、31号墳や57号墳のように周溝の不明瞭な墳墓が存在することや、地形的に高所であるために墳丘の上部が削平され、基底面の一部だけが残存したと思われることから、墳墓の存在した可能性

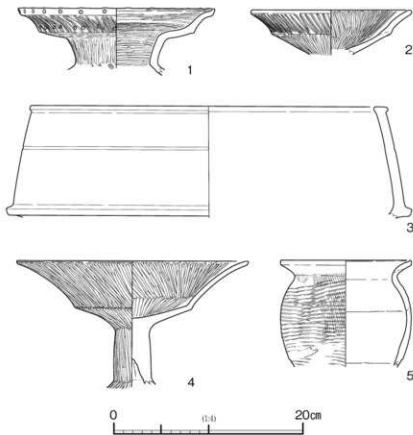


図252 61号墳 出土遺物

があるとして再評価したものである。したがって、墳丘・周溝・埋葬施設等の遺構に関する情報が無く、位置情報のみを付図11などの全体図に表示する。

遺物は該当する地点の第5-2層と第5-1層内からまとまって出土した。出土点数は多いものの、土器集積等の遺構のように集中したり、原形に近い状態で圧砕されたりしていないことから、上面の耕作に伴う搅拌や整地に際し、元位置が乱されたものと解釈する。

遺物には高杯・鉢・甕・壺がみられる(図252、図版370)。1は口縁端部と屈曲部の外面に竹管文、頸部下に櫛描波状文を施す複合口縁壺である。口縁部外面のミガキ調整が上下に反復して施され、暗文風にみえる。同様のミガキ調整を行うものが、2の高杯である。3は大型の複合口縁壺であり、胎土が香東川流域産と思われることから、搬入品と判断する。これらの土器は、弥生時代後期末から庄内式期古段階に比定され、同墳墓もその頃に築かれたものと考えられる。ただし、下面の第5-2b面において、付近からは建物跡や土坑が検出され、それらの出土遺物との間に型式差があまりみられないことから、混入した恐れもあり、注意が必要である。

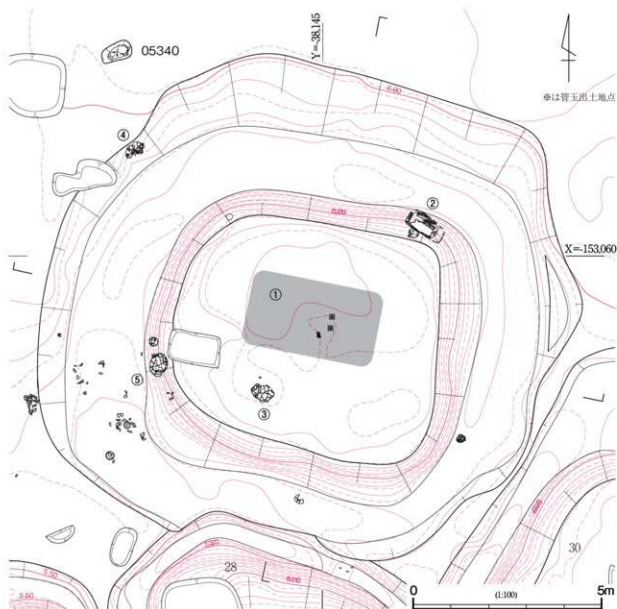
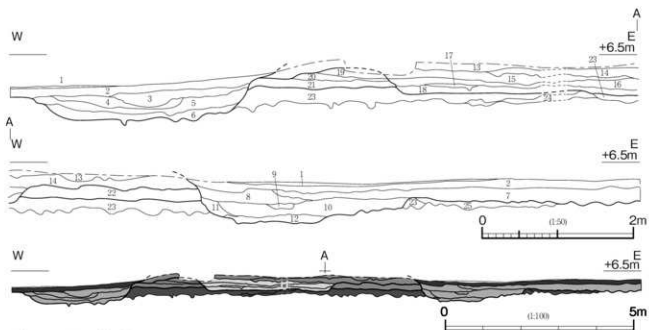
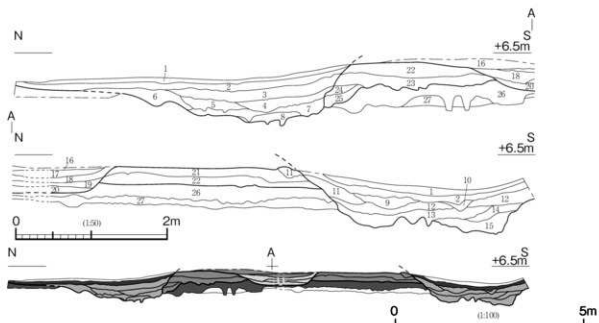


図 253 29号墳 平面



1 灰	75Y4/1	粘土-微砂	10 灰-7 黑	5Y3/2	粗砂混(4)	18 灰砂-7	5Y4/2	中砂・粘土混(4) (70:30)
2 灰-7 黑	75Y3/1	粗砂混(4) (中・粗砂含む 既設)	11 灰砂-7	5Y4/2	粗砂混(4)	19 灰黄粉	10YR5/2	中砂混(4)
3 灰砂-7	5Y4/2	粗砂混(4) (粘土70:30含む)	12 暗灰黄	25Y4/2	粗砂混(4) (粘性あり)	20 暗灰黄	25Y4/2	粗砂混(4)
4 灰-7 黑	75Y3/2	粗砂混(4)	13 浅黄	25Y7/3	中・粗砂	21 灰砂-7	5Y4/2	粗砂混(4)
5 灰砂-7	5Y3/2	粗砂混(4)	14 灰・黄粉	10YR5/4	粗・中砂混(4)	22 暗灰黄	25Y4/2	粗砂混(4)
6 暗砂-7 灰	5GY4/1	微砂混(4) (粘性あり)	15 灰黄粉	10YR5/2	中砂混(4)	23 灰-7 黑	75Y3/2	粗砂混(4)
7 黄粉	25Y5/3	微・粗砂混(4)	16 暗灰黄	25Y4/2	粗砂混(4)	24 灰砂-7	5Y4/2	粗砂混(4)
8 暗灰黄	25Y5/2	微・粗砂混(4)	17 灰砂-7	5Y5/2	4砂混粗砂	25 黄粉	25Y5/3	微・粗砂混(4)
9 灰砂-7	5Y3/3	微・粗砂混(4)						



1 灰	75Y4/1	粘土-微砂	12 灰-7 黑	75Y3/2	粗砂混(4)	20 灰砂-7	5Y4/2	中砂混粘土混(4) (70:30)
2 灰-7 黑	75Y3/1	粗砂混(4) (中・粗砂含む 既設)	13 灰-7 黑	75Y3/2	中・粗砂混粘土混(4) (70:30含む)	21 灰黄粉	10YR5/2	中砂混(4) (宮玉出土)
3 灰砂-7	5Y4/2	粗砂混(4) (粘土70:30含む)	14 灰-7 黑	75Y3/2	粗砂混(4)	22 暗灰黄	25Y4/2	粗砂混(4)
4 暗砂-7 灰	25GY4/1	粗砂混(4)	15 灰砂-7	5Y4/2	中砂混粘土混(4) (70:30)	23 灰黄	25Y7/2	中・粗砂混(4)
5 灰砂-7	5Y4/2	粗砂混(4)	16 浅黄	25Y7/3	中・粗砂	24 灰黄	25Y4/1	粗砂混(4)
6 灰-7 黑	75Y3/2	粗砂混(4)	17 灰・黄粉	10YR5/4	粗・中砂混(4)	25 灰-7 黑	25Y4/3	粗砂混(4)
7 灰-7 黑	5Y3/2	粗・中砂混(4)	18 灰黄粉	10YR5/2	中砂混(4)	26 黄粉	25Y5/3	粗砂混(4)
8 暗砂-7	5Y4/3	粗・中砂混(4)	19 暗灰黄	25Y4/2	粗砂混(4)	27 灰白	75Y8/1	中・粗砂
9 灰砂-7	5Y4/2	粗砂混(4)						
10 灰-7 黑	75Y3/1	粗砂混(4) (70:30含む)						
11 灰-7 黑	25Y4/3	粗砂混(4)						

図 254 29号墳 断面

29号墳 調査区のほぼ中央、 $X = -153.062$ 、 $Y = -38.145$ 付近に位置する(図253、図版88~90)。本墳墓の南側は28・30号墳等が隣接し、大小墳墓が密集する一方、北半側はやや離れた位置に10・11号墳がみられるのみで空地が多い。調査区中央の墳墓群のうち、27~31・33~35号墳といった北東部の集合体に限定する場合、その中では最も規模の大きな墳墓となる。墳丘の平面は東西にやや長い隅丸方形を呈し、基底面における規模は長辺約7.8m、短辺約6.7mを測る。墳丘断面では、下面に基盤層である第5-2層を検出し、その上部に複数の盛土層を確認した(図254)。これらの盛土は、埋葬施設構築面を境に上下に分けることが可能であるものの、特に土質や構築方法等に違いは認められない。

周溝は幅1.5~4.0m、深さ30~50cmの断面形が皿状を呈する。周溝の埋土は墳丘からの崩落土が大半を占め、最上部は土壌化による第5-1層が形成される。また南側周溝の埋土を詳細に観察すると、

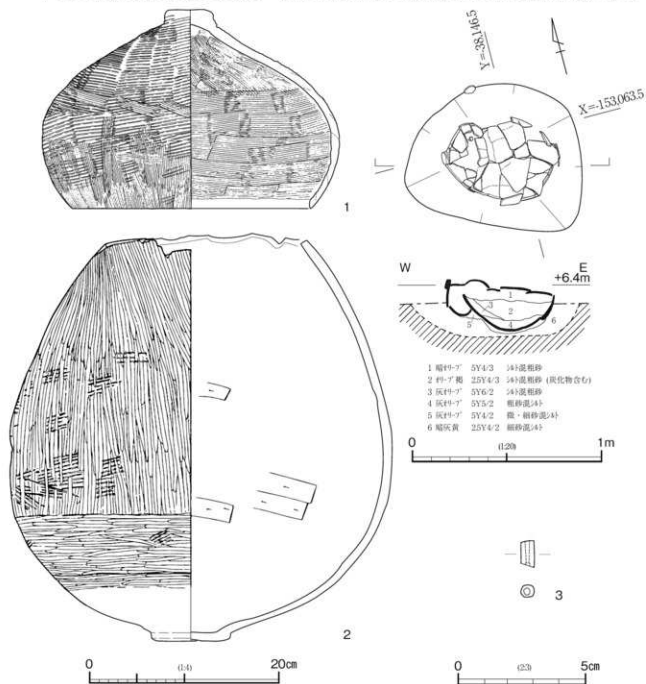


図255 29号墳埋葬施設③ 平・断面、出土遺物



29号墳の周溝は、28号墳周溝に堆積する崩落土を掘削して形成されることが明らかであり、29号墳は28号墳より後出することがわかった。

埋葬施設としては、墳丘側に主体部1基・木棺1基・土器棺2基、墳丘外に土器棺墓1基を検出した(図253)。墳墓北西の周溝外においても土器棺墓1基を検出したが、これは墳墓からやや離れることから、単独の遺構として記載する。

主体部①は、墳丘盛土を除去した基盤層上面において痕跡を確認した。墳丘中央のやや北寄りに位置し、東西方向に長い隅丸方形を呈したと推測されるが、現地調査における遺構検出時は平面形が不明瞭であったため、本文では推定位置を図示するに止める(図253)。しかし、墳丘断面では明瞭な落込みを確認することが可能であり、水平堆積の盛土が寸断され、底面は基盤層の中位に達することから、墓坑は掘り込みによって構築されたことがわかった。推測される墓坑の規模は、幅約2.0m、全長約3.5m、深さ約27cmである。

なお、墓坑内から木質遺物や人骨は検出されず、埋葬方法等の詳細は不明である。しかし、埋土をほぼ除去した墓坑の底面付近において、土器の細片と共に管玉2点を検出した(図253※印)。管玉は、墓坑の中央から東寄りの位置に、約30cm離れた南北に各1点ずつが出土した。この上層からも管玉1点のみ見つかり、計3点となる(図260-1~3、原色図版11-3、図版371)。いずれもグリーン

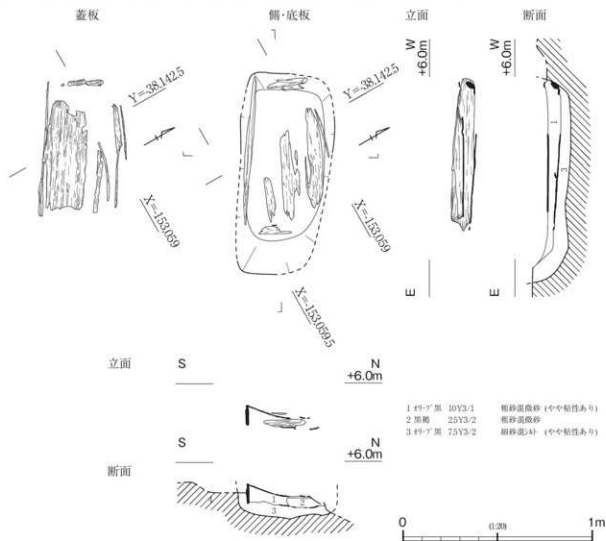


図256 29号墳埋葬施設② 平・立・断面

タフ製で、全長 $1.2 \cdot 1.0$  cm、直径 $5.0 \cdot 4.5$  mm、両面から穿孔する。残念ながら、これらの管玉と遺骸の関係は不明である。

同様に墳丘上に設置された埋葬施設③として、土器棺が挙げられる(図255)。埋葬施設③は主体部①の南西に位置し、墳丘検出時に土器が露頭したものである。墓坑は変形した楕円形を呈し、長径約92 cm、短径約75 cmを測る。土器棺は開口部を真北から約 $75^\circ$ 西に振り、やや上方に傾けた横位の状態で据え置かれる。土器棺は上半部を打ち欠いた大小の壺を合わせ口にしたものである(図255-1・2、原色図版11-3、図版372)。棺内の土壌を洗浄したところ、グリーンタフ製の管玉が1点出土した(図255-3、原色図版11-2、図版371)。半載状態の欠損品であるが、破断面が丁寧に研磨されていることから、再利用したか、故意に分割したものと考えられる。なお、石材としては本墳墓から出土した他の管玉と同一であるが、本例は被熱によるものか、黒変する。

埋葬施設②は、墳丘の北東斜面に位置する木棺である(図256)。墳丘の精査を行った際に検出したものであり、盛土が崩落したことにより露頭したものである。墓坑は幅40~50 cm、長さ約1.05 mの隅丸長方形を呈する。埋土は計3層を検出し、棺床から裏込めまでを同一層で充填することから、木棺を組み立てながら埋めたものと考えられる。木棺はスギの板目材を用いた組立式木棺であり、遺存状態は良好ではないものの、すべての部位の棺材が出土した。残存する部材の位置から推定される棺身の寸法は、全長約85 cm、幅約40 cm、高さ約12 cmである。木棺や墓坑の内部、いずれからも遺骸や遺物は出土しなかった。しかし、木棺の埋納された墳丘斜面のすぐ上位部分からは、庄内形甕(図260-1)1個

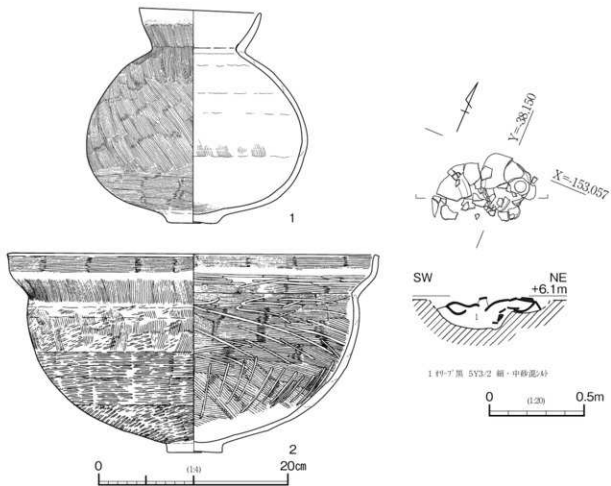


図257 29号墳埋葬施設④ 平・断面、出土遺物